
『禁・三国恋姫』

こんたそば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『禁・三国恋姫』

【Nコード】

N6422Y

【作者名】

こんたそば

【あらすじ】

後輩が持つて来たゲームをサークル仲間と共にクリアしようとスィッチを入れた俺は、自分自身が育ててきたキャラクターに憑依した上でゲームの世界に入り込んでしまった。

ヒロインの攻略方も、ストーリーの行方も分からないがやれることはやっていくしかない！

目指せ、ハッピー・エンド！！できればヒロインと添い遂げたい！！

プロローグ

プロローグ

俺こと、北郷一刀はとある大学の3年生。

専攻は教育学部、趣味は歴史。戦国時代や三国志などのことが話題に上るとちよつと燃える。

1年生の時に『歴史研究同好会』というサークルを立ち上げて、日夜資料を読み新しい発見を模索して……いるようなことはない。趣味の合う友人や後輩と共に会話して盛り上がったたり、戦国武将や三国志の英雄をモチーフとした漫画やゲームをして楽しい時を過ごしたりしている。

最近、特にはまっているのが後輩の篠塚健治が持って来た『禁・三国恋姫』というエロゲである。

ちなみに媒介はD C Pという小型の携帯ゲーム機だ。ドリーム・キャスト・ポータブルD C Pの魅力は無線ネットワークを使い複数の人間で同じゲームをプレイし攻略できること。

『禁・三国恋姫』というのは、一昨年辺りにパソコンゲームとして発売され、バグや修正を経てD C Pにおいて発売されることになったもので価格は新品で8860円と高額だが、購入者の反応は上々である。

ヒロインは全員可愛いし、そのヒロインたちと絡むシーンCGもかなりエロくて最高である。

ただ、そこまで行き着くには長くて辛い過程がある訳で……。

- ・ まず、プレイヤーは自身の分身となるキャラクターを作成する。
- ・ その後、自身が所属する勢力を選ぶ。【蜀・魏・呉・袁・漢・南】の中からひとつ。

- ・ 難易度は南蛮が『Very Easy』、袁家が『Easy』、劉蜀が『Normal』、曹魏が『Hard』、孫呉が『Very Hard』、漢王朝が『Maniac』となっている。

- ・ ネットにアップされるシーンCGは南蛮か、袁家、もしくは劉蜀の三つの勢力がほとんどで曹魏や孫呉はもとより、漢王朝のシーンCGがアップされるのは見たことが無い。つまり攻略者がいないわけだ。

- ・ ちなみにプレイヤーキャラクターがヒロインたちと接触できるようにするためには、キャラクターのレベルを上げて能力値を上げ、將軍又は軍師として登録される必要がある。つまり、周回プレイは必須。加えてひとつの勢力で利用できるのは1人のキャラクターのみ。しかも他の勢力では使用不可という鬼畜ぶり。

で、俺たち『歴史研究同好会』では話し合いの結果、難易度が『Very Hard』の孫呉を攻略するべくキャラクターをエディットした。ちなみに名前を考えるのが面倒であった為、孫呉ルートヒロインとして登場しない孫呉の武将の名前をつけることにした。俺の場合は、太史慈だ。真名は本名の一刀を使用。

- ・ そうそう、【真名】っていうのは『禁・三国恋姫』の世界観に

あるその人の個性や生き様を表す神聖な名前で、親兄弟や信頼の置ける仲間などにしか教えないものだそうだ。異性に真名を教えるっていうことは、そういう関係になったという合図らしい。

ちなみに一緒にプレイする人間をここで紹介しておく。

篠塚健治 後輩 使用キャラクター名：魯肅

笹本京一郎 先輩 使用キャラクター名：徐盛

及川肇 同級生 使用キャラクター名：韓当

といった感じだ。真名は俺と同じように本名の名前を使用している。

さつきも説明した通り、『禁・三国恋姫』というエロゲの真髓に辿り着くまでには最低でも2周はしないとけないということで、俺たちは1周目と2周目のイベントフラグを一切無視して、自分の分身たるキャラクターたちの育成に専念した。おかげで2回とも独立後の曹操軍との戦いで敗北しゲームオーバーとなった。

1周目の時は「まあ、仕方がないさ。よし、次だ!」と思っただけ。

2周目の時は「王が不在って何だよ、これ!? 緊急事態、王が戻るまで防衛をしてくれ……」って、10万の兵をたった4000人とか無理だろ!! はあはあ、王発見? よし、盛り返すぞ! って、曹操軍の刺客によって王が討たれた!? 孫呉軍の士気がガタ落ち!!? ふざけんなああああああ!!!!」ということで、4人で暴れた。

で、本命の3周目に至るわけだ。

「かずぴー、恨みつこなしやで」

「勿論だとも」

「ふふふ、楽しみだね」

「先輩方、こればかりは譲りません！」

俺たちは色とりどりのDCPを机の上に置き、向かい合っている。

「覚悟はいいな、お前ら」

俺の掛け声に頷く3人。

「いくぞ！最初はグー、じゃんけんぽん！」

俺…パ―

健治…チヨキ

笹本先輩…パ―

及川…パ―

「やったー！僕は本命の陸遜ちゃんをお願いします」

・ 最後に言い忘れていたが、恋人になれるヒロインは1周につき1人と決まっている。ハーレムは不可能ということだ。ただ、無線ネットワークを繋げて一緒にプレイしている人間にはシンCGが

送られて共有することができる。

結局、俺は負け越したのだが本命であつた孫呉の王である孫策は皆選ばなかった。俺が彼女を選ぶといつたら、皆に『お前、マジかよ』みたいな目で見られた。悪いかよ、コンチキショー。

で、4人揃つてDCPのスイッチを入れたのだが……

気付けば、俺は鮮やかな紅い鎧を身に纏い荒野に立っていた。

健治はどこぞの商人みたいな服を着込みその手には扇、笹本先輩は白い服の上に青い鎧を身に纏い大きな斧を背負い、及川はモンゴルの遊牧民が着ていそうな民族衣装みたいな奴を着ていた。

「「「「「は…どう?」」」」」

一話

一話

20年近く生きてきたが1度も遭遇した事の無い今現在の状況に戸惑いながらも、俺は遠くの方に見える山々を眺めて心を落ち着かせていた。

ありえない…と切って捨てることは簡単だが、身に纏う鎧の感触や重量感、頬を撫でる風の匂いなど現実味を持たせるには十分なものだ。間違いない、考えたくはないが俺たちはゲームの世界に何らかの理由で紛れ込んでしまったのだ。

元の世界に帰れる保障は無いけど、生きていくためには……って、

「俺がシリアス風味にあれこれ考えているのに、お前らは何やってるんだよっ!!」

「先輩、考えるよりも先に自分の状態を確認しないとやばいですって。兵士数がゼロになっているから、ここで賊に襲われたらまずいですって」

「そうか？」

健治はそう言って緑色のDCPを操作する。よくよく見れば笹本先輩も青色の、及川も赤色のDCPを操作している。

彼らに倣って俺も手に持っていた黒色のDCPを操作して、自身の状態を確認する。

「……とりあえず、育ててきた『太史慈』の身体らしいな。これなら、しばらく兵はいなくても大丈夫だろ」

気配を感じて顔を上げるとニコニコと笑みを浮かべた笹本先輩が目の前に立っていた。

「そういえば一刀くんって、資金が溜まったらキャラクターや部下の強化に専念していたよね。ちなみに一刀くんの攻撃力ってどのくらいなの？」

「えーと、……2万と10ですね」

「『2万!?!?』」

俺と笹本先輩がいる所からちょっと離れた所にいた2人も俺の突然の宣言に驚き、作業を中断させて近くにやってきた。

3人が俺のDCPの画面を食い入るように見つめ、頬を引き攣らせた。

【ステータス】

名前：太史慈 字：子義 真名：一刀 資金：190

体力：6000 攻撃力：20010 防御力：15000 移動力：200

兵士最大数4000人

武器：名もなき剣（攻撃力：10）

スキル（自発）

『大号令Lv3』：3ターンの間、自軍部隊の攻撃力が15%上昇し、毎ターン15%の兵士数を回復する。

スキル（自動）

『指揮Lv3』：部隊に所属する兵士の攻撃力が30%上昇

『援護防御Lv3』：近くの自軍部隊の防御力を50%上昇

『援護攻撃Lv3』：近くの自軍部隊の攻撃力を50%上昇

「かずぴー、いくらなんでもこれはないわー」

「ゲームバランスの崩壊もいいところですって。確か孫呉編の最大の難関である曹魏軍の曹操でも攻撃力3000に、固有武器『絶』の攻撃力3000を足しても6000ですって。まあ、あちらの最大兵士数は10000人ですけど」

「一刀くんの部下も大概チートだね。その分、コストがべらぼうに高いけど」

「言わないで下さいよ、笹本先輩」

「ハハハハハ」

俺たちは談笑に近い雰囲気の中、自分自身の状態を把握していった。

「さて、これからどうする？」

俺がこう切り出すと及川と笹本先輩が腕を組んで悩み始めた。

これがゲームの場合、悩む必要もなく孫呉編の主要キャラクターの1人である黄蓋に連れられて、一兵士or一將軍、一軍師として雇用される訳だが。

「ぶっちゃけ、袁術軍の客将となつてゐる孫呉軍に行くメリットはないですよつて。資金半分と兵を雇うコストが2倍になるのは痛すぎです。特に北郷先輩には」

健治が皮肉を交えて言い放つた言葉に及川と笹本先輩は大きく頷いた。

くそう、別にいいじゃないか。最強無敵の軍つて憧れるだろ。

「ここで僕は、最初の内は孫呉軍に加わずに建業などの街で太守となることを提案するつて。この世界では官位をお金で購えたはず。ゲームをやっていたときは孫呉編にどうせ行くのに無駄な選択肢だなつて思っていたけど、今現在の状況なら自由気儘に動ける拠点も得られて、兵力や資金を集めるのに丁度いいと思うつて」

「うん。その流れで進むつていうことは孫呉軍が袁術軍から独立した辺りで同盟なり、不可侵条約を結ぶつてことか」

「憧れのヒロインと生身で絡めるつて思っていたけど、それよりも自分の命の方が大切ですから」

確かに…、と健治の言葉に俺自身同意する。

あの小麦色の母性を中心に色んな所を俺の自由にしたいっていう気持ちは勿論あるが、それよりも生きて元の世界に戻りたいっていう気持ちの方が強い。

「当面の方向性はそれでいいかな？」

と、笹本先輩が俺たちの意思を確認するように見渡す。

「それでええと思うで。ワイとしても、拠点があるほうが動かしやすいんや、アレ」

及川はどこか遠くを見ながら了承の言葉を発した。そういえば、及川のキャラクターってどういう方向性だったっけ？健治は完全に内政向きなキャラクターだったし、笹本先輩のは奇襲をかけて敵の数を減らすことに特化していたはず。及川のキャラクターが活躍していたのって……反董卓連合の時の関攻めの時か。つまり攻城戦が得意なキャラクターってことだよな。

でも、それがなんであんな態度になるんだ？あいつの武器ってなんだったっけ？

「それじゃあ、先輩方。資金50000で、建業の太守の座と官位を買いますよって。ぽちっとな」

【ピロリン♪『太史慈』は『建業の太守』となった】

「5万をポンつと出すとはすげえ……………って、太史慈って俺じゃ

ん!？」

周囲を見れば3人に「何を今更」的な眼で見られていた。

「王が一番強い者を置いておかないと拙いでしょ。固まるのも偶にはいいけど、今はさっさと建業に向かうよ。太守さま」

「そうやで、かずぴー。色々とせなんことは山ほどあるんやからなま、太守の場合は文字通り山の如くあるんやろうけど」

「先輩、僕らも“少し”は手伝いますから、頑張つて生き残りましたよね。余裕が出来たら、ヒロインとにやんにやんしたいですって」

「健治！本音が駄々漏れだぞー！」

「大丈夫です、ワザとですからって」

おいおい。生き残れるのか、このメンバーで。先々が不安だ…。

二話

二話

健治の資金50000を払い、俺は建業の太守となった。

建業といえば孫呉の本拠地となる場所ではないかと思うかもしれないが、孫堅が生存していた時の本拠地は荊州の長沙であり、孫策らが袁術軍の客将となったのなら寿春の近辺にいるだろう。

俺が建業の太守となつてはじめにやったのは、ユニットの作成だった。資金は健治持ちで。

ここで『禁・三国恋姫』のユニットについて説明しようと思う

・ まずユニットの追加についてだが、国のレベルによって生み出せるユニットのランクや種類が変わってくる

・ 現在はレベル1の状態なので、一番弱い『新米指揮官』コスト：150を作成しようと思う。

・ その後作成したユニットに名前をつける。今回は分かりやすいように【田中】とつけておこう。

【プロフィール】

名前：田中

体力：300 攻撃力：160 防御力：120 移動力：100

兵士最大数：100人

武器：名もなき剣（攻撃力：10）

- ・ 作成したユニットは一度作成したら消去できない。代わりに、最大100人まで作成できる。ただし周回プレイには持ち越せないので、そこら辺は注意しよう。

- ・ 部下になる兵士もここでつけておく。が、現在の建業の街に必要なのは戦闘に必要な兵士ではなく、俺たちの街を築く要員となるわけで、今回は建築スキルを持つ市民兵をつけておく。

名前：田中隊 兵種：市民兵

体力：3 攻撃力：2 移動力：100 コスト：6（1人につき）

スキル（自動）

『建築Lv3』：建物をすごい速さで建てる事が出来る。兵士数によって効率があがる

- ・ と、まあこんな感じである。

ゲームであれば、ユニットを量産して建築や農業・漁業、武器防具開発など片っ端からやれたのだが、悲しいかな。この世界には俺たちと同じように生きている人間が多く存在する。彼らを蔑ろにして建業の発展はない。

ということ、最初は建業自体を住みやすい街に変えていこうと思う。

俺たちは公共事業として、街で暇していた若者や仕事が無い者たちを雇って、メインストリートの拡張をして人通りを楽にした。その際、立ち退いてもらった方々には田中隊が立てた別の家に移り住んでもらったり、メインストリート脇に建てた店に入ってもらったりした。

街道整備なのだが、これは他の街と道を繋ぐことで流通をよくするために必須なのだが、今のところは近くの村に伸ばす程度にしておこう。

治安をよくするために元の世界でいう交番を建業の街の至る所に作った。何かあったときのためにいくつかの交番には『新米指揮官』のユニットを何体かおいておくでしょう。

内政に関しては次の機会にでも…ということ。

「健治の財布はとんでもないことが分かった所で、笹本先輩…ゴホン。徐盛、各地の状況を説明してくれ」

「一刀くん、慣れないのは分かるけどしっかりしてよ。まあ、いいや。とりあえず、僕の兵たちを各地に散らばらせて分かったことだけど、長沙の太守の名前は孫文台っていうんだってさ。年代に関しても『禁・三国恋姫』の舞台よりも結構前みたいだよ」

「それじゃあ、しばらくの間は内政オンリーやな。しかと農業や漁業、武器防具の開発等をやって地力をあげておけっていうゲームの

神さまからの啓示やる。商業に関しては健治がやるやろつから、ワイは開発関係をやるかな。先輩は何をします?」

「そうだね、今まで通り情報管理と農林水産関係は僕がやるのかな。一刀くんは、一般兵士の鍛錬っていう所じゃない?」

「「「ま、太守の仕事をきっちりやってからの話だけど(ね・って・な)」「」」

「それひどくね!?!」

結局、俺の意見はまったく取り入ってもらえず、部屋に戻った俺は仕方なく判子を右手に、【ぺたこん】【ぺたこん】と目を通した書類に判を押していく日々。

それから暫く経った、雲ひとつ無い青空でお洗濯日和だなあと思つて窓の外の景色を眺めていたある日、

「大変ですつて!海賊が現れましたー!」

息を切らしながら健治が俺の執務室に走りこんできた。

俺は素早く自分のDCPを手にとって画面を見る。するとそこには『Warning』という赤い文字が浮かんでいる。

そして、敵の情報が浮かび上がった。

【白髭海賊団】 兵士総数5万

海や河に面する街や村を広範囲で襲う海賊団

官軍において、団長である白髭（名前は不明）には手を出すなどいわれるほど危険な力を秘めているらしい

「戦いますか？ 戦いませんか？」

- ・ 戦うなら戦争パートに移ります。

・ 戦わないなら、国レベル・資金・住民感情が激減します

「……健治、こんなイベントってあったか？」

「記憶にございませんって。どうします?」

「そんなの戦争するに決まっているだろうが！俺の地道な政務結果をこんな簡単に潰させて溜まるか！！健治、お前の資金で俺の兵を10体生み出してくれ。ここに喧嘩を売るということがどんなに愚かかっていうことなのかをその身に刻んでやる！！」

【ピロリン♪ 太史慈隊】が発足しました。現在10人

「よっしやあ ああああ！逝ってくるぜえええええ！」

俺は武器を片手に走り出す。その後ろに白髪で動物の顔を模した面を被った屈強な青年たちも続いてくる。負ける気がしないぜっ！！

「先輩、ストレス溜まってたんだなあ」

備考

名前：太史慈隊 兵種：強化兵

体力：100 攻撃力：100 移動力：100 コスト：100
0（1人につき）

スキル（自動）

『援護防御Lv3』：近くの自軍部隊の防御力を50%上昇

『援護攻撃Lv3』：近くの自軍部隊の攻撃力を50%上昇

三話

三話

【VS白髭海賊団】

『勝利条件』

- ・ 敵軍の戦力を70%減少させる
- 敗北条件

- ・ 建業の街（本拠地）への敵軍到達

DCPに映し出される勝利敗北条件の確認を行った俺は自軍の戦力を冷静に見据える。現在の段階で5万という戦力とまともに戦えるのは俺たちくらいだ。街の人と新規ユニットの組み合わせが戦場に出ても戦果は期待できない。

「えーと、こちらの戦力は俺（太史慈隊）と…徐盛隊。街の防衛は及川…じゃなくて韓当隊が務める。3部隊だけじゃ心細いから警邏隊をいくつか建業の街付近に配置しておくとして、作戦としては俺が最前線で敵の数を減らして、徐盛隊が討ち洩らしを確実に仕留めるのがいいか」

「一刀くん。それは方針であって、作戦じゃないからね」

「……本職の軍師ほしーな」

俺はそのことを切実に思った。

『Warning』

という赤い文字が表示され、敵軍の侵攻を確認した俺は自分（太史慈）のスキルである『大号令Lv3』のことを考えた。

この『大号令Lv3』は自軍の攻撃力を15%上昇させる上に、自分の最大兵士数の15%にあたる人員を毎ターン補充することが出来る。使用回数は『Lv』と同じため3回である。つまり『大号令Lv3』を3回行えば、俺の最大兵士数である4000人に達するのだ。及川や健治にチートとか、これはないとか、ゲームバランスの崩壊とか言われるのはこれが原因である。ただし、ゲームの時は選べば良かったが、この世界に俺が存在している場合どうすれば発動するんだろうか？とはいっても今現在の太史慈隊のステータスでも

『太史慈＋太史慈隊 体力：7000 攻撃力：21010 防御力：15000 移動力：200』

このくらいはあるのでぶっちゃけ、ただの賊程度では話にもならないですよ。

敵軍は川岸に着けた艦隊から続々とユニットを出している。

敵軍のユニットをランク別にとこんな感じである。

・Lv1：『海賊団・小隊長』&『海賊下っ端兵数500人』の組み合わせが60組

・Lv2：『海賊団・中隊長』&『海賊下っ端兵数1000人』の組み合わせが10組

・ L V 3 : 『海賊団・幹部』 & 『海賊下っ端兵数2000人』の
組み合わせが5組

【敵軍ステータス】

『名前：海賊団・小隊長 体力：560 攻撃力：640 防御力：
60 移動力：144 最大兵士数：500人』

『名前：海賊団・中隊長 体力：1340 攻撃力：800 防御
力：300 移動力：156 最大兵士数：1000人』

『名前：海賊団・幹部 体力：2500 攻撃力：2600 防御
力：1050 移動力：168 最大兵士数：2000人』

『名前：海賊団下っ端 体力：8 攻撃力：6 移動力：156』

となっている。

という訳で、今回の白髭海賊団の戦力を数値化すると、

L V 1 が 『体力：4560 攻撃力：3640 防御力：60』

L V 2 が 『体力：8340 攻撃力：5600 防御力：300』

L V 3 が 『体力：18500 攻撃力：14600 防御力：10
50』

となる訳である。

見て分かるとおり、体力と攻撃力はずば抜けて高いが防御力は紙同然。これは『禁・三国恋姫』に出てくるほとんどのユニットにいえることだ。確かに戦いにおいて体力も攻撃力も必要だ。だが、それ以上に必要なのは防御力といえよう。何せ、そのユニットが生き続けるかぎり、その部隊は死なないのだから。

「とりあえず、最前線に行ってきますね。後のことはよろしく願います」

「了解したよ、一刀くん。僕としても皆が住む建業の街を滅茶苦茶にされるのは望む所では無いしね。……では、太史慈さま、皆に聞こえるよう号令を」

俺は徐盛の言葉を聞き頷いた後、全軍の前に立った。そして、歩兵たちに向けて大音声を張った。

「全軍、武器を取れ！」

『ガアン』と銅鑼の音が鳴り響き、待機を命じられていた兵たちの視線が俺を捉えていく。

ちなみに銅鑼を鳴らしたのは、脇に控える徐盛である。

俺を見つめる兵たちに向けて、俺は建業の太守として、皆の命を預かる將軍として、可能な限り悠然と構え、朗々たる声を張る。

「これより我らは、街に迫り来る脅威、海賊団をここで迎え撃つ！」

先陣を務める自分の部隊と徐盛の部隊、街を護る及川の部隊に、戦いを始めて経験することになる元々は農民や商人だった者、そのすべてに聞こえるように俺は精一杯の声を張った。

「奴等は街を襲い、金品や食料、女子供を我らから奪い、己の私利私欲を満たそうとしている獣だ。奴等は己の目的を果たそうと数を以って攻め立ててくるだろう。だが、恐れることは無い。その為に我らがいるのだ。建業に住む人々は我らにとつて家族同然。家族が危険に晒されようとしているのであれば、命を賭けて守り抜かなければならない！命を奪うことに臆するな、兵士たちよ！諸兄らの罪は建業の太守である俺が全て背負う！行くぞ、同胞たちよ！我らの家族を護るために！己が剣に誇りを持つ者よ、我に続けええええ！」

「「「「オオオオオオ！！！！」」」」

即座に大仰な歓声をあげたのは俺の部隊と徐盛の部隊だったが、すぐに歓声は兵たちにも伝播し地鳴りのような波となつて周囲に拡散していく。無我夢中で言つたため、もうほとんど覚えていないがよかったのかな？

【ピロリン♪スキル『大号令Lv3』が発令されました】

「……って、スキルを発動させるためには毎回こんなことをやらないといけないのかよ」

「何を言っているのさ、初めてにしては結構よかったんじゃない。見てみなよ、兵士たちのあの燃える炎のようにやる気になった姿をさ。皆、君に感化されたんだよ。一刀くん、君はもう立派な皆の代表だよ」

先輩はにこやかに微笑んで、最後にこう付け加えた。

「君が僕たちの《王》で本当に良かったと思うよ」と。

砂埃を巻き上げ、建業の街を襲わんと迫ってくる海賊たちの先陣がまず見たものは、燃える焰のような鮮やかな紅い鎧だった。だが、その鎧を身に纏う兵士は1人や2人ではない。目に映る敵兵全員がそれを着込んでいる。

その兵たちを率いるよう集団の前に悠然と立つ男がいた。

無能な指揮官が馬鹿な真似をしているのだと考えた海賊たちは意気揚々とその男に襲い掛かったが、その認識が間違っていたことに気付く。ただし、気付いたのは仲間が瞬きする間に殺されるのを見た他の海賊たちだ。

男に襲い掛かると同時に幾つもの首が刎ねられ、宙を舞い、ボトボトと地に落ちて荒野の砂で死に化粧を施される。

「突撃！」

何が起こったのかを理解できていない海賊たちの耳に、男が指揮する声が響いた。

男の後ろに控えていた紅い鎧を身に纏った兵士たちが、地鳴りを上げながら殺到する迫力に海賊たちは耐えられない。

男に対して恐れ慄いていた兵たちも、本能で勝てないと悟ったのか、

その場を一目散に退いていく。勿論、彼らに背を向けて。追撃する形で、紅い鎧を身に纏った兵たちが海賊たちを蹂躪していく。

「建業の街を狙った不届き者め、ここから生きて帰れると思うなよ
！！」

指揮官の男が放った言葉に海賊たちが悲鳴を上げる。

まだ、海賊団との戦いは始まったばかりだ。

四話

四話

白髭海賊団との戦闘の最中、僕は最前線で奮戦する大学での後輩である一刀くんの背中を見ていた。そして、思う。

「ふう……。一刀くん、飛ばしすぎだよ」と。

僕はこの身体（徐盛）の武器である『凍てついた戦斧』を肩に担いで溜め息をついた。何せ開戦して間もないというのに、太史慈隊だけで敵軍の約35%近くを葬っているのだ。彼が戦果を上げれば上げるほど、味方の士気は否応なしに上昇する。

「一刀くんは昔からそうだったよね。君の声や立ち振る舞いは、やけに人を惹きつけ好感を抱かせる。ふふっ、……僕もその1人」

その“人を惹きつける力”によって僕たちが生み出した兵ではない、この世界の人々である兵たちに作用し、人数的には劣っていたのに逆に彼らの士気を高める結果に結びついている。それがどうやって身についたのかは知らないが、この状況下において、指揮官として得がたい資質といえる。

「すかした顔し『ヒュンッ』てつつ『バギッ』——」

僕は近くに寄ってきて斬りかかってきた海賊の1人の身体を横に真一文字に薙ぎ、上半身と下半身を分離させる。そして身体を回転させ遠心力をつけた一撃を斬り飛ばした上半身に叩き込み文字通り粉碎する。辺りに血が飛び散ったが、何のことは無い。僕自身、既に

何人もの海賊を殺してしまっていて、命を奪うことによる罪悪感や嫌悪感はほとんどない。もはや、元の世界に無事に戻れたとしても普通に生きていくことは不可能だろう。

敵兵が幾分か少なくなってきたなと感じた僕は、自身のDCPを確認した。案の定、敵の残存兵力は50%を切っていた。

「先輩として、少しは一刀くんの負担を減らさないかね」

僕は武器の戦斧を大きく振りかぶった。そして、精神を集中させ前を見据え言い放つ。

「吹き荒れる、氷結の結晶。碧風：衝破っ！！」

冷気を纏った風が戦場に吹き荒れ、一刀くんたちに武器を向けていた海賊たちの動きを止めた。その直後、風を受けた海賊たちの全身から血が噴出した。一刀くんが不思議そうな表情を浮かべこちらを見てきたので、とりあえず僕は彼に向かって笑顔でサムズアップしたのだった。

目の前で戦っていた海賊の全身から突然、血が噴出した。

一瞬にして血の池地獄を作り出した元凶を見ると、いやにイイ笑顔で親指を立ててサムズアップしていた。

「何かをするんだったら、最初に言ってくれよ」

と、愚痴をこぼしている

【ピロリン♪】

と、音が鳴った。DCPを確認すると勝利条件であった敵の兵力を70%削ることに成功したようだ。勿論、建業の街への被害はゼロだ。俺たちの完封勝利と言っても過言では無い。勝関をあげようと考えた俺の目に、トンデモナイ文字が映った。

名前：白髭海賊団・団長 体力：？？？ 攻撃力：50000
防御力：50000 移動力：500 総兵士数：0

俺の黒色のDCPの画面に映し出された『白髭海賊団・団長』のステータスを見た俺は戦場にいる太史慈隊以外の兵士たちに大音声で撤退の指示を出す。

「俺たちが殿を務める！全軍、建業の街へ撤退しろ！徐盛は韓当隊と協力し籠城の準備を行え！全警邏隊は住民の避難誘導だ！一刻を争う、全員動けえええ！！」

俺はそう言った直後、DCPを操作して今までの戦いで得ることが出来た資金を使って、自身のステータス強化を行う。上昇させるのは総兵士数だ。

「……海賊団の奴等を結構倒したと思っていただけ、総兵士数を200しか上げられない。……スキルの使用回数が3回に戻っていることだけでもありがたいと考えるか」

「一刀くん、僕も残るよ」

忍者のような格好をした部下を引き連れて笹本先輩、…徐盛が側に

来た。

「駄目だ、先輩。徐盛のステータスじゃ、瞬殺される。それよりも街に戻って軍全体の指揮を執ってください。正直、健治と及川の2人だと、心もとないですよね」

そんなことはない。2人とも俺とは違い優秀だ。健治がいなければ建業の発展はなかった。及川がいなければ、兵士たちは弱くて脆い装備で戦場に出なければならなかっただろう。けど、2人はまだ人を殺していない。

俺は自分の掌を見た。今日のこの戦いで随分と血に汚れてしまった。

1人目を殺した時は足が震え、胃の中のものを全て吐き出しそうになったが、2人、5人、10人、100人と殺した数が増えることに覚悟が決まっていくのを感じた。

俺は此処にいる。

この世界に存在している。

俺は建業という街の太守で、護るべき民が、大切な仲間が俺の後ろにいるのだ、と。

「一刀くん……分かったよ。けど、僕がやるのはあくまで代行。必ず戻って来るんだよ」

「こんなところで死ぬつもりはありません。俺がこの手で殺してしまった命も、俺の後ろにいる護るべき人たちの命も、全て背負っているんですから。戦いで死ぬわけにはいかない」

俺がそう言ったら、徐盛は目を剥き、そしてすぐに眼を擦った。

「ははっ、今一瞬だったけど、大勢の武官や文官を従えて指揮を出している一刀くんの姿が垣間見えた気がする。うん、君はまだ死んではならない。いや、こんなところで終わるはずが無い。僕が保障する」

「先輩……。ありがとうございます」

「それじゃあ、僕たちは街で君の帰りを待つことにするよ。スキル
『瞬転法陣』発動！」

先輩がそう言つと彼らの身体が光に包まれ消え去つた。どうやら、味方の所へ一瞬で移動するスキルらしい。

「……一回、先輩たちのキャラクターステータスを見せてもらおう。スキルを把握していないと、何が出来るかわからないじゃないか」

「隊長、敵が来ます」

犬の面をつけた青年が俺に報告してきた。見れば、砂埃を上げて突進してくる物体があった。

「全軍抜刀！死力を尽くせ！だが絶対に死ぬな！奴に勝って、俺たちは全員で帰るんだ！」

「才才才才才！」

俺たちは大地を力強く蹴り、向かい来る敵を迎え撃った。

兵たちの士気を高め、俺自身集中し心を静めていたのだが、敵である『海賊団・団長』の姿を見た瞬間、俺の頭の中は『全く理解できない』という異常事態の為にフリーズ寸前だった。

こんなことを予想できるか？

俺たちは命を賭けて戦ってきた。

街を、民を、家族を、仲間を護るために必死になって戦ってきたのだ。

そして、海賊団の団長が兵を率いずに現れた。

ここまではいい。

俺たちは覚悟を決めて、ここに残った。

だがしかし！

だがしかしだ！

ボディビルダーの如くに鍛え上げられた逞しい肉体“に”、白いビキニのトップスと禪、そしてマントのみを羽織った変態が現れるとか！

誰が予想できるかつ！！

アレの全体を視界で捉えた瞬間、怖気が走ったわ！

たぶん、無感情、無反応を誇る我が太史慈隊の精鋭もしっかりと後退りしていたから、俺の感性がおかしくなったわけではない。

代表として、敢えて言わせてもらおう。

「変態が来たぞー！！」

「誰が変態じゃー！！」

「お前に決まっているだろうが、変態じゃご不満なら化け物だよ！！」

「んなああんじゃとおおお！誰が何年も掛けてやっと咲き誇った満開の桜の木をも一瞬にして散らしてしまうほどバケモノじゃとおおおお！！」

「そこまで言っておらんわあああああ！！」

俺の蹴りが白髭海賊団の団長の顔に炸裂した。『ズシャアア』と砂埃を上げて滑っていく変態を見据えた俺は、太史慈隊に命令する。

「総攻撃チャンスだ！起き上がれないくらいボコボコにしろ！！」

「『了解！！』『』『』『』『』」

殺せと言わない辺り、俺自身分かっていたのかもしれない。この変態はどんなことがあって死なないってことを。

―総攻撃中―

「隊長、剣が刺さりません」

「とりあえず、殴つてろ」

―総攻撃中―

「隊長、殴ったそばから回復してってます」

「見りや分かる。全員全力で攻撃だ」

―総攻撃中―

「隊長、隊員のほとんどが疲労で動けなくなっています」

「正真正銘のバグキャラじゃねーかよ！このオッサン」

「オッサンではない！漢女おとめじゃー！！」

「どの口が乙女っていうんだよ、このボケエエエ！！」

本日2発目の蹴りが変態の顎を捉え、そのまま宙を舞う海賊団の団長。そして落ちると同時に鳴り響く機械音。

【ピロリン♪『白髭海賊団・団長』の『卑弥呼』を倒した】

俺はDCPに映し出された文字を見て、フラッと眩暈がした。

邪馬台国の巫女がなんで海賊をとか、何でこの時期にいんのとか、

色々と考えなければならぬことがあるんだろうけど、何故に女性であつた卑弥呼がこんな筋肉達磨のオッサンになるんだろうか。

……まさか『禁・三国恋姫』では、名立たる武将が女性になつた影で、元々女性だつた武将が男性になつてしまつてゐるのか？

まさか、孫呉の二喬と呼ばれた大喬・小喬も、弓腰姫と呼ばれた孫尚香も男性化してしまつてゐるつていつのか？

「知りたくなかつたよ、そんなことはさー」

俺は膝を抱えて落ち込むのであつた。

そんな中、俺の後ろでは太史慈隊がせつせと縄や鎖を使つて、氣絶したオッサンを拘束しているのだが、もうしばらくこうさせてくれ。必ず、復活するから。

五話

五話

白髭海賊団の団長である卑弥呼を名乗るオッサンを、捕虜として建業の街へ連れ帰った俺たちを待っていたのは祝勝の宴だった。広場の中心で音頭を取っているのは、変な関西弁をしゃべる悪友の韓当こと及川肇である。

「……………」

何も言い出せずにただただその光景を眺めていたら、『ガシッ』と脚に衝撃が走った。

いや、そのまま下を見ると街の子供たちが俺の脚に抱きついてきていたのだ。そして、『にへへ』や『ぽやん』とした満面の笑みを浮かべて俺の顔を見上げてくる。

「おお。我らの王が帰還したようや！建業の太守さまのお帰りじやー！皆のもの、胴上げじゃー！」

文面が色々とおかしい。及川の奴、すでに酔っ払っていやがるって、おお！？いつの間にか俺の周囲を屈強な男たちが囲んだと思った瞬間、俺の身体は宙を舞っていた。『ぽーん』、『ぽーん』、『ぽーん』……と、胴上げされること10回。俺は音頭を取っていた及川の隣に降ろされた。

「かずぴー、ほれ」

そう言つて、及川が俺に手渡してきたのは黄色のメガホンだった。

「太守さまの言葉、皆が待っているんやで。格好いいところを見せてやりい」

まあ、結局戦場では勝鬨をあげることが出来なかったし、丁度良いか。そう思つて、渡されたメガホンを及川に投げ返す。及川は『おい、かずびー?』と不思議そうな表情を浮かべていたが、これは俺には必要ない。

民衆を見渡せば、誰もが口を紡ぎ、俺の言葉を待っているかのように広場は静まり返っている。

俺は目を閉じて大きく深呼吸する。そして、密集した彼らの一人ひとりに届くように、その背後にいる兵たちにも届くように、精一杯の声を張った。

「諸君、此度この街を襲おうとした脅威は屈強なる兵士たちの手によつて退けられた。それも1人の犠牲を出すことなく。しかし、これからもこの街が危機に陥ることがあるだろう。だが、俺たちが此処にいる限り、この街に住む人々は必ず護る。護り抜いてみせる! だから、諸君らも我らを信頼し、力を貸して欲しい」

俺はここで一度、言葉を区切る。そして、ニヤリと笑つて及川がその手に持っていた杯を奪い取った。その中には並々と酒らしきものが注がれている。

「諸君、今は武器を捨て、杯を手に取り! 今宵は皆で楽しもうではないか! 天に向かつて叫べ、街全体に聞こえるように叫べ、俺たちは今此処にいるっていうことを示せ! ……それではいくぞ! かんぱ

あああああいつつ!!」

「『『『『『かんぱーい!!』』』』」

民衆は俺の掛け声で次々と酒を飲み干していく。子供たちも大人の真似をして、何かを飲んでいる。

そんな中、俺は杯に注がれていた酒を一気飲みしたつもりだったが、これってただの水じゃね?と首を傾げていた。すると苦笑いを浮かべた及川が寄ってきた。

「皆、ノリノリやなー。本物はこっちにあるけど、飲むか? かずぴー」

「いや、いい。というか、この宴を企画したのは及川か?」

「ちやうで。ワイはただ盛り上げ隊長に任命されたから、音頭を取っていただけやねん。ほれ、あそこかあっちの方とか出店が結構出ているやろう? あれな、この街の商人やなくて篠塚が呼び込んだ、別の街や村で商いをしている連中なんやそうや」

「はー。健治は相変わらず凄いな」

「せやな。でも、今回の殊勲賞はやはりかずぴーやろ。DCPで確認しておったけど、50000の70%つまり35000の海賊と化け物みたいなステータスを持っていた海賊団の団長を倒したんやろ? 凄すぎやで」

「あつ…。すっかり、忘れていた。ソレ、捕虜にして連れて帰ってきているんだわ。後で、尋問するから健治も誘って、俺の執務室に来てくれ。先輩には俺が直接言いに行くから」

「了解や、任せとき」

及川と別れた俺は建業の街の住民や兵たちとの激しくも楽しい宴の一時を過ごしながら、この街のどこかで飲んでいるであろう先輩の姿を捜し歩き、……迷子になった。迎えに来てくれたのは先輩の部下の忍者で、ちょっとだけ可哀想なものを見る目で見られた。面倒をかけてすみません。

「で、かずぴーの執務室に来た訳やけれども。なんやねん、この口に出すのも憚られる肉の塊は？」

「今回の海賊団の団長、自称『卑弥呼』だ」

「うわあ、それはさすがにないって。おじさん、嘘は駄目だよって」

そう言つて健治は縄と鎖で簀巻きにされているオッサンの所へ行き、ポンポンと頭を撫でる。

何でだろうか、猛獣を前にして『カッコイイ』とか『吼えて見せて』って言う元の世界の子供を思い出す。

「ワシの名前は卑弥呼なのは最初からじゃ！お主ら、外史の管理者のひとりであるワシをこんな目に合わせて只で済むと思うな！」

「……外史？管理者？なんやそれ？」

及川が聞いた事の無い言葉を繰り返して言う。どうやら俺たちは当たりを引き当てたらしい。

そして、卑弥呼は踏んではいけない地雷を堂々と思い切り踏みつけたようだ。なにせ先輩と健治の目が卑弥呼の言葉を聞いた瞬間に据わり、口端がやや釣りあがったから。

「外史っていうと民間で書いた歴史のことだね。つまり、三国志をモチーフとしたこの『禁・三国恋姫』というゲームの世界もまた外史のひとつに含まれるということ。だが、三国志をモチーフとした物語は何もこれだけじゃあない。漫画もあれば、小説もある。ゲームも様々な種類がある。つまり、人の数だけ外史は存在する。その管理者っていうことは、僕たちが何故ここにいるのかっていうのもわかるはずだね」

「なんじゃと？」

「恍けたり、隠そうとしたりする必要は無いよって。僕らは西暦20XX年の世界でこの世界観をもつゲームをやっていた身なのだからって。というか、何で僕らがこの世界に来る羽目になったっていうのさ？」

「そんなことがあるはずはない。主ら、名前は？」

「笹本京一郎」

「篠塚健治」

「及川肇や」

「北郷一刀」

「……ほんごう……かず」と？……ミスをしおつたな、管輅の奴め」

卑弥呼の縄を解き、話を聞くとこんな感じらしい。

・ この世界には『天の御遣い』と呼ばれる存在がいる。

・ その天の御遣いは俺たちプレイヤーとは違う勢力について行動する

・ 設定では俺たちと似たような世界出身らしく、未来（現代）の知識を使ってその勢力に有益な情報を与えて万事ことが上手く進んでいくようにするようだ

・ そして、問題なのはその『天の御遣い』の名前が『本郷一子』ほんごうかずというらしい

「つまり、管理者のニアミスで一刀くんと彼が扱っていたDCPと無線ネットワークで繋がっていた僕らもこの世界に招かれたっていうわけか。うん、ふざけたことを言うのはこの口かな？」

『ぎゅむー』と卑弥呼の口端を横に引つ張る先輩をどうにか押さえつけ、俺は彼に話の続きを促した。俺たちが知りたいこと。つまり、元の世界への帰還方法だ。しかし、彼の口から出た言葉に俺たちは啞然としてしまう。

「ワシは知らん。この世界でのワシの役割は、周回プレイのキャラクターがいる街を襲って、資金や街のレベルを下げるのがじゃから。元の世界へ云々に関しては管轄外じゃ」

その言葉を聞いた先輩と健治は米神辺りを押さえ眉を寄せ頂垂れる。

及川は場の空気を読んで俺の所に静かに寄ってきて、耳打ちしてきた。

「どうするんや、これから？」

「とりあえず、当初の予定通り、ゲームをクリアするつもりでやっていくしかないだろうな。もし、クリアしても帰ることが出来なかった時のことを考えて、この世界に骨を埋めることも視野にいれてやっていかないといけないわけだし、これまで以上に内政や外交に力を入れていく必要がある」

「そうやな。むしろ、最初から諦めておった方が、気が楽やわ。それにこの世界も結構住み心地がええし」

「それは同感だ」

「うむ。様々なご主人さまを見てきたが、お主のようなのは初めてじゃ。……よし、ワシに勝ったことじゃし、褒美としてコレをやる」

そう言った卑弥呼は禪の中に手を入れて、金色に輝く籠手を取り出した。

隣にいた及川は執務室の入り口へ避難してしまっている。

『さあ』、『さあ』、『さあ』と言わんばかりに迫り来る白きカイゼルヒゲと筋肉隆々の身体。俺はあつという間に部屋の隅に追いやりられ、目の前には金色の籠手が差し出されている状態。

これを取ったら、人として大事なものをひとつ失ってしまう気がする。そんなことを考えながらも迫り来る恐怖に耐えられなくなり、俺はソレを受け取ってしまった。

卑弥呼は頬を赤らめ、

「おお、ご主人さまがワシの金色の珠で作った簞手を…」

と言つて身体をクネクネさせる。

先輩や健治は完全に引いているが、及川は「うー、かずぴーはい奴やったのにー」と俺を煽るようにわざとらしく泣いている。

『プチッ』↑俺の頭の中で何かが切れる音

フッフツ、イイダロウ。メニモノヲミセテヤルオオオオ!!

素早く金色に輝く簞手を装備した俺はスキルを即座に発動する。

「東方不敗が最終奥義! せきはアツ、てえええんきよおおおけええええん!」

『キュボツ』という音と共に自身のエネルギーと自然エネルギーの両方を凝縮した一撃は、壁と天井を軽がると破壊し、雲を切り裂き空の彼方へ消えていった。勿論、俺の目の前で頬を染め、身体をくねらせていた卑弥呼も一緒にだ。

俺は部屋の入り口で呆然と立っている3人を一瞥すると

「これは海賊団の団長が所持していた宝だ。そういうことにしておけ。これは命令だ」

と、いつもより若干低い声で言った。

3人は軍人がやりそうな敬礼をビシッと決めて

「了解しました」「」

と、言ってくれた。

フフフツ、卑弥呼。いいものをくれたね。お礼に今度見つけたら、所構わず、コレをぶつけてやろう。

フフフツ、クククツ、ハーハツハツハ！

「終わり方が何処かのラスボスみたいだよって、先輩」

獲得品

武器『金色の箆手』（攻撃力：5000 防御力：5000）

スキル（自発）『石破天驚拳Lv1』：エネルギーを凝縮した一撃を直線状に放つ。射線上の敵味方関係なく全ての武将と兵にそれぞれ5000の固有ダメージを与える、諸刃の剣ともいえるスキル。

六話

六話

文字通り山のように積まれた書簡を次々と処理している俺のところに、少し困惑気味の文官がやってきた。

「あの、太史慈さま。少々、お時間宜しいでしょうか」

「どうしたんだ？……まさか、まだ増えるのか？」

俺は文官との間に積まれたままになっている書簡を見て、最悪の展開を思い浮かべる。

「いえ、太史慈さまに謁見を求める人物がいるのです」

「俺に？」

「はい。何でも“軍師”として雇ってもらいたいとか」

「採用」

「は？」

「採用するから連れてきて」

「はあ…、分かりました。では失礼いたします」

俺に頭を下げて執務室から出て行く文官を見送った俺は背伸びをし

て骨を鳴らした。そして思う。

『やっと、この地獄から抜け出せる』と。

わざわざ軍師として雇ってくれと言ってきたのだから、一般人だった俺たちよりも兵法においても一芸を持っているだろう。それに軍師を希望しているのだから心配しなくても政務能力も高いはずである。

幸先いいな……………と、思っていた時期がありました。

「よろしくお願いします」。太史慈さま」

俺の執務室に入ってきた少女を見るまでは。

妙に間延びした声、若葉のような薄緑の髪、眼鏡として本当に機能しているのか疑わしいものをつけた未来の孫呉の筆頭軍師、名を陸遜という。もちろん『禁・三国恋姫』の孫呉編に出てくるヒロインの1人だ。

俺はゴクリと喉を鳴らす。何故って？彼女を見る上で絶対に視界に入ってしまったわに実った“モノ”の所為だ。

何がたわわなのかは言う必要も無いだろう。彼女が動くたびに揺れるアレのことである。振り返る。揺れる。椅子に座る。揺れる。呼吸する。揺れる。何かとつけてとにかく揺れる。何がって……言えるわけが無い。

この世界に来てまともに息抜きが出来ていない俺にとって、彼女のモノは凶悪すぎるっ！！

「どうかしましたか？太史慈さま」

そう言つて首を傾げる彼女。揺れる。

『ゴンッ』

俺は机に頭を打ち付けた。そして思い出すのは爺ちゃんがピンチに陥った時によく言っていた魔法の呪文。

「心頭滅却すれば、火もまた涼し。心頭滅却すれば、火もまた涼し。心頭滅却すれば、火もまた涼しいiiiiii」

俺は立ち上がつて壁に『ゴスゴス』と頭を打ち付ける。

「心頭滅却、煩惱退散、南無阿弥陀仏ううううう！！」

――しばらくお待ち下さい――

額から血を『ドバドバ』流した状態で、陸遜に軍師として採用することを伝えた俺は早急に3人を執務室に呼んだ。そして、事の次第を報告したのだが、

「阿呆や。阿呆やと思つていたけど、これはさすがに拙いやろ」

ぐはぁ…

「素直に言えばもの凄く嬉しいんですけど、これって喜んでいいんですかって」

健治、お前だけでも幸せに…

「孫家が袁術の客将になった場合、彼女たちの独立がまた一歩、遠のいたことになるね」

『サクッ』と先輩の一言が俺のガラスのハートに突き刺さる一言を放った。だが、俺にも意地があった。

あの後俺を待っていたのは、彼女の期待するような眼差し、ここを追い出されたら私には後がないんですと訴えかけるような雰囲気。俺が答えるのを躊躇っていると次第に涙が溢れそうになって……。

↑女の武器：泣き落とし

「なら、あの状態でどうしろと！」

「『太守としては間違っていない（んや・って・よ）』『』『』」

「はい？」

及川は俺の肩に腕を回して話しかけてくる。

「事実、現在の建業における文官の中にはワイらに意見してくるような剛の者はおらん。それは一見、ワイらの好きなように改革することが出来るように見えるけどな、誰かがストップを掛けてくれへんと調子に乗ってしまうのが人間なんや」

さすがに心理学部に通っていた人間の言葉だけはある。

「僕たちは現代の知識を使ってなんとかやりくりしているけど、あ

こちらで常識なことがこちらでは非常識なんてことはザラにあるんですって。彼女が軍師として僕らの中に入ることによって、彼女の常識が僕らの非常識を正してくれる可能性があるんですって」

と、健治が俺の正面に立つて身振り手振りを使って説明する。

「つまり、彼女が入ることによってメリットは多くあれど、デメリットはないんだよ。“僕たち”には」

「うう…、孫家には手痛いダメージがあるっていいことですか？」

壁に凭れ掛かったまま話をする先輩に俺たちの視線が集まる。

「それはそうだろうね。史実では孫策は呪術で、周瑜は病で亡くなっていたはずだから、陸遜の存在は未来の孫呉にとって必須のはずなんだよ。というか、長沙で『江東の虎』という異名で有名な孫文台というビッグネームが存命なのに何故新勢力でもある僕らの元に彼女は来たの？」

先輩に集まっていた視線が俺の方に集まった。彼女が俺たちの所へ来た理由。それは確か…

「自分の能力を思う存分に発揮できると思うから…だったかな？」

「へー」

「……」

「なるほどね。つまり、孫文台の所には有能な武官や文官が多くいるので自分に活躍する余地が無い。ならば新進気鋭で将来有望かつ、

流星の如く江東の地に現れ建業の太守となり街を凄い速さで発展させていつている太史慈の元で、自分がどこまでやれるのかを試してみたいっていうところかな？」

結局、俺の判断は正しかったってことなのか？

孫家に対しては非常に申し訳ないことをしてしまった訳だけれども。

「この段階で陸遜がそういう風に考えたっていうことは、頭のいい連中は孫文台と太史慈を同格に見ているってことだね。荊州の東側に長沙がある以上、揚州にいる豪族は距離的に建業の太守である太史慈を選ぶだろうしね。江東を孫文台と二分にする存在として」

ふふふつ、と不気味な笑いを洩らす先輩の姿に怯える健治を慰めながら、俺は彼に尋ねた。

「これからどうするんですか？」

「ん？今まで通り、領地を広げていくだけさ。5万という途方も無いくらい強大であった白髭海賊団を完全に退けたって言う話は揚州全体に噂として広まっているから、何もしなくても同盟やら臣下として加えて下さいって言うてくる輩はこれからどんどん増えていくと思うよ」

なんだかことが大袈裟になってきた気がする。って、最初からかうん、諦めて仕事をしよう。

「ある程度戦力が集まったら、山越賊を取り込むのもいいかもしれないな。一刀君なら、単騎で……」

先輩がなんだか恐ろしいことを話しているが聞こえない。あー、聞こえないったら、聞こえない！！

七話

七話

「どうしてこうなった」

俺の思いはこの一言に集約される。

先日の陸遜加入の際に先輩が言っていたことが本当に起こり、規模の小さな村々はさつさと「貴方様の支配下においてください」と贈物を持参し、揚州の最東端に位置する漁業の街である呉や会稽の太守たちがこぞって建業を訪れ、同盟を申し込んできた。戦力的には完全にこちらが2つの街の兵力を足したものを完全に超越しているため、軍門にいらてくれとお願いされているようなものだった。

それだけなら、俺の執務室が書簡に埋め尽くされて締め出されるだけで済んだであろうに、なんと俺は現在、三越族と対峙している。本当に、どうしてこうなった。

- ・ 昨日分の仕事を終わらせて、久しぶりに寝台で横になった俺
- ・ 起きたら縄でグルグル巻きにされ荷台の上に転がされていた
- ・ 状況が分からずに目を白黒させていたら、見覚えのある忍者の服装をした人が……って、先輩の部下の人じゃん！？

・ 無造作に投げ渡される件の『金色の籠手』。これを見るたびに白きカイゼルヒゲを思い出し、心の中で怒りの炎がふつふつと燃え上がるのを感じる

・ 縄が解かれ、「それでは頑張つて下さい」と告げた忍者の人は目にも映らない速さで俺の前から去っていく

・ 仕方なく箆手を装備したら、俺を取り囲むようにして現れる目つきがヤバめなお兄さんたち

・ 状況が分からないがファイティングポーズを取る俺↑イマココ

「手前、最近建業の太守になっていい気になっていやがる太史慈っていう奴だろ。はん、1人のこのこ乗り込んでくるとはいい度胸だ。まずはオレが相手してやるよ」

そう言つて現れたのは空色の髪と爛々と輝く金色の瞳が特徴の少女。その拳には濃い青色の箆手が装備され、身体には所々戦や鍛錬でついたと思われる大小様々な傷跡が見える。

「オレの名は、厳虎。手前の名前はいいぜ。どうせ、ここで骸になるんだからなあああ!!」

素早い動きで俺に迫ってくる少女。そして、その勢いのまま左足を思い切り踏み込んで体重を乗せた一撃を俺の腹部に向けて放った。

「……………」

「……………?」

それから10秒くらい経った後、髪や服が汚れるのもかまわずに地面をごろごろと転げまわって悶絶する少女。

周囲を囲んでいた男たちの顔がにやにやした表情から一気に青白くなるのを俺は見た。

「て、手前の身体は岩かなんかかよ!」

「ただ単に能力が違ステータスうだけだろ。大体、右ストレートっていうのはな、こう放つんだよっ!」

俺はここでふと思った。普通のパンチを放った所で、こいつらが納得するとは思えない。有無言わずに黙らせる方法……。俺は太陽の温かな陽光を浴びて光り輝いている金色の籠手を見た。

そうだ、あれをやろう。

俺は自身のエネルギーと自然エネルギーを練って錬って煉り固めるイメージで集めていく、そして集めたエネルギーを右手に収束して放つ。俺にとってはただこれだけのこと。

ただし、俺の周囲でこの成り行きを見ていた者たちは全然違っただけを見ていた。

なにせ、俺が突き出した右腕から発射された光が地面を抉り、海を割り、最終的には『ドドン』と弾け飛んだのをその眼でみることになったからだ。

「これが、俺の必殺技『石破天驚拳』だ。ただの右ストレートだけでもこういったことが可能な……って、どうしたんだお前ら!」

いつの間にか俺を取り囲んでいた男たちは綺麗に統率の取れた状態で整列し土下座していた。

無論、彼らを率いていた少女も額を地面に擦り付けそんな勢いで土下座している。

「師匠！オレたちを、いやオレを弟子にして下さい！よろしく願います！」

「……よろしく願います！！」「……」

「お、おう。任せろ」

彼らの勢いに飲まれて咄嗟に了承してしまったが、果たしてよかったのだろうか？

・ 山越族の特徴。強者の言うことは絶対。かつ山越族の女性は己より強い雄に惹かれる。

『名前：蔽虎 体力：1900 攻撃力：2800 防御力：1650 移動力：182 総兵士数：1000人』

『名前：山越族・若人集 体力：14 攻撃力：16 移動力：125』

『名前：蔽虎隊 体力：15900 攻撃力：18800』

【ピロリン♪『蔽虎隊』が『太史慈軍』に加入した】

蔽白虎隊が張ったキャンプで一夜を過ごしていた俺は、鎧の間に挟

まっていた紙を見て頬を引き攣らせた。

『指令書』

山越族の現主要メンバーである黄乱、尤突、藩臨、費棧、厳虎、嚴興の6人をぶつ飛ばして、配下にして連れ帰って下さい。

それで山越族の問題は解決です。

徐盛より』

「あの人は鬼か」

厳虎隊に連れられて山越族の族長が治めている街にやってきた。

当然山越族の人間たちは部外者である俺を上野動物園に連れて来られたパンダの如く、物珍しそうに見ている。

「師匠、ここから先がオレみたいな將軍が住んでいる地域です。気を引き締めて下さい」

厳虎の言葉通り、俺を射抜かんと鋭い視線を向けてくる者がいる。俺が視線を感じたほうを見るとすぐにその姿を隠してしまうのだが……。すると突然、厳虎の歩みが止まった。正面を見ると、濃い紫色の髪を束ね、大きな槌をその手に持つ妙齡の女性がいた。雰囲気というに『禁・三国恋姫』の劉蜀ルートに出てくる顔厳みたいな。

「何をしておる？ 昂よ。……そして、後ろの男は誰じゃ？」

「千代の姐御！」

「その呼び方はやめいと言っておるのに」

敵虎はその女性と一言、二言会話し、こちらに振り向いて笑みを浮かべながら駆けてきた。俺はその健気な姿に、犬耳と尾を生やした彼女の姿を垣間見た。間違いない、敵虎は忠犬属性だと思う。

「兄貴、千代の姐御が話を通して、族長に会わせてやるって」

「そ、そうか。ありがとうな」

俺はそう言って、彼女の頭を撫でた。すると、

「く、くうーん」

と、敵虎は喜びの声？を上げるのだった。大丈夫なのか、これで……。非常に不安に駆られる俺であった。

………

………

…

「不安的中かい！」

俺が連れてこられたのは、ローマにて競技場として使用されていたような円形のコロッセオ。俺はそのコロッセオの中心で観客席に座っている大勢の山越族の視線を浴びせられる。俺は其中で装備している籠手の具合を確かめる。

「くそつ、これで死んだら先輩を呪ってやる」

そんな愚痴をこぼしながら俺はその時を待っていた。その時、客席に詰めかけていた山越族の人々の声を上から塗りつぶすように、けたたましい銅鑼の音が鳴り響いた。と同時に、ものものしい装備の兵士たちが現れて、ぽつかりと空いていた上の方の客席を埋め始めた。

「……………なんだ？」

いきなり完全武装した兵士たちが現れて、最初から観客席に座っていた山越族の人々は困惑している。観客たちの間に少なくとも動揺が走ったのはいうまでもないようだ。

「——静まれ！みなの方、静まれ！」

空いていた客席の上から3分の2が兵士たちによって占拠されたころ、兵士たちの叱咤とともに、長く艶やかな黒髪を首の後ろ辺りで束ね、黒鞘の剣を佩いた妙齡の女性が現れた。その毅然とした振る舞いは他にいる兵士たちとは格が違うという事が一目で分かる。

耳を澄ますと「ハンリンサマ」という声が聞こえてきたので、山越族を仕切る主要メンバーであることは間違いがなさそうだった。だが、彼女が現れるのはどうやら珍しいことらしい。どうにも話を聞いていると彼女は族長を護衛する役職についているそうだった。ということはつまり…。

俺は、藩臨の頭上のボックス席を凝視した。

いかつい取り巻きを連れて現れた彼女は眉を寄せ、目を閉じたまま

で何か一席口上をぶつけることもなく、兵士たちの方からもそれ以上を語るようなことはなかったが、観客の目がそちらに向いてしまっているのも言うまでも無いってことだ。あの御簾の向こう側に、山越族の長がいるということだろうということを。

で、俺の現在の状況なのだが……

「ぐう……」

「があああ、いてえ、いてええよおお」

「じほつ、じほつ」

山越族の男連中を相手に無双しているところだ。

最初は虎とか猪とかが出てきたんだけど、俺が睨むと服従のポーズを見せるんで頭を撫でておいた。

それに納得がいかなかった観客の若い男たちが「俺たちがやってやるぜ」といった雰囲気で降りてきたので、全員に一発ずつ拳を叩き込んだ。結果はこの状態。鎧や兜をつけずに俺の所へやってきたもんだから、被害は尋常ではない。しかし、観客のボルテージはかなり高い。

俺にやられた男衆がこんなにボロボロになっけていても「大丈夫か」って言う一言もないのは、この山越族も能力が女尊男卑なのかもしれない。が、何だか気に食わない。

こいつらは一度俺と戦い、俺の強さを知った。その上で立ち上がり、俺を倒そうと迫ってくる。まあ、返り討ちに行っている俺が言うのも

なんだけど、根性はあると思うんだ。少なくとも、安全な観客席で俺たちが戦うのを肴に飲んでいる連中に比べれば。

「くそぉ……」

俺を倒すために降りてきた青年が膝をガクガクと揺らしながらも立ち上がり、両拳を上げファイティングポーズを取るのを見た俺は彼に話しかけた。

「なあ、なんでそこまで必死になって戦うんだ？」

「部外者であるお前に言うまでも無い」

「観客席を見ろ、お前たちを肴に酒を飲んでいるような奴等だぞ。悔しくないのか？」

「……………」

青年は俺の問いに黙り込んだ。周囲を見渡せば、俺に倒された連中全員が痛み以外の理由で顔を歪め、唇を噛み締めている。

「山越族は強者の言うことは絶対……だったな。だが、本当は違うんじゃないのか？男という理由だけで、一兵卒以上になれないとか……って、そんな驚いた表情をするっていうことはマジか！？」

「う、ああ。その通りだ。あそこに見えるだろ」

そう言って青年は、山越族の長がいるであろうボックス席を指差していた。

「今回、族長となった奴が『私の部下は女のみでいい。男は壁にでもなっていればいいんだ』という方針らしく俺たちには出世の道がないんだ。俺には故郷に病で床に臥せる両親がいて、どうやってでも金を稼がないといけないのに」

「…………お前らも？」

俺は周囲にいる男衆を見て言った。返ってきたのは強い頷きだった。

「だったら、齒向かえばいい。そんなの族長じゃないってな」

「それが出来たらしている！だが、族長を護る護衛官の藩臨さまは我らのような奴等が1000人、2000人集まったところで倒せる人間じゃないのだ！」

「ちよつと、待て……」

俺は懷からDCPを取り出して、藩臨のステータスを確認する。

ちなみにこれめれつきとした戦争パートのようで、目の前にいる青年の名前は『悟道』というようだ。ステータスも中々高い。先日、俺の弟子となった敵虎の約1.5倍の能力を持っていた。

『名前：悟道 体力：2500 攻撃力：3400 防御力：2500 移動力：150 総兵士数：1500人』

鍛えればまだまだ伸びしろがありそうだ。

で、肝心の藩臨のステータスだが、なるほど悟道の言うことも分かってらんでもない。確かに凄い能力だ。

『名前：藩臨 体力：5000 攻撃力：12000 防御力：10000 移動力：300 総兵士数：0人』

ステータスを見終えた俺はDCPを懷の中に入れなおして、大きく息を吸い込んだ。そして、コロッセオにいる全ての人間に聞こえるように大音声で言い放った。

「族長の護衛官である藩臨！お前に一騎打ちを申し込む！」

俺の放った言葉にコロッセオにいた全ての人間が動きを止めた。渦中の藩臨は今まで閉じていた目を『クワツ』と開き、燃え盛る紅蓮のような瞳を露にする。そして

「……承知した」

と言って立ち上がったと思ったら、その場から忽然と消えていた。

「『うおっ！？』」

俺の後ろにいた男たちから驚嘆の声が上がった。つまり、彼女はあの一瞬であそこからここまで移動したということになる。なるほどね…。

「これは厄介そうだ」

「お前の力……私に見せる！」

そう言っただけで彼女は黒鞘から彼女の瞳と同じ色をした剣を抜き、俺に切りかかってくる。

振り下ろされる藩臨の剣を正面から受け止める。剣と箆手がぶつかり合って火花を散らす。

「やべえ、卑弥呼にもらったこの箆手じゃなかったらまともに受け切れなかった」

俺は素直にそう思った。

なんと強烈な一撃か。3周目のチートというゲームの加護を受けた俺の両腕をもつてしても、その一撃を受けると同時に体中が痺れるような衝撃を受けた。しかし、俺も建業という街を治める太守、ただではやられない。彼女が剣を構えなおす一瞬の隙について、彼女の肩に一撃をいれようとするも寸前で避けられてしまった。

「……ちっ」

「……つつ!？」

藩臨は振り回すよう強引に剣を振るう。俺はそれを左腕だけで受けて、右拳を彼女に向かって放った。しかし、彼女は凄まじい速さで剣を構え直し俺の一撃を防御することに成功した。それはまるで剣ではなく小枝を扱っているのではないかと思わせるほど、流麗にして迅速な行動だった。

俺と彼女の一騎打ちは果てしなく続く。

最初は野次を飛ばしていた観客だったが、いつの間にか静かにことの成り行きを見守っていた。武に覚えがあるものは固唾を呑んで見守り、山越族の民は最強の護衛官である藩臨の勝利を信じて祈るよ

うに見ている。

「はっ はっ はっ。……お前、強い」

「うん？ありがと。でも、そろそろ決着をつけようか」

「……承知した」

藩臨は剣を正眼に構えた。

俺は両手を向かい合わせるようにして構え、自身と自然エネルギーを錬りこむ。

「吼えろ、竜吼砲！」

「石破つ、天驚拳……！」

大勢の山越族の人間が見守る中、俺と藩臨が放った攻撃はコロッセオ中央にてぶつかり合い、一瞬拮抗したかと思ったがそれはすぐに終りを告げた。俺の『石破天驚拳』の光の濁流が藩臨の『竜吼砲』と彼女の身体を丸ごと飲み込んだ。そして、彼女の後ろの観客席にいた人間全てを巻き込んだ。

光が消えた後に残されたのは、膝をついて俺を見上げる彼女と、観客席でぐったりとしている観客たちと兵たちだ。族長がいたと思われるボックス席は吹き飛んでしまっって何も残っていない。

「……私の負けだ。……殺すがいい」

自身の剣を俺に差し出して目を閉じる彼女の姿は、毅然としていて

かつ凜々しかった。こんな彼女を簡単に死なせるわけにはいかない。

「敵虎に聞いた。山越族は強者の言うことには絶対に従わなければならない、と。ならば命じよう、藩臨。俺の手足となり戦場にてその力を発揮せよ。それから悟道やお前たちも俺が治める建業の地へ家族を伴って来い。悟道、お前ならば、我が軍の將軍になることも夢では無いだろう」

「……承知」

「御意！」

「「「「「はっ！」「」「」「」

【ピロリン♪『藩臨』と『悟道』、『山越族・若人集』が仲間に加わった】

コロッセオから出た俺を待っていたのはイイ笑顔を浮かべている敵虎たちだった。

「お疲れ様でした、師匠！」

そう言って手拭いを手渡してくる敵虎。その後ろには、先ほど一騎打ちを行い俺の臣下となった藩臨や悟道といった人間の他に、数人が各々立っていた。

俺が視線を向けると一様に膝をつき、名をあげる。

「我が名は黄乱！此度の戦い、見事じゃった。ワシをお館さまの軍門にいられてくれい！」

「ボクの名は厳興。貴方の強さに憧れました。姉と同様、私も弟子にして下さい！」

「妾は尤突。正直、男の下に就くなんて気に食わないけど、貴方のところで世話になるわ」

「ふわわ、乃愛しゃん！？そんなことを言って廻しゃないで下しやい！わ、私は費栈でしゅ。力は非力でしゅが、軍師として役に立ちたいと考えています！よろひゅくおねがいしましゅ！」

そう言つて俺を見上げてくる4人に加えて、藩臨や厳虎、悟道や男たちといった面々が俺の返事を待っている。

先輩に頼まれていた指令はこれで達成なのかな？

まあ、いいや。これからのことは建業に帰ってから考えよう。

「俺の名は太子慈、字は子義だ。お前たち山越の民は今日を持って俺が死ぬまで一蓮托生となった。難しいことや無理難題なことは命じない。お前たちは全員家族だ。俺が生きているかぎり、お前たちは全力で護る！だから、お前たちも俺を信頼し、その力を貸してくれ！」

「「「「「御意！！」」」」」

こうして、山越族を臣下に加えるという仕事を終えた俺は、新たに仲間となつた將軍候補6人、軍師候補1人、山越族の兵士2万をつ

れて帰路につくのであった。

八話

八話

山越族の民を仲間にする事が出来た俺は、大手を振って建業の街へ帰還した。

いつも通りの賑わいを見せる建業に街並みや大勢の人たちを見て、
敵虎や黄乱といった面々が感嘆の声を洩らした。

見知らぬ一団を見て、首を傾げる人たちもいたが、率いているのが俺だということが分かると会釈して去っていく。

しかし、そんな穏やかな空気も完全武装の警邏隊が現れたことで崩れ、一気に緊張が高まった。当然、仲間たちを護ろうと藩臨が剣を抜き、尤突が黒い帯を束ねたものを取り出した。敵虎や敵興も拳を握り、悟道もファイティングポーズを取り、あっという間に一触即発と呼べる空気になったため、急いで俺が双方を治めようとした時、

「お帰りなさいませ、太史慈さま。遠征、ご苦労さまです」

そう言つて、蒼い鎧を身に纏った青年：徐盛が俺の前まで来て頭をたれた。その姿を見た警邏隊の人たちもすぐに武器を地面に置き、膝をついた。えーと、『部下がいるときは、公私をしっかりと分けること』だったな。

「うむ。俺の後ろにいるのは將軍候補6名と軍師候補1名、それと山越族の民2万だ。早急に家屋の手配を頼む」

「御意です。誰かある!」

「はっ!」

徐盛の呼びかけで現れたのは、大きな弓を背負った少年だった。俺は面識の無い少年を見て首を傾げたが、俺の側に控える形となった徐盛、つまり先輩が耳打ちしてくれた。

「彼の名前は丁奉。一刀くんの噂を聞いて出稼ぎに来た子だね。中々おもしろいスキルを持っていたから、今は僕の副官として動いてもらっているんだ」

おもしろいスキル?と聞いた俺はDCPを操作しようと思ったが、今の状況でそれは拙いかなと考え直し、城についてから確認することにした。ちなみに俺が先輩と話している間に山越族の民は丁奉に連れられて、健治率いる田中隊によって開発がどんどん進んでいる建業の西側に向かって歩みを進めていった。

「俺がいない間に何か変わったことは?」

「特には。ただ細かい所で言えば、魯肅が少し暴走したってことぐらいかと」

「気になる言い方だな。あいつの“少し”ってどのくらいなのか分からないんだが」

「簡単に言いましょう。『病院』と『学校』を建てたみたいです」

「……それは、また。思い切ったことを」

「詳しい話は、城に戻ってからということだ」

「そうだな。……君たちは、俺たちについて来い」

未だに周囲を警戒する藩臨たちに向かって俺はそう言って、返事も聞かないまま城に向かって歩き出した。

玉座に座った俺は大きく溜め息をついた。

「はあ、やっといつもの調子でしゃべれる」

「ははは、お疲れー」

俺の側に控える先輩が労いの声を掛けてくれるが、今回俺が山越族の所まで遠征に行く羽目になったのは彼の所為だ。

そのこともあつてジト目で見るが、先輩はどこ吹く風と知らん振りを決め込む。

「師匠。その人は誰ですか？」

生徒が教師に向かって質問するように右手を『シュバツ』とあげて尋ねてきたのは、先輩に対して疑惑の目を向ける敵虎である。見れば、藩臨や悟道といった面々も先輩に対して鋭い視線を送っている。

「彼の名は、徐盛。立場は、……。何て言ったらいいんだろう」

「そうだね。僕が一応兵を率いる者ではあるものの、主に行っているのは他国の情報収集と領土内の農林水産物の管理ってところだね」

「前者はわかるが、後者はどんなことをやっておるんじゃない？」

眉を顰めながら尋ねてきたのは、黄乱である。質問をしたはずの嚴虎とその妹である嚴興は先輩の話を聞いても、意味が理解できなかったのか首を傾げている。

「簡単にいえば、太史慈さまが治める領土内の民全員に「食料」を供給するっていうこと。僕がやっているのは、その枠組みを作るっていうことだけだね。興味があるなら、あとで詳しく説明するよ」

「うむ。頼む、その説明を聞くのはワシと…費棧でよからう」

「はいでしゅ」

黄乱が辺りを見渡して、目が合った費棧に声を掛けた。費棧も気になることがあったのか、黄乱の目配りにすぐに反応した。

「徐盛のことはもういいかな。じゃあ、次は魯肅だ」

藩臨たちの視線が健治を捉えた。健治は、最初いきなり向けられた視線にたじろいだだが、すぐに持ち直した。

「……徐盛に聞いたぞ。俺がいない間に、病院と学校を作ったんだってな？」

「まあ、結局の所そうなたったっていうか、僕もこんなトントン拍子に進むとは思っていなかった」

そう言って、健治は自分の隣でにこにここと笑みを浮かべる陸遜を見

た。その後、小さな溜め息を吐いた健治はそのまま話し始めた。

「病院についてですが、最初は医術の心得がある者を集めていただけなんですって。それこそ、人体に詳しい者、薬を扱う者、薬草に詳しい者、風土病を研究している者、それから産婆とかありとあらゆる知識を持つ人たちを集めて、情報の集約化を図ろうとしたんですが、その時に丁度近くの村で疫病が発生したと報告を聞いたもので、まあ後はご想像にお任せしますって」

それだけの医術に心得がある人間が揃っていたら、何とかできるんじゃないかって思うよな。

こうやって、健治がここにおいて病院を作っている以上、その疫病をなんとかすることが出来たのだろう。

「ちなみにこの病院は、国庫で運営することになったのであしからず」

「って、おいつ！」

「大丈夫ですよ、せん……太史慈さま。現在の建業は金回りがいいですので、問題ありません」

「そこから先は、私が説明しますね」

今まで静観していた少女はその間延びした独特なしゃべり方で皆の視線を自分に集めた。彼女の隣で、しゃべり終えた健治が額に掻いた汗を、手拭いを使って拭いている。余ほど緊張していたらしい。

「学校に関してですが、元々太史慈さまが建業の太守になられた際に決めた税収の引き下げが建てる要因のひとつになったと思われる

ます」

引き下げって言うてもなあ。他の州と同じように一定額まで引き下げただけなのだが？

そりゃあ、俺の前の建業の太守はとも見栄を張る輩だったらしくて、民に重税をかけて貧困化させ、自分達は悠々自適な生活を送ってきていたらしいので、その頃に比べれば税収は低くなっただろう。

「まず、税収が引き下げられたことによって、生活に必要なものを買っても自由に出来るお金が各家庭に少なからず出来たことにより自分の好きなものを買えるようになりました。そこで健治さまが目をつけたのが、娯楽用品です。子供向けに木を加工して作った玩具を売ってみたり、女性向けに髪飾りや首飾りといった装飾品を作ってみたりされていたんですが、なんといっても極め付きは本ですっ！」

はて、今彼女は健治のことを『健治』と呼ばなかったか？

陸遜は徐々に鼻息を荒くしながら話を進めるが、その横で名前を呼ばれた健治がソワソワというか、隣にいる陸遜から少しずつ距離をおいていつているような気がする。

「子供向けに描いた絵本も分かりやすくてよかったのですが、なんと言っても素晴らしかったのはちゃんとした物語になっている小説というものです！『忠臣蔵』とか『十三人の刺客』とか……はあはあ、内容を思い出しただけで身体が火照ってしまつて、あら？」

ある程度、陸遜から離れた健治だったのだが、身体をモジモジ始めた彼女が隣に健治の姿がないことに気付くとキョロキョロとあた

りを見渡し、柱の影に隠れようとしていた健治を見つけロケット弾の如く駆け出し、彼の首根っこを掴んで引き摺りながら元の位置に戻ってきた。

その際の健治は誰かに助けを求めるように、とても情けない顔になっていたが。

「ともかく、本が素晴らしい訳です！これは皆さんが読む価値があると思うのですが、困ったことに民の中でも文字を読める人間が僅かで、本屋には在庫がいっぱい残った状態だったんです。こんな素晴らしい本を読めない人がいるんだったら、読めるようにしてしまえばいいと思って、『ちらっ』健治さまの机の中で埋もれてしまっていた『学校へ案』を作ってしまったおうと考えた訳です」

うん。理由がひどく個人的だが、この際どうでもいい。

学校が出来るということは、民が知識を得るということだ。これによって、こちら側は優秀な人材を見出すことが出来、民側は出世のチャンスを得ることが出来る。学校を運営するに当たって、教師とか知識人を集めないといけないが、そこら辺は健治の得意分野だろう。

学校を作る上での問題点は、民が知識を得ることによって起こるかもしれない反乱といったところか。今のところ、給料とか福利厚生とかに力を入れているがどこから不満が湧き上がるか分からない。気をつけておかないといけないな。

「健治さま、一昨日夜伽に行った際に書きかけの原稿を見かけましたか？」

「「「「ぶふっ!?!」「」」」」

「ちょっと、穏!?! ななななにを、いきなり!?!」

真っ赤になつて慌てる健治とマイペースな陸遜を見て、俺は思った。

「リア充、氏ね」

「せんぱああああいつ!?!」

しまった。口に出して言ってしまったらしい。しかし、悔しいな。後輩が先に卒業してしまうとは…。

ふとあることが気になった俺は先輩に目配せした。すると、彼はすぐに首を横に振った。つまり、仲間。次に及川に目配せすると、彼もまた首を横に振った。ふっ、抜け駆けしたのは健治のみか。

健治に対してのお仕置きは何がいかないと考え始めた、その時

「はい! 師匠」

「ん、どうしたんだ。敵虎」

「『よとき』ってなんですか?」

彼女が発した質問によって、玉座の間の空気が凍ったのは言うまでも無い。

その質問を聞いた健治は咄嗟に陸遜の口を手で押さえた。それが懸

命だと思っ。

俺は、保護者的立場にある黄乱に目配せした。しかし、彼女はすぐに視線を外しやがった。

蔵虎と蔵興は、答えてくれるだろう人を探してキョロキョロしながら辺りを見渡している。

夜伽がどうのとか話せる空気ではないので、俺は意を決して誰かに丸投げする気満々で話しかける。

「あ……。蔵虎、その質問はこの軍議が終わったら、一番信頼している“同性”の人に聞いてくれ」

「え？はい、師匠命令ならば！よろしく、お願いします！藩臨さま」

「……よりによってか」

必死に目を合わせないようにしていた山越族最強の剣士はがつくりと頂垂れた。

俺はてつきり剣一辺倒だと思っていただけ、夜伽はどういうことなのか知っているんだな、彼女も。

「……私は族長の護衛官だった。……来る時は2桁の日もあった」

俺の考えていることが分かったのか、彼女は教えてくれたが、うん。

「かずぴー。その族長は？」

「たぶん、お空の上だ」

「ならええわ」

なんて羨ま……。いかん、いかん。敵虎の変な質問の所為で意識がかなりずれてしまった。

「太史慈さまも、山越族の方々も長旅によって疲れているでしょうから、今回の軍議はここまでということにしましょう。部屋の方へは侍女の者たちに案内させますので、どうぞ、おくつろぎ下さい」

そう言つて先輩が侍女たちを呼ぶ。けど、彼が呼んだ彼女たちは侍女であつて侍女ではない。全員、先輩の部下である忍だ。足運びが少々独特なため、藩臨や黄乱といった面々は気付いただろう。

で、玉座の間に残つたのは俺と先輩と及川の3人。健治は陸遜に連れ浚われてしまった。

「しかし、健治が一番乗りか」

「まあ、ムードもロマンチックさも、ほとんどなかったらしいよ。なんせ、健治くんは襲われた側だから」

「彼女は本を読むと興奮する性質（たち）のようだな、篠塚はなんの気兼ねもなく、彼女に自分が書いた小説の感想を求めたようなんや。つまり篠塚は腹すいた狼の前で、自分に調味料をかけてしまった憐れな子羊やつたちゆうわけや」

「それを聞くとあまり羨ましくないな」

「確かに、最低でも主導権だけは握りたいわな」

「「同感だ」」

しかし、これで揚州は完全に俺たちが支配下に置いてしまった訳だが、『江東の虎』はどんな動きを見せるのかね。

同盟か？不可侵条約か？それとも、奪い取るつもりなのか？

どんな事態になってもいいように、しっかりと準備だけはしている。

明日は、軍部の編成だな。仲間割れはやりたくないし、まずは交流戦といった所かな。丁度、軍師も2人いるし。紅白戦にしてみるのも面白いかもしれないな。

八話（後書き）

お気に入り登録86件
皆様、ありがとうございます。

九話（前書き）

登場人物設定&ステータス（その1）

九話

九話

あの後、先輩や及川と別れた俺は自室に戻り、ふかふかとまではいかないが自分の寝台で横になっていた。

今日一日だけは政務を行わなくていいように、先輩と健治が分担して終わらせておいてくれたらしい。でも、俺としては明日、現在建業にいる全ての武将と軍師で交流を目的とした模擬戦をやりたいと考えている。

せめて、机の上に載っている書簡は片付けておくかと思いつき立ち上がった所で、懐からDCPが床に落ちた。俺はそれを無造作に拾い上げ、机の上に置いた。

「そういえば、丁奉っていつていたっけ、あの少年」

俺は昼間に会った大きな弓を担いだ少年のことを思い出した。先輩が「おもしろいスキル」と言っていた以上、何かあるんだろうなと思いついて、俺は椅子に腰掛け机の上に置いたDCPのスイッチをいれた。

画面に映し出されたのは編成パートという文字。

俺は十字キーを押して、仲間の項目を選び映し出される情報に目を通した。

【太史慈軍】

【武将・兵士ステータス】

名前：太史慈 字：子義 真名：一刀 資金：136750 ↓670

体力：6000 攻撃力：25000 防御力：20000 移動力：200

兵士最大数4200人 ↓5000人

武器：金色の箠手（攻撃力：5000 防御力：5000 スキル：石破天驚拳）

スキル（自発）

『大号令Lv3』：3ターンの間、自軍部隊の攻撃力が15%上昇し、毎ターン15%の兵士数を回復する。

『石破天驚拳Lv1』：エネルギーを凝縮した一撃を直線状に放つ。射線上の敵味方関係なく全ての武将と兵にそれぞれ5000の固有ダメージを与える、諸刃の剣ともいえるスキル。

スキル（自動）

『指揮Lv3』：部隊に所属する兵士の攻撃力が30%上昇

『援護防御Lv3』：近くの自軍部隊の防御力を50%上昇

『援護攻撃Lv3』：近くの自軍部隊の攻撃力を50%上昇

名前：太史慈隊 兵種：強化兵 動物の顔を模した面をつけている。犬の面をつけた青年がリーダー格と思われる。

体力：100 攻撃力：100 移動力：100 コスト：100
0（1人につき）

スキル（自動）

『援護防御Lv3』：近くの自軍部隊の防御力を50%上昇

『援護攻撃Lv3』：近くの自軍部隊の攻撃力を50%上昇

「山越族のイベント？で結構な資金が溜まっていたんだな。よし、今のうちに兵士最大数を増やしておこう。おっ！ギリギリだけど、5000人までいけるな。よし、決定っ」と

名前：徐盛 字：文響 真名：京一郎 資金：28900

体力：3000 攻撃力：7200 防御力：4600 移動力：200

兵士最大数：1500人

武器：凍てついた戦斧（攻撃力：4000 防御力：2000 ス
キル：碧風衝破）

スキル（自発）

『挑発Lv1』：3ターンの間、前線に武将が常にいる。作戦が特
攻固定

『碧風衝破Lv3』：戦斧を高速で振り回すことによって発生させた冷気を伴った風で敵全体の兵士数を15%減少させる

スキル（自動）

『指揮Lv3』：部隊に所属する兵士の攻撃力が30%上昇

『援護防御Lv3』：近くの自軍部隊の防御力を50%上昇

『援護攻撃Lv3』：近くの自軍部隊の攻撃力を50%上昇

名前：除盛隊 兵種：上忍・影組

体力：15 攻撃力：21 移動力：300 コスト：112（1人につき）

スキル（自発）

『瞬転法陣Lv3』：最も近くの自軍部隊の近くへと移動することができる

スキル（自動）

『隠密行動Lv3』：夜間戦闘時、敵に視認されない

『韋駄天Lv3』：移動範囲が2倍になる

「白髭海賊団の時に、俺の前の敵に放った技はこれだな。これもある意味でチートだよな。先輩の部下も、機動力に関してはピカイチだし」

名前：韓当 字：義公 真名：肇 資金：19872

体力：3600 攻撃力：10500 防御力：1530 移動力：50

兵士最大数：1000人

武器：加農砲（攻撃力：8000 移動力：-100）

スキル（自発）

『砲撃Lv3』：小範囲に固定ダメージ（5000）。対象が建物の場合、威力は3倍となる

スキル（自動）

『兵器改良Lv3』：兵器の威力を60%上昇

『攻城Lv3』：建物に対して攻撃時、攻撃力30%上昇

『開発Lv3』：兵器開発の為に使用する資金が15%減少

名前：韓当隊 兵種：爆破工作員

体力：6 攻撃力：50 移動力：65 コスト：570（1人につき）

スキル（自動）

『兵器改良Lv3』：兵器の威力を60%上昇

『攻城Lv3』：建物に対して攻撃時、攻撃力30%上昇

「はいはい。及川が言っていた拠点があつたほうが動かしやすくて、そういう意味か。しかし、加農砲とかありなのか？部下も名前が爆破工作員つて、どこのテロリストだよつて」

名前：魯肅 字：子敬 真名：健治 資金：9999999

体力：2500 攻撃力：2000 防御力：1680 移動力：100

兵士最大数：1000人

武器：ただの扇（防御力：30）

スキル（自発）

『流言飛語Lv3』：3ターンの間、敵単体部隊の兵数20%減少

『勧誘Lv3』：敵部隊の兵力20%減少させ、自軍部隊の兵数20%上昇

スキル（自動）

『盾装備Lv3』：遠距離攻撃によるダメージを60%減少

名前：魯肅隊 兵種：商人

体力：3 攻撃力：2 移動力：200 コスト：10（1人につき）

スキル（自動）

『商魂Lv3』：政務パートにおいて、所持している資金の（兵士数×0.3）%分上昇させる。（最大300%）

「はあっ！？なんだ、これ！？マジでなんなんだ、これ！？資金が1:10:100……っっ！？（啞然）」

名前：陸遜 字：伯珂 真名：？？？

体力：2000 攻撃力：4800 防御力：3200 移動力：140

兵士最大数：1000人

武器：九節棍「紫燕」（攻撃力：2000 防御力：2000）

スキル（自発）

『火計Lv1』：小範囲の部隊へ大ダメージ。

スキル（自動）

『癒しの風Lv1』：自軍のターン終了時、武将と兵の体力を5%回復する

『軍師Lv2』：スキルが成功した場合、部隊に所属する兵士の攻撃力を35%上昇させる

「俺も真名を聞いたから知っているけど、ステータス上では知らない扱いか。やはり、そういった関係にならないと教えてはもらえないってことだろうな。同性同士なら問題ないみたいだけど」

名前：丁奉 字： 真名：???

体力：2800 攻撃力：5600 防御力：950 移動力：235

兵士最大数：500人

武器：大弓「雷鶴荒殻」（攻撃力4000 スキル『流星雨』）

スキル（自発）

『流星雨Lv1』：空中高く飛び上がり、地上に多数の矢を放つ。

レベルがあがることに攻撃回数増加

スキル（自動）

『もつたいないLv1』：戦場に捨てられた物資を回収し、自分のものとして使用することができる。

『必中Lv1』：攻撃が外れない。レベルがあがると攻撃が、鎧や盾を避けて生身に当たるようになる。

「先輩の言う通り、中々お眼にかかれない、もといおもしろいスキルだわ」

名前：巖虎 字： 真名：????

体力：1800 攻撃力：2800 防御力：1650 移動力：182

最大兵士数：1000人

武器：青色の箆手（攻撃力300）

スキル（自発）

スキル（自動）

名前：山越族・若人集

体力：14 攻撃力：16 移動力：125

スキル（自動）

『援護防御Lv1』：近くの自軍部隊の防御力を30%上昇する。

「あるえー？厳虎のスキルは？え、俺好みに開発しちゃっていいの？……って、何を考えているんだ」orz

なまじ犬耳と尻尾を生やした姿を幻視しているので、そっち方面も嬉々としてやってくれそうではあるけど…。まあ、今は頭の片隅に追いやっておこう。

名前：厳興 字： 真名：????

体力：1800 攻撃力：2500 防御力：1950 移動力：182

最大兵士数：1000人

武器：赤色の具足（防御力：300）

スキル（自発）

スキル（自動）

「…… 蔵虎の双子の姉妹っていつていたよな。武器の攻撃力と防御力を引いたら、まったく同じステータスか。この娘もまた開発していくパターンか。この姉妹って戦場ではどんな感じで戦うんだろう？ サポートし合っているんだったら… 俺がつけている援護系のスキルを持たせたほうがいいよな」

名前：藩臨 字： 真名：瑠璃

体力：5000 攻撃力：12000 防御力：10000 移動力：300

総兵士数：0人

武器：太刀「龍紅爪」（攻撃力6000 防御力5000 スキル：竜吼砲）

スキル（自発）

『竜吼砲Lv3』：対象の武将に対して、4000の固定ダメージを与える。

スキル（自動）

『いくさ人Lv2』：ターン終了時、自分の隊に兵がいなければ体力を40%回復する。

「は？…… なんで、藩臨の真名を俺が知っていることになっているんだ？ えっ？ まさか、彼女のルートに入るためには一騎打ちで勝つ

ことが最低条件だったとか？……（きよろきよろ）……部屋、掃除しておこうかな」

名前：黄乱 字： 真名：？？？

体力：3000 攻撃力：6500 防御力：3000 移動力：100

最大兵士数：5000人

武器：大槌「陽湖畔」（攻撃力：3500 効果：気絶）

スキル（自発）

スキル（自動）

『指揮Lv2』：部隊に所属する兵士の攻撃力が20%上昇

『喝！Lv3』：部隊に所属する兵士はどんな必殺の攻撃をくらっても体力を1残して踏ん張ることができる。

「お、これも中々お眼にかかれないスキルだな。けど、生き残れても回復する手段が無いと……健治に救護隊と衛生兵を作ってもらうか。しかし……この武器なんて呼ぶんだ？ようこはん？ひこはん？……まさか、“ピコハン”じゃないよな」

名前：尤突 字： 真名：？？？

体力：2400 攻撃力：2500 防御力：6000 移動力：236

最大兵士数：2000人

武器：漆黒の帯（防御力：3000）

スキル（自発）

『捕縛Lv3』：無傷の状態の武将でも無力化し、捕縛することができる。

『摩掛操帯法Lv3』：一騎討ち専用スキル。帯を自由自在に操り、敵を自分の防御力の3倍の力で締め上げる。

スキル（自動）

『女王さまLv1』：攻撃ターンの間、攻撃力が15%上昇する。

「……防御力の3倍って、18000？何気に強キャラじゃないか。問題は一騎打ち専用ってところか」

名前：費栈 字： 真名：????

体力：1300 攻撃力：1000 防御力：1200 移動力：100

最大兵士数：3000人

武器：孔雀の尾（防御力：200）

スキル（自発）

『伏兵Lv3』：部隊に所属する兵士をMAPの好きなところに配置することができる。最大3箇所まで。

『挟撃Lv3』：敵部隊と戦闘になった時、部隊を2つに分けて左右から攻撃することが出来る。

スキル（自動）

『指揮Lv3』：部隊に所属する兵士の攻撃力が30%上昇

『軍師Lv3』：スキルが成功した場合、部隊に所属する兵士の攻撃力を50%上昇させる

『幸運Lv3』：遠距離攻撃無効

「……費栈、すげえ。軍師の中の軍師じゃん！スキルの『伏兵』と『挟撃』の2つと『軍師』のコンボは反則だろ。『指揮』も合わせると80%アップ!？」

先輩たちと新しく仲間に加わった人間のステータスを見終えた俺は、こう思った。

「明日の模擬戦はやめておこう。うん、俺は太守としての政務という大事な仕事があるし、藩臨たちだって建業に引越してきたばかりでいきなり戦えって言われても戸惑うだろうし、下手したら先輩たちと溝が深まってしまいかもしれないしな。うん、そうしよう」

俺はそう自分に言い聞かせながら、椅子から立ち上がり部屋の片付けをちよつとして、寝台に横になった。

結局、その夜は誰も訪ねてくることはなかった。……（泣）

九話（後書き）

お気に入り登録323件
日間ランキングも上位に食い込んでいて感激です
これからも頑張ります

十話

十話

眼前に広がるのは見通しの良い大平原。

本日はここで、新しく仲間となった藩臨たち山越の民と交流を目的とした模擬戦が行われることになった。

それも午前と午後の2回。立食形式の昼食を挟むことによって、さらに交流を深めようというのが先輩の案だ。

まあ、戦力を均等に分けるということで、昨日全員のステータスを確認していた俺が抱いた最悪の事態が現実のものになってしまったのだが……。つまり、俺こと太史慈率いる【太史慈隊】VS【俺たちを除いた太史慈軍】というのが今回の模擬戦の内訳である。

戦場となる大平原を挟んだ向こう側には、本来は味方であるはずの万を超える軍勢が見える。俺たちから見て正面には藩臨と黄乱の旗が見え、右側には嚴虎と嚴興の姉妹の旗。左側には尤突と悟道の2人の旗が見える。そして、作戦を伝えて廻っているのか費棧の旗が右へ行ったり、左に行ったり、正面でいくらか止まって、また右へ、みたいなことを繰り返している。ちなみに先輩たちは、本陣に固まっただけだ。

先輩が模擬戦を午前と午後に分けたのは、午前の戦いを反省して、皆で一丸とならないと対抗できないってこういう事を藩臨たちに教えるためなのではないか。

それを考えた俺は大きく溜め息をついた。

「つまり、俺たちは全力で闘わないといけないって訳か。べ、別に勝たなくてもいいやって思っていたわけじゃないんだからね」

「……」

うう、巷で有名なツンデレとやらを披露してみたが、まったくいつていいほど反応がないのでもの凄く恥ずかしい。

一応、彼らも建業の街で暮らしているため、建業の民との心温まる交流もあつて呼び出した当初の頃よりも幾分か感情が表に出るようになってきてはいる。しかし、こういうことには未だに反応してくれない。

「はあ、早く始まらないかな」

「太史慈さま。あちらの軍勢に動きが」

そう俺に伝えてきたのは犬の面を被った青年だ。彼の言葉どおり、右側に展開していた敵虎と敵興の姉妹率いる軍勢が接近しつつあった。

「右翼に伝令。いつも通り、2人1組となつて対処するようにと」

「はっ！」

そう返事をして右翼へ向かう犬の面の青年。……面倒だ、次から彼のことは『ケン』と呼ぶことにする。

それはともかく、これからどうなることやら……。

その頃――

「たった5000人。だけど、この建業の地において最強を誇る先輩が率いる、これまた自他共に認める最強の部隊」

「て、敵に回して初めて分かる、この恐ろしさ」

「あんなのが――、街に攻めてきたら、私は民を丸ごと連れて逃げますねー」

「ははは。正直者だね、陸遜は」

そう言っただけで談笑しているのは、僕と後輩で現在は建業の国庫の守人である魯肅、彼もまた後輩で現在は建業の兵たちが身に纏う武具や敵に突破されにくい防壁を作っている韓当、そして新規参入の軍師にして内政にてその敏腕を振るっている陸遜の4人だ。

本当は一刀くんが連れて来た山越族の皆とも一緒に対策を練りたかったのだけれど、藩臨や嚴虎たちに『我々は太史慈さまに従うのであって、貴様らと組むのではない』と断言されてしまった。おかげで、僕たちは本陣で待機し、彼女たちが山賊たちを相手して勝ってきた布陣で一刀くん挑むことになってしまった。予想はしていたけど。

「京一郎さん、正直にいつて彼女たちは勝てると思いますか？」

健治くんがそんなことを尋ねてきた。

「一刀くんの部下である強化兵なんだけど、僕の部下である忍者たちが7〜8人で戦って何とかなるレベルだからね。ゲームの上では圧倒的な数で戦えば勝てたかもしれないけど、この世界に来て一刀くんは彼らに2人1組で戦うように徹底させている。1人が攻撃している間、もう1人は守りに徹するように。おかげで、彼らが負けるのは武将と闘った時のみだ。けど、それも生半可な能力の武将だと囲まれて終りだけだね」

「いやー。戦いとうない！勝てるわけ無いやん」

「肇くん、これは山越族の皆と溝を埋める為に必要なことだ。戦わないっていう選択肢はない」

「うつそおおお！？」

「あつ、巖虎ちゃんと巖興ちゃんの姉妹が攻勢に出たようですー」

「伝令だ。高台にて戦況を“記録”している丁奉にこれから起こることを絶対に見逃すなと」

「御意」

「さて、何分持つかなあ」

「」「うわぁ」「」

健治くん、肇くん、陸遜の頬を引き攣らせる表情が今から起こることを暗示していた。

俺が率いるのは5000人の強化兵たちだ。

とりあえず、正面に2000人、右翼と左翼に1000人ずつ、本陣に1000人を配置している。その右翼に厳虎・厳興姉妹率いる2000人の軍勢が迫ってきていたのだが、『サクツ』と敗走させた。

『ケン』の話によれば、厳虎・厳興の姉妹は鳶に油揚げを搔つ攫われたような間抜け顔を曝していたようだ。って、なんでその例えを知っているんだと、俺が首を傾げたら、竜の顔を模した面を被った青年が先日持つて行かれらしい。

って、本当かよ。

で、その姉妹は俺がいる本陣にて石畳の上で正座している。最初は嫌がっていた2人だったが、敗者に文句をいう権利は無いということとを伝えると、厳虎は嬉しそうに、厳興は嫌そうに正座した。そして暫くすると…

「師匠、足が、足の感覚が。はっ、これも師匠の愛なんですね！よしっ、どんとこい！」

「ケン。重石を一枚乗せてやれ」

「御意」

「えっ、師匠？嘘ですよ、師匠？ししょーっ！？ああ、これはこれでいいかもー」

厳虎の方はこの状態が強くなるための修行の一環だと思って、頬を染め始めていたのでケンに命令して、重石を一枚彼女の膝の上に乗せさせた。この娘は、もう駄目な気がする。

「お姉ちゃんの馬鹿。太史慈さま、ボクはいいです」

「厳興、君らはどうして、他の軍勢と連携することもなく突っ込んできたんだ？」

「え。ボクらには必要ないと思ったからですけど」

「ケン」

「御意」

「あ、あの太史慈さま。それってお姉ちゃんの膝に乘せられたものと同じものでは、や、やめっ。あっ！？おもー」

悲鳴と嬌声を上げている2人はこのまま本陣にて、午前の模擬戦が終わるまでお仕置きしておくことにした。

次に動いたのは正面の藩臨と左側に展開していた尤突の部隊だった。悟道の部隊はぽっかりと空いてしまった厳虎・厳興の部隊の穴を埋めるべく動いている。悟道は大人だなー、と思ったりしなかったり。さて、どうするかな。

「太史慈さま。尤突さまと悟道さまたちの部隊は我らにお任せ下さい」

確かに藩臨に関しては俺が行かないと拙いか。……そうだ。

「ケン。伏兵には気をつけろよ」

「は？……御意。部隊の者に徹底させます」

「じゃあ、行ってくるか！」

俺は拳を鳴らして戦場に赴いた。

結論を言おう。

「いやー……ないな。これはない」

田中隊が今回の模擬戦のためだけに作った太史慈隊の本陣にて、敵軍の武将と軍師が全員石畳の上で正座し、膝の上に重石を乗せられて苦しんでいる。一名、悦んでいるのもいるけど。

午前の部の模擬戦はなんなく俺たちの勝利で終わった。俺が危惧していた費栈も、スキルを使うことなく様々な陣を組んで俺たちを囲もうとしたが、そこは俺の自慢の強化兵。囲まれた瞬間に、囲んだ兵を撃破していた。

藩臨に関してはあの時の一騎打ちと同様、本気で相手をしていたが尤突と悟道、そして黄乱と費栈の部隊を撃破した部下たちが俺と藩臨を取り囲んでいた。状況を把握した藩臨は無駄な抵抗もすることなく、降伏したのだった。

で、本陣に急襲をかけた俺たちを待っていたのは、陸遜の火計と及

川の砲撃。

「ケン！韓当と陸遜に重石を追加だ！」

「御意」

「ちよつ、かずぴー！？」

「これ以上は無理ですー」

「五月蠅い！あれはマジで死ぬかと思つたわ！」

それをなんとか振り払つた太史慈隊の背後に転移してきた先輩が率いる忍者の徐盛隊。俺が石破天驚拳を使って状況を変えようとするとに狙つたように飛んでくる丁奉の矢。あと1人、俺と対等に戦える武を持つものがいたら、俺は負けていたと断言する。そう、ここに藩臨がいたら俺は負けていたと言っているのだ。

「藩臨、黄乱、尤突、費棧、嚴虎、嚴興、悟道。お前らは何で、徐盛たちと連携せずに戦つたんだ？まさか、俺たちに自分達だけで勝てると思つたか？ふざけるな！！」

俺の叱咤の声に俯く嚴虎、嚴興、悟道の3人。藩臨は俺を自分の所に引き付けていたという実績がある為、唇を噛み締めているだけだ。尤突と黄乱は何かを言いたそうにしていた為、発言を促した。

「尤突と黄乱、何か言いたげだな。聞くぞ」

「太史慈さまが率いる兵があんなに強いというのは聞いていなかったわ」

「そうじゃな。少々、『錬度が高い』…程度の情報じゃったからのう」

「ふわわ！？そんな乃愛しゃん、千代しゃま！私が必死に走り回って手に入れた情報に目を通してくれなかったんでしゅか！？ひどい、ひどすぎるでしゅう。ふ、ふええええん」

大きな声を上げて泣く費栈を見て、俺は居た堪れない気持ちになった。

尤突と黄乱は、冷や汗をだらだらと流しながら、涙を流し続ける費栈を慰めようと声を掛けるが火に油である。彼女達が声を掛けるたびに、今までのことを思い出すのか、泣き声の大きさがどんどん大きくなっていつている。

拳句の果てには……

「今までもそんなに気がしていましたけど……ぐしゅ…、難なく勝ててきたから……ずびっ…、気にしないようにしていたけど、みんな私の話なんて聞いていなかったんでしゅね！もういいです。私はもう、貴女たちの軍師を辞めます！太史慈さまっ！私の真名は天里あまりでしゅ。私の智勇の全てを貴方さまに捧げます。どうか、お役立て下しやい！」

こんな宣言を言つてのけた費栈。その姿は、憑き物が落ちたように晴れ晴れとしていた。

十一話

十一話

【VS太史慈隊】

『勝利条件』

- ・ 敵本陣に立てられた旗を奪取する
- ・ 対等に戦えるということ、王に示せ！

敗北条件

- ・ 本陣に立てられた旗を奪取される』

立食形式の昼食を取り終えた僕たちは田中隊が作った本陣にて軍議を行っている。

僕たちがまず行ったのは、自軍の戦力の分析である。これをちゃんとしないうちに、格上の存在である太史慈隊に挑むのは無謀すぎるからだ。

「僕の部隊が得意とするのは機動力を用いた『攻撃と離脱を繰り返す戦法』だ。強さが異常である太史慈隊の兵たちだが、足の早さは人並みであることから、僕の部隊でのこの戦法はかなり有効だと思う。ただ、火力が弱いため数を減らすことは出来ない。罔、もしくは敵を誘導するのに優れていると言ってもいい」

午前は聞く耳持たずで、勝手に陣を敷いてしまっていた藩臨や黄乱といった山越の人たちも真剣な面持ちで僕の話の話を聞いている。

「ワイの部隊は基本的にこういった野戦には向かへん。ワイらは普段、兵たちが身につける武具を鍛えたり、攻城兵器を作ったりしている職人とそれを扱う専門の兵たちの部隊なんや。午前の模擬戦では、かずびーの部隊がこちらの本陣に仕掛けてくるっていう情報があったから狙い打つことができたんやけど、さすがに2度目はないやろ。ワイがかずびーやったら、まずワイらを狙うやろうからな」

「僕の部隊は論外ですねって。僕自身、文官で戦う力はほとんどありませんし、部下たちだって筆より重い剣や槍など握ったことはありません。こうやって戦場で軍議に参加するのだって、珍しいことなんですって」

僕の後に、自分の部隊の説明をした肇くんと健治くん。彼らの話を聞き終えた藩臨たちは首を傾げている。

「そのような戦力で、どうやってお館さまを追い詰めたんじゃ？」

そう尋ねてきたのは、大槌を背負った黄乱。その後ろでは藩臨が頷いている。

僕は陸遜に向かって目配せした。意図が分かった陸遜はキャスター付きの黒板（作：韓当隊）を引き摺って、僕らと藩臨らに見える所に立った。

「ではではー、午前の模擬戦で使った作戦をご説明させていただきますー。私、太史慈軍の軍師である陸遜と言いますー。よろしくお

願いますねー」

ぺコリと頭を下げた陸遜はにこやかな笑みを浮かべたまま白いチョーク（作：韓当隊）を握り、黒板に書き始めた。

「今回の模擬戦での勝敗を決するのは本陣に立てられた旗を奪取するかされるかでしたー。なので、太史慈さまが率いる部隊がこちらの本陣に近付いてくるのは明白でしたのでー、部隊を細かく分断できるように韓当隊や魯肅隊の人たちに油を撒いてもらったんですー。こう幾つかの箱を作る感じでー。後は丁奉くんに頼んで火矢を放ってもらいました。でも、これも午後には使えないと思いますー」

火の上がった当初こそ、一刀くんと一緒に驚いていたが時間が経つにつれて火など関係なく進み、後方から襲撃を掛けてきた僕が率いる部隊と戦っていた太史慈隊だ。次に目の前で火の手が上がるのが迷わず、突き進んでくるだろう。

「よって、午後からの模擬戦では正面から戦うのと同時に、敵本陣に奇襲をかけ旗を奪取する戦法を取りたいと思いますー。言うのは簡単ですけど、実行が難しいのは分かっていますー。それと、山越族の方が好まない戦い方だっているのもー。けど、現在の私たちが太史慈さまの部隊に勝つ方法はこれしかないんですー」

陸遜は藩臨たちの表情を窺うように見渡して、

「皆さんの力を貸してくださいー。これは、ここにいる全員の力を使って初めて効をなすことが出来る作戦なんですー。おねがー……頭は、……下げなくていいーほえ？」

頭を下げようとしていた陸遜の話を遮って藩臨が立ち上がった。そ

して、勢いよく頭を下げた。その行為を見ていた黄乱や厳虎たちも立ち上がって頭を下げる。

「……午前の模擬戦での敗北、……これは我らの驕りが招いたことだ。……それをこの場を持って謝罪する。……昂」

「はい、藩臨さま。オレらは師匠のことを噂で知っていた、5万人の海賊を退けたっていう話も。でも、異民族や山賊たちとの戦いが日常茶飯だったオレらは『なんだそのくらいか』みたいな考えだったんだ。費栈さん以外」

「やっぱり彼女は、知っていたんだね。一刀くん率いる太史慈隊の力を」

僕みたいな情報を集められるような部下はいなかったはずなのに、僕たちの戦力がある程度知っていた彼女は、山越の民でリーダー格である藩臨や黄乱や尤突といった主たるメンバーたちに、太史慈隊の兵1人に対してこちらは5人以上で小隊を組んで対応した方がいいと意見していた。

まあ、結局の所費栈の必死の物言いは効を為す事はなかった上に、午後からの模擬戦が午前とは比べ物にならないほど厄介なものになってしまったのだが……。

「くそう。ワシがあの時、天里の話を詳しく聞いておれば」

「妾だって、天里と話す機会は沢山ありましたわ。なのに、妾はあの子のいう事を蔑ろにしてしまった。小さい頃から一緒に育った、幼馴染だっというのに……」

手で頭を覆って嘆く黄乱と、俯き肩を震わせる尤突。それを才口才口と見守る敵虎と敵興姉妹。

そんな暗い空気が漂い始めた中、1人の青年が手を上げて言葉を発した。

「陸遜…殿。その作戦にケチをつける訳ではないが、本陣に奇襲をかけるのは難しいかもしれない」

「はいー？」

陸遜が首を傾げる。いや、僕自身も興味があった。彼、悟道の言いように何かを知っていると思ったから。

「費栈さまの采配で最も恐ろしく効果を発揮していたのは、伏兵と挟撃の2つです。こちらの作戦にかかって、慌てふためく敵をこちらの被害を出さずに処理できたことなど両手では数え切れないほどありました」

「本当なんですかー？」

「私は、太史慈さまに認めてもらうまで、費栈さまの下で部隊を率いていました。だから、あの方の力は理解しているつもりです。ましてや、太史慈さまの下で費栈さまがその力を振るうのかと思うと身体の震えが止まりません」

正直、彼の話の聞かなければよかったと思った。こちらが有利になる情報かと思えば、まったく逆のことだった。

「完全に無理ゲーやな」

「言うな、肇くん。始める前から気が滅入ってしまう」

「うーん。そうになると、どうでしょうー。あちらに費栈さんがいる以上、先程のようなこちらが攻勢に出るのをただ待っているというのは無いでしょうし。うー……」

陸遜はそう言っただけで眉を寄せて悩み始める。あーでもない、こーでもない。と、小さな声で独り言を呟くように考えを巡らせる。

「我が軍の軍師さまが考えを纏める間、そちらの部隊が得意とする戦い方を教えてくれないか？」

「……うむ。分かった、徐盛殿」

「僕のことは、徐盛と呼び捨てで構わないよ」

「……承知。千代」

費栈のことで頭を抱えていた黄乱が藩臨の呼び掛けで顔を上げた。

「ワシの部隊か……。すまん、敵を叩き潰す？ことかのう」

「あ、オレの部隊もです」

「ボクの部隊も」

ふざけんな。この脳筋どもめ！！

藩臨の視線の気付いた尤突も顔を上げ、

「妾の部隊は……はっ、天里がいないとどう動かせばいいのか分からない!？」

きよろきよろと辺りを見渡したと思ったら叫んでいた。

「……悟道。……頼みの綱はお前だけ」

藩臨が視線を向けると、悟道は頬を引き攣らせていた。

「えっ、あっ、いや……。壁ぐらいにはなんとか」

「……徐盛。……すまない、我らはこんなものだ」

あ、頭が痛い。どうやって君たちは山賊や異民族に勝ってきたんだ？と問いたい。

……そうか、軍師として費牋がいたから勝っていたのか。山越族特有の正面から叩き潰そうとする正攻法での戦いだけでは、勝てないと思った彼女が伏兵や挟撃といった作戦を取ることで山越族を護ってきた。

「あえて言わせてもらうけど、君たち馬鹿だろ」

「……面目ない」

『シユン』と頂垂れる彼女らの姿を見て、僕もつい米神を押さえてしまった。

「京一郎さん、いつそのこと降伏しませんか？」

健治くんがそんなことを言ってきた。

「魅力的な案だけど、それはできないよ。ここで逃げたら、兵たちが僕たちについてこなくなる可能性がある。なんとしてでも一矢は報いないといけないんだ」

「でも、敵は少数精鋭。こちらは数だけが勝っているだけで、鍊度は武将も兵たちも低い。守りに入らないと、午前のように『サクツ』と数を減らされてしまいますって」

「それだー！『がばっ！』さすが、私の旦那さまー。私が困っている時はちゃんと助けてくれるー。えへへー」

復活した陸遜に抱きつかれ、そのたわわな母性に口と鼻をふさがれた健治くんが手足をばたつかせている。陸遜はそんな彼の状態も関係なしに、『ぎゅぎゅぎゅー』と嬉しさを体現するかのように力いっぱいに抱きしめる。その内、健治くんの手がぱたりと落ちて動かなくなった。

「篠塚の奴、無茶しやがって」

「肇くん、やめてあげて。きっと、健治くんは何が起こったのか理解できなかったはずだから」

「傍から見れば羨ましい状況やけど、実際にはされとうないな。割と本気で」

男2人、恋人のたわわな母性に包まれたまま昇天した後輩に向かって敬礼するのだった。

とても幼い顔立ちをした少女に見える女性が、無表情と無反応がデフォの俺の自慢の部下に指示を出して、出して……涙目になっている。命令を聞いてくれるのは嬉しいようだが、反応があそこまでないといと逆に恐ろしいようだ。

最初、彼女は「千代さまや乃愛さんに私の力を思い知らせてやる――！！」と躍起になっていた。

が、落ち着いてきた彼女は顔を青くして、「嫌われたかな？乃愛さん、私のこと嫌いになったかな」とぶつぶつと小さな声で呟いて暗くなっていた。

さすがに模擬戦の開始時刻が近付くと意識を切り替えて、軍師として兵たちに指示を出し、布陣を磐石な物にしていく。その手腕はさすが、としか言いようがない。

「太史慈さま。今回は午前の時とは違い攻めの姿勢で行ってもらいましゅ。陣形は魚鱗の型で、太史慈さまには開始直後に、石破天驚拳を右側に見えるあの森に放ってもらいます。私だったら、本隊とは別に敵陣を襲撃し旗を奪取することを目的とした機動力に優れた部隊を作成しますので、恐らくあちらも似たようなことを考えているはずでしゅ」

ここで深呼吸をして俺をまっすぐな瞳で見上げる費栈。

「分かった。その作戦に乗ろう。他に気をつけることはあるか？」

「はい、勿論です。いくら脳筋の山越の武将いえど、午前の戦いで太史慈しゃまがどれだけ大きな存在であるかということは、もう分かっているはずでしゅ。徐盛さんや陸遜さんの話を聞いて、太史慈隊の兵士1人に対して数人に対応するということが考えられましゅ。こうなると、その場に長く引き止められることになり、今日二度目の戦いということで疲労が太史慈隊の精度を奪うことがあるかもしれません。これは相手にも言えることでしゅけど」

「こちらが行うのは短期決戦っていうことだな」

「御意でしゅ」

「兵はどのように配置する？」

「正面に3000、右翼と左翼に500ずつ。本陣に500。そして、左側の森に500人、伏兵を配置します。太史慈さまには前線で兵を鼓舞しつつ、本陣を目指してもらいたいのですが」

王が自ら戦場に、それも最前線で戦えって、これは彼女に試されていると思っていいたのかな。真名を預けられはしたけど、本当に自分が命を賭けてもいい存在なのかを彼女なりに見極めようとしているのかもしれない。

それなら、答えるほかに選択肢は無いだろう。先輩たちには悪いが、ちよつと本気でやらせてもらおうとしようか。

「全軍、拔刀！」

俺の突然の命令にも兵たちは乱れることなく応対し、剣や槍をその手に構える。

「これより、我らは仮想敵である味方の軍に攻撃を仕掛ける。名目上は模擬戦だが、お前たちも見たであろう。奴等の午前での戦いぶりを。あれで建業の民を、仲間を、友を、家族を、皆を護れることができるか？答えは、……否だ！奴等には覚悟が足りない！熱さが足りない！速さが足りない！何よりも意思が感じられない！力があるから護れるわけでは無い。力は、意思があつてこそ、本当の価値がある！奴等に見せ付けろ！本当の力つて奴を！行くぞ、我が友たちよ！」

「「「「オオオオオオ！！」「」「」」」

兵たちが上げた雄たけびは、地鳴りのような波となり、周囲の木々をも振るわせた。

「はあ、ふわわわ……。わ、わわわ……」

しまった。彼女に耳を塞がせるように言うのを忘れていた。おかげで彼女は俺の大音声の大本令を間近で聞くことになり、目を回してしまっている。

「あー、うん。『ウサギ』、天里と本陣を頼む」

「御意」

「『ケン』は俺と共に来い。『タツ』と『ヨウ』はそれぞれ右翼と左翼の指揮を執れ。それから『ジャ』、お前は伏兵部隊の指揮を任せる」

「「「御意、お任せを」「」」

「さ、本日2度目の戦いだ。抜かりがないようにいくぞ！」

「「「「応っ！！」「」」」」

「ふわわ、眼が、眼がまわりましゅ」

【備考】

- ・ 太史慈隊の核となるメンバー名を決定しました。
- ・ 十二支で行きます

十二話

十二話

費棧が指示した通り、俺は開戦直後に『石破天驚拳』を右側にある森に向けて放った後、兵たちを率いて敵本陣に向かって大平原を駆けていた。

敵本陣の前に布陣しているのは、徐盛の忍者部隊。その後ろには藩臨と黄乱の部隊が展開し、本陣本隊には健治と及川の部隊が展開しているようだ。敵軍の中で旗が見当たらないのは嚴虎、嚴興、尤突、陸遜、悟道、丁奉の6人。

挟撃や伏兵を考えているんだろうが、勢いのついた太史慈隊の突破力を舐めてもらっては困る。

「決して止まるなよ、お前たち。敵本陣を目指して、突き進め！」

「」「応っ！」「」

しばらくすると漆黒の衣を身に纏った兵たちが俺たちの行く手を塞ぐように立ちはだかる。

その漆黒の部隊を率いるように戦斧を肩に担いだ青年が仁王立ちしていた。

「少しばかり、付き合ってもらおうよ。一刀くんっ！！」

「上等だあ！！」

先輩が振り下ろす戦斧の刃と俺の籠手がぶつかり合い、甲高い金属音を辺りに鳴り響かせた。

「交流を目的とした模擬戦に『大号令』を使うとか、あまりに非常識なんじゃないの？」

「午前の模擬戦は途中で諦めていた兵も多かったですからね。太史慈隊の兵たちよりもそちらの兵たちに喝を入れる意味で言ったんですけど？」

「どうりで、こっちの兵の攻撃力も上がった訳だ。……っ！？やっぱ僕“だけ”じゃ敵わないな」

「は？どういうことで……」

「……助太刀」

「って、危なっ！？」

先輩の左側から走りこんできた藩臨が剣を突き込んで来た。その速さに瞠目しつつ、籠手で剣先を無理矢理ずらし、攻撃を放ってきた彼女に向かってカウンターの一撃を見舞いしてやろうとした所で、3人目が現れる。

「邪魔するぞい、お館さま！」

芯のある声と共に俺の身に迫ってきた大槌。両手をクロスして防御することなんか耐えることが出来たが、あの威力は半端ではない。

「ごめんね、一刀くん。どう考えても、君を1人で相手するのは無理だから。4人で押さえることにしたんだよ」

「徐盛、藩臨、黄乱……あと1人は……丁奉か!？」

俺は身体を右に逸らすことによって、突如前方から飛来してきた矢を避けた。

「太史慈隊も僕の部隊と山越の兵たちの混成部隊で相手しているよ。これで正面から来た君の3000の兵は少しの間だけど動きを止めることができる。あとは時間との勝負さ」

「……我らは、……太史慈さまを倒さなくていい」

「ここにお館さまたちを引きつけられればいいのじゃ」

さすがに四対一では分が悪い。並みの相手なら問題ないが、困ったことに目の前にいる3人は兵を率いる立場にいる者ばかり。特に藩臨は一对一の一騎打ちの状態でないと、攻撃を全て受けられる自信が無い。かといって、藩臨ばかりに気を取られると、先輩と黄乱の動作は遅いが一撃の重さがある攻撃がこの身に迫る。それに加えて、正確無比な丁奉の射撃もあるとなると…。

完全に気を抜くことを許されない状況だ。

「やるねえ。これも陸遜の作戦?」

「そうだよ。1人の若者の命を生贄に捧げた絶対に失敗できない作戦さ」

「は？誰か死んだのか？」

「健治くんがね」

「なんだって！？」

「陸遜のたわわな母性に鼻と口を塞がれて…（ホロリ）」

心配して損した。リア充、氏ね。

「……こういう戦い方もあるっていうこと」

「確かにワシ1人じゃったら、『お館さまと戦ってこい』と言われても無理だと返すところじゃが、こうやって『4人で足止めをしてくれ』ということであれば、話は別じゃ。どうにかやれる気がするしのう」

藩臨は紅蓮の瞳を輝かせながらクスリと微笑み、黄乱は鮮やかな空色の髪をなびかせてガハハと豪快に笑ってみせる。

「楽しいおしゃべりはここまでだ。行くよ、藩臨、黄乱。援護は任せたよ、丁奉！」

「……承知」

「あい分かった」

「御意です」

目の前の状況を一発で変えることが出来る、スキル『石破天驚拳』

のレベルは1。つまり、一回の戦いで1回しか使用できないということ。開戦直後に放ってしまっているの、今の状態では使用不可。周回プレイで手にしたステータスと、俺自身の経験を元に戦わないといけないということだ。……俺自身の経験？

そうだ、忘れていた。俺は……。

「ケン！俺に2本、剣を寄越せ」

「ぎよ、御意」

俺は近くで戦っていた部下であるケンに対して、とある命令を下した。それを聞いた彼は今まで戦っていた者たちから距離を取って、周囲を見渡した後、脱落した兵たちが固まっている場所に向かって駆け出した。

「やばいつ！？丁奉、彼を射抜いて！藩臨と黄乱、一刀くんに剣を持たせたら駄目だ！」

「……どうということ？」

「この戦いが終わってから、本人に教えてもらって！吹き荒れる、氷結の結晶。碧風…衝破っ！！」

先輩が大きく戦斧を振り回し、冷気を纏う風を生み出し、ケンが走った方角に向けてスキルを放った。

戦場でその武を見せ付けていた太史慈隊の面々が先輩のスキルを受け、次々と倒れていく。その中に膝をついて前のめりに倒れていくケンの後姿が見えた。

「……隙あり」

「ちいっ!」

俺は反射的に跳び退いて藩臨が放った一撃を避けた。そこに黄乱の大槌での攻撃で追撃を受けそうになった俺は横に転げて逃げる。

拙い、このままだと。

「……これで我らの『ガバツ』、なにする!」

「勝ちじゃ『ガバツ』って、誰じゃ!」

「太史慈さま、我らの剣をお受け取り下さい」

藩臨と黄乱の身体に抱きついて動きを止めさせたのは、猿の顔を模した面を被る『エン』と猪の顔を模した面を被る『イ』の2人だ。丁度、彼らが立っている所は俺と丁奉の間で、彼は俺を狙い打つことが出来ないでいる。

それに加えて、黄乱の攻撃を横に転がって避け膝をついたままだった俺の前に、うまく投げて超越される彼らの武器である剣が2本。俺はそれを利き手は順手で構え、反対側の手は逆手で剣を構えた。

「嘘でしょ。ここでそれをやる訳!」

「ははっ、先輩。勝負とはいっても非情なん『ひゅるるー……ドドーン!』だって、何だ?」

俺はその音を聞いて振り返った。

費栈がいるはずの本陣にて煙があがっている。そして、あるべき所に旗がない。つまり……。

「……我らの勝ち」

「不安じゃったが、昴たちはうまく辿り着いたようじゃな」

部下の2人に拘束されたまま、安堵の溜め息をつく2人を見た後、俺は先輩の顔を見た。

『にしし……』、と悪戯が成功した子供のように笑う先輩を見て、俺は天を仰ぐ。

「あ……。やられた」

「えー。まさか、開戦直後に太史慈さまの『石破天驚拳』が悟道さんや尤突さんが潜んでいた森に直撃するとは考えていなかったんですけどー、逆に攻撃された森は安全なんだろうなと思ってですねー。巖虎ちゃんや巖興ちゃんに指示を出して、悟道さんや尤突さんの屍を見て見ぬ振りしてもらった形で太史慈隊の本陣に奇襲を掛けてもらったんですー」

黒板に今回の動きを書いて説明する陸遜に、涙目で俺を見上げてくる費栈。

「うう、考えていたことが裏目に出てしまいました。やっぱり、両方の森に兵を配置しておくべきでした。太史慈さま、申し訳ありません」

せん。私が至らないばかりに……ぐすっ」

「いや、これは交流を目的とした模擬戦なんだからそこまで気にする必要はないって」

「この敗北を旨に、より一層の精進をしてまいりましゅ」

費棧はそう言っただけを思いっきりその瞳に溜めたまま駆け出し、尤突の胸にダイブした。

「天里、ごめんね。妾が悪かったわ。貴女の話をちゃんと聞いていればこんなことにはならなかったのに」

「乃愛しゃん。私のことを嫌いになっっていないんでしゅか？」

「当たり前じゃない。妾と貴女の関係はどんなことがあっても途切れたりなんかしない！」

「乃愛しゃん！」

「天里！」

一瞬にして百合の花が咲き誇った。

啞然とした顔で2人を眺めていた俺の肩を『ポン』と優しく叩いたのは黄乱だった。

「あやつらは、どこでもあんな感じじゃ。昔から、男は眼中に無かったから、お館さまも気にすることはないと思うぞ。身体が昂ぶってたまらんというなら、ワシが夜伽に行っただけで発散させてやるつか？」

まあ、ワシみたいな行き遅れでよいならじゃが」

「是非」

「……お、お館さまも好きものじゃのう。……今日は汗と砂に塗れているので次の機会にということにしようではないか。ではのう」

そういつてそそくさと去っていく黄乱の後姿を見ながら俺はがっくりと頂垂れた。

今の会話のどこが拙かったのだ？

がつつき過ぎたのか？

あそこではもつと大人の余裕を見せるべきだったのか？

くっそおおおお！千載一遇のチャンスを逃してしまった。

「かずぴー。そんなもんやで、この世の中」

「ははは。まだまだ、チャンスはあるよ」

及川と先輩が側に来て、俺に向かって優しく微笑んだ。

くっ、今は優しくされるほうが、精神的にダメージが大きい。

こうなったら、心の中で念じよう。

『俺の孫策、カモーン！！』

長沙――

「――ん？今、誰かに呼ばれた気がしたような……」

十三話

十三話

最近武官として身体を動かすよりも、太守として机と寝台を行ったり来たりする生活が続いていたので、身体が鈍ってきたと感じた俺は休暇を取らせてもらおうと先輩の部屋を訪ねた。そして、

「いい加減に休みをくれ！」

と机を『ドンツ』と叩いて先輩に物申したら

「体調管理も仕事の内なんだけどね……」

と呆れられた。

が、しかし俺の目の前で椅子に座ったまま難しい表情をしている先輩の目の下にはしっかりと濃い隈ができている。彼もまた十分な休みをとれていないようだ。

「先輩は何やってんですか？」

「それは僕として？それとも徐盛として？」

「どちらもです」

「……太守なら、徐盛として活動している僕の動向は知っていて貰いたかったなあ」

そう言いながら先輩は俺に向かって書簡を投げて寄越してきた。

『土地のやせ細りの改善について』や『田畑、水田の拡張による農産物の収穫増加の見通しについて』と題して、色々な政策や意見が書き込まれている。

「ごめん、そっちは僕のプライベート用だった」

プライベート…なのか、これ？次に投げて寄越された書簡には

『揚州全域で確認される若い娘の失踪事件と賊による人身売買との関係性について』と題して、各地で勃発している失踪事件の被害者である女の子たちの詳細なデータと、人身売買を取り扱っている賊たちが拠点としている砦の位置が記された地図、そしてその人身売買にて実際に女の子を購入したと思われる豪族の詳細なデータが記されていて、

「ごめん。そっちは現在、部下に調べさせている極秘資料だった」

「しっかりと読ませてから訂正するの、やめてくれませんか！」

「ごめんごめん」

そういつて渡された書簡には、『収穫された魚介類の長期保存方法と流通について』と書かれていた。俺は資料を流し読みした後、先輩に返しこう言う。

「先輩、俺はこっちよりもそっちの方が気になるんですけど」

「あー、やっぱり？」

先輩の話によると、俺が太守となり交番と警備兵を街に配置するまで、この建業の地でも失踪事件は起こっていたらしい。この建業の街では警備兵たちが街の至る所を巡回するようになった為、悪さをするものは少なくなっている。たまに酒に酔った奴とか、周囲の人間を巻き込んで喧嘩する馬鹿が出たりするが、すぐに鎮静化されるようになったと街の民からも感謝の言葉が上がってきている。

「揚州全域が一刀くんの領地と言っても過言では無い以上、この問題は早期に片付けないと拙いんだ。一応、呉や会稽の街にも交番と警備兵を置くようにしているので、あちらでも被害は少なくなってきているようだけど、こういうのは本元を片付けないといつまでも続いてしまう」

「それで、今は人身売買に関わっている賊と豪族の絞込み作業の真っ只中ってことですか」

「そういうこと。豪族の連中は人を囲っている場合が多いから、中々情報が得られない。まだ、賊たちを拷問に掛けて吐かせる方が、気が楽だよ。……おかげで最近徹夜が多いんだ」

そう言つて先輩は『ふあ……』と大きな欠伸をした。目尻から涙が一筋零れ落ちる。

「お疲れ様です」

俺は机の上に置いてあつた手拭いを手渡して労いの言葉をかけた。

「ありがと。でも、先日ようやく奴等の尻尾を掴んだ。今度、一斉摘発する予定なんだ。それで、物は相談なんだけど」

「賊の方の討伐は俺が指揮してもいいですか？」

「助かるよ。恐らく、豪族たちも知らぬ存ぜぬを貫いて、武力的に抵抗してくると思うから戦力は多いに越したことはないんだ。とりあえず、戦力として黄乱の部隊と悟道の部隊は連れて行きたいと思っ
ていたんだけど、そうなると賊の方は抑えられなくなる。片方を押さえると、もう片方は逃げてしまっからね。一気に片付けたいと思っ
ていたんだ」

「決行はいつですか？」

「3日後だよ。丁度、その日がある豪族に女の子たちが引き渡される
日でもあるんだ」

「聞いているだけでむかついてくる話だな。女の子たちの身体と心、
そして未来を弄んだ罪、必ず償ってもらっぜ！」

太史慈隊の中でも精鋭と呼べる存在である12人の部下と先輩の部下
である忍者部隊を100人連れて、俺は件の賊を仕留める為に山に潜
んでいた。事前に知り得た情報では、賊の人数は50人にも満た
ないということだったが、なんだこの人数は？1つの国の軍隊と
同等の規模に膨れ上がっていたのだ。

何が起ったのかを俺が腕を組んで考えていると漆黒の衣にその身
に纏い、鼻の上まで覆面で隠し、右目を黒色の眼帯で隠した銀髪の
男が報告してきた。

「恐らく、太史慈さまの善政と強固な太史慈軍によって、狩場を失った山賊や江賊が勢ぞろいしているものと思われます」

「旨みのある話に群がったハイエナどもの集まりって訳か」

「は？ハイエナですか？」

「すまん、こつちの話だ」

ちなみにハイエナっていうのは、ネコ目ハイエナ科に属する動物の総称で、長い鼻面と長い足を持ち、イヌによく似た姿をしている。アフリカのサハラ砂漠や、トルコ、アラビア半島などに分布する。少なくとも中国にはいなかったはず。

「太史慈さま、あそこに天幕が張られているのが分かりますか？」

嘴のついた面を被った赤髪の少女が指差すのは木々の間。その指先を追って見るも見えるのは木々ばかりで天幕などどこにも見えない。

「いや、どこだよ？」

「あそこですってば」

そう言っただけで彼女はぷんぷんと怒り出しそうな勢いだ、本当に何も見えない。

「チヨウ、主も我らもお前のように目はよくないのだ」

チヨウと呼ばれた少女をケンが優しく嗜める。

「うー、でもでも。あの天幕に私よりも小さな女の子たちが連れ込まれたんですよ」

「全軍抜刀！徐盛隊は木々と闇に紛れるように隠れ、山賊と江賊を片っ端から殺せ。太史慈隊は俺と共に来い！チヨウ、道案内は任せる」

「はい」

その天幕は周囲に立ち並ぶものと比べても一際大きかった。中で馬でも乗り回せそうなほどの広さがある。

「誰だ、て『ザシユッ』」

ごとりと、俺の背後で地面に何かが落ちる音がした。顔だけ動かして後ろを見ると、首の無くなった賊の身体から噴水のように噴出す血をその身に浴びているケンが、何事も無かったかのように振舞いつつ、俺につき従うようにそこにいる。その後、次々と返り血を浴びて真っ赤になった鎧や武器を持った部下たちが現れる。

「……行くぞ」

「……御意」

中に連れて行かれたという娘たちを救わねばならない。俺はそんな思いを胸に抱いて、天幕の中に足を踏み入れたのだが、そんな思いは一瞬にして消え去ることとなる。

「……………」

中にいたのは不精髭を生やし、不衛生な服を身に纏った10人くらいの男たちと、姉妹らしき少女たちだった。その少女たちはどちらも10歳そこらだろう。

片方の少女の首筋には賊の1人が脅すように剣を突きつけていた。あまりの恐怖に泣き叫ぶ事も出来ずに、目を見開きがたがたと身体を震わせている。

一方、もう片方の少女は半裸だった。かろうじて身を隠している残りの服を、自ら震える手で取り去ろうとしているではないか。

「下衆が…」

後ろの方で『タツ』がドスの効いた声で呟く。

俺は一步前に出て、少女たちの痴態に目が釘付けになっている賊たちに向かって言い放った。

「いい、ご身分だな。お前ら」

突然の来訪者に呆気取られた賊たちだったが、俺たちが血の滴る武器を身につけていることを知ると慌てて自分達の武器を探して慌てふためく。その隙をついてチョウが少女の首筋に剣を突きつけていた男の首を二刀で刎ね飛ばした。

床に転がっていた自分の武器を手にした男の手を、天幕の上の部分に届きそうな程大柄な体格を持つタツが踏み抜いた。『グシャッ』という音と共に、地面に血が広がっていく。その男は青褪めた表情

でタツを見上げていたが、それも長く続かなかった。タツは男の手を踏み抜いた足ではない反対側の足を男の顔に寄せ、一気に体重をかけた。『ゴキリッ』という音が天幕の中に響き渡り、首があらぬ方向を向いて絶命する死体が一体出来上がった。

「何者だ！てめえら！！」

賊の頭らしき男がいきり吼えるも何の迫力も無い。

「建業が太守、名は太史慈。用件は言わなくても分かるな」

俺の名前を聞いて「やはりか」みたいな表情を浮かべる人間が数人見られた。

「ふざけんな！ここを何処だと思ってやがる！ここは俺が築き上げたアジト、ここには二千の部下たちが」

「なら、なんでアジトのど真ん中にあるこの天幕に俺たちが居ると思う？」

「そんなの……決まって……。まさか……？」

賊の頭は現在自分が置かれている状況を理解したのか、頬を引き攣らせて俺から離れるように後退していく。賊の頭の身体が天幕を作っている柱にぶつかると同時に、俺はこの場に居る全員の心胆に寒気を覚えさせるような冷たい声で告げた。

「皆殺しにしてきたに決まっているだろう？将来ある娘たちの未来を奪ったんだ、自分達の未来を奪われる覚悟くらい、……あるよな？」

今まで殺して来た賊の血で濡れてしまった金色の籠手を賊の頭に向かって突き出すと、天幕にいた男たちは悲鳴を上げて我先にと天幕の外に向かって駆け出した。そして、月明かりが照らす中、天幕の外に待機していた徐盛隊の面々に切り裂かれて死んでいく影が見えた。天幕の外に逃げた最後の1人の首が宙を舞って、地面に落ちるのを見届けた俺は賊の頭の方を見て呟いた。

「あとはお前だけだな」

「く、来るなああ!!」

賊の頭は体中の穴という穴から色々な液を出しながら、俺に向かって武器を向けてくる。目の焦点は定まらず、手をガクガク震わせているため、近付くのはある意味で危険である。だが、俺は敢えて近づき賊の頭が振り回す剣をその手で掴み上げ、叩き折った。

折れた剣を見て、顔色を能面のように白くしていていた賊の頭は地面に額を擦り付けるように土下座し俺に許しを請うてきた。曰く、「生きるためには仕方が無かった」や「最初は労働役に男も狙っていたが、豪族が買い手になると年場もいかない少女たちを要求してきた」や「どうせ、親は子供がいなくなっても次の子供を産めばいい」と変な解釈をした言い訳を聞いた瞬間、俺の堪忍袋の尾が切れた。

俺は賊の頭の身体を蹴り飛ばし、手足の甲を踏み砕いた。醜く泣き叫ぶ賊の頭の顎を片手で掴んで俺の顔の高さまで持ち上げ柱に思い切り打ち付けた。白い泡をぶくぶく吐き出して白目を剥いて気絶した賊の頭を見ながら俺は告げた。

「手前の言い分を聞くのはもう懲り懲りだ。生きていることが苦痛で、心から死にたいと思えるようになるまで、簡単に死ねると思うなよ。『ジャ』、ありとあらゆる拷問にコイツをかける。情報を吐かせるだけ吐かしたら、どんな風に扱っても構わん」

「…シシシ。…御意」

俺に『ジャ』と呼ばれた青年は蛇の顔を模した面の下で、舌なめずりをして了承し、賊の頭の足首を握り天幕の外に連れ出していった。静かになった天幕の中で、俺はある一点を見て溜め息をついた。

「ところで、チヨウよ」

「はい、なんででしょう?」

「助け出したのなら、さっさと天幕の外に連れてってやれよ。と思つたのは俺だけじゃないんだが?」

見れば、ケンもタツもエンもイも、『うんうん』と頷いている。

「いやー、主のあの冷徹な言葉を聞いた瞬間に身体のコが熱くなっちゃって、連れ出すのを忘れちゃいました。てへっ」

「てへっ」じゃねえだろ! 一部始終を見届けて、完全に意識を消失しているじゃないか。完全にトラウマものだぞ!」

「えっ、虎っておいしいんですか?」

「なんで、そんな話になつたあああああ!」

俺の叫び声が住んでいた人間を無くし蛻の殻となった賊のアジトに響き渡るのだった。

「で、なんでその時に連れ帰った少女たちが、かずぴーの部屋で暮らすことになったん？普通なら、会った瞬間に逃げ出したくなるくらい怖い思いをしたんとちゃうん？」

「……のはずなんだけどな。理由を聞いても教えてくれないんだよ」

「一応、部下を使って彼女たちの親を搜索しているけど、もうしばらく時間が掛かりそうなんだ」

今回の人身売買の件に関して報告書を作成している先輩の部屋で、俺たちはそんなことを話していた。及川の言う通り、少女たちを建業に連れ帰ってきた翌朝、2人の少女が俺の執務室を訪れ侍女として雇ってくれと言って来たのである。

年齢を聞けば今年で9歳になる少女たちを働かせるのもなあと思っただ俺は、俺専属のお世話係に任命した。お世話係といっても、俺が寝るために使っている部屋の掃除と、寝坊しがちな俺を起こすことくらいが仕事で、残りの時間は自由にしていっていいと告げである。どうせ、先輩が彼女たちの親を見つけるまでの繋ぎだし。

「それで、そのめんこい少女たちの名前はなんていうん？」

「ん、確か。……大喬と小喬って言ったかな？」

「ははは。将来、きっと美人に育つよね。今のうちに手籠めにしておけば?。」

「俺は、ロリは愛でるものであって、手を出すものじゃないと思います。」

「紳士やなー、かずぴーは」

「」「ははははは」「」「」

十四話（前書き）

【拠点フェイズ】

十四話

十四話

『姉妹と散歩』『及川、行きます！！』

俺の部屋に少女が好む可愛い小物がどんどん増えていく。例えば、服、化粧品、装飾品、ぬいぐるみなど。

それはまだ部屋の片隅に置かれているだけだが、それが部屋いっぱいになるまでそう時間は掛からないだろう。

何故、こんなことになった。

……いや、俺が彼女たちにお世話係になるように命じたからなんだけどさ。

どうして、それが俺と一緒に寝食を共にするようになってしまったのか？

大喬と小喬の姉妹にそれとなく聞いてみたら、こんな言葉を返された。

「「え、お父さんみたいだから」」

OK…、俺ってそんなに老けて見えるのか。

それとも枯れているように見えるのか。

どちらにしてもイメージチェンジせねばなるまい！

そうして、休暇を貰った俺はラフな格好で建業の街をぶらついていった。ただし、両手に小さな華状態で。

どこで洩れたのかイマイチ分からないが、俺が出かけようと扉を開けたらしっかりと外行き様に着替えた姉妹が立っていた。そして、何も言わずに俺の両側に立ち、それぞれ俺の右手と左手を取って繋ぎ2人揃って「早く、行こっ」と言ってくる始末。期待するような眼差しを向けてくる2人の視線に負けた俺は、そのまま街へ向かった。

街の大通りは大勢の人で賑わっている。俺たちが建業の街にきて初めて行っただのが、この大通りの改修だった。道幅を広げて人通りを楽にして、道路の脇には店を作った。経済の流れをよくするために税金をある一定額まで引き下げた後、他国の商人をこの建業の地に呼び込み、店を開く者には一定額で土地を貸し与えて街を賑わせるように仕向けた。

ただし、俺はそこまで関与していない。商人の呼び込みや土地の賃貸に関してはすべて健治に丸投げしていたし、彼自身そういうことをするのにやりがいを感じていた。適材適所っていう言葉もあるし、皆が笑顔なのだからあまり気にすることは無いだろう。

「太史慈さま、あの毛がふさふさした白い猫のぬいぐるみが欲しいです」

「私は、あのキリッとした姿で座っている黒い猫のぬいぐるみが欲しいっ！」

はいはい。分かっていたよ。

どうせ、そういうのが目的でついてきていたってことくらいはさあ。そう思いつつも、俺は懷から財布を出して店主に値段を聞いている。いいさ、太守として働いている以上、貰うものは貰っていても使い道が無くて埃を被っているだけなんだから。

彼女たちの笑顔の種になるんだったら、いくらでも買ってやるさ。

「あ、…ありがとうございます」

と、白いぬいぐるみを抱きしめて、顔を埋めながら上目遣いでお礼を言ってくる大喬。

「べ、別に嬉しくなんかないんだからね」

と、黒いぬいぐるみを抱きかかえたままそっぽを向いた小喬。しかし、彼女の横顔は茹蛸のように首まで真っ赤になっている。

両極端な2人の姉妹を見ていて思った。彼女たちに父親扱いされるのも、案外悪くないものかもしれないと。

その後2人を連れて建業の北区画にやってきた。

ここらへんは鍛冶屋や道具屋、薬屋などの専門職の人間が住み、己の腕を日々磨いている場所でもある。勿論、兵器開発を主に行って

いる及川たちもこの北区画内に工房があり、日夜開発を行っている。

俺はその及川の工房を目指して歩いているのだが、大喬と小喬はこの北区画独特の雰囲気にもまれてしまい、うつすらと涙を溜めて俺にしがみ付いている。その姿を見た立派な髭を蓄えた厳つい鍛冶職人や、白衣を着て眼がねを光らせていた研究者らしき男たちはがっくりと肩を落としていた。誰だって、こんな可愛い女の子たちが自分達を見て怯えていたらやはりショックを受ける。

「ん？ かずぴーやないか。こんな所でなにしとるん？」

「お、韓当。丁度よかった。お前を探していたんだよ」

「かずぴーがワイを？……ああ、武器のことやろ。一応、かずぴーの希望に合わせて作ってみたけど、イマイチやな」

「やっぱり、刀は難しいか？」

「せやな。ワイ自身が刀の精製方法を知らんから、どうにもならへん。試行錯誤を繰り返して、徐々に形にしている段階やねん。暫くの間は、双剣で我慢してくれや」

そう言つて及川は歩き始めた。俺たちは彼の後を追つて歩いていく。5分ほど他愛ないおしゃべりをしながら歩いていると、前方に大きな建物が見えてきた。

「あれがワイらの工房やねん。見た目どおり、中はめっちゃ広くてな、開発した兵器の威力試験等もできるんや。ただ、天井には限りがあってな。ははは」

「何やったんだ？」

「かずぴーは石弓って知つとるか？弓っていうても個人が1人で運用するものとちゃうて、……そうやな簡単にいうと投石機みたいなもんや。投石機っていうても使う弾は手槍くらいの大きさの矢なんやけど。で、その石弓をな、上向きに縦七列・横七列を並べ、それぞれ微妙な角度で外側に向ける。そうすると、矢は中心から放射状に広がるように放たれるっちゅう寸法やねん。まあ、ワイらも何でこんなものを作ったんやろって、天井に刺さった49本の矢を見ながら思ってたわけやけども」

「遊びはほどほどにしとけよ」

「ちゃんとやることはやっているやからええやん」

「まあ、な」

俺たちは及川たちの工房に足を踏み入れた。中は割りと綺麗に整理されていて、俺がイメージしていた工房とは打って変わっての姿に俺は『ほう……』と感嘆の声を洩らした。だが、

「かずぴー。ワイらの工房にいい印象を持ってくれたんわ、嬉しいんやけど。残念ながら、男ばっかの工房なんてすぐに物が溢れて、足の踏み場も無いほどごちゃごちゃになるのは当然やねん」

「……なんで今日に限って、綺麗に片付いているんだよ？」

「先輩の方から人材派遣されてきた女の子たちが綺麗好きだっただけや。ワイらに向かって、『臭い、風呂に入って来い！』といって

工房から追い出して、いざワイらが戻ってきたら正にビフォーアフターやねん」

先輩の方から人材派遣…ね。恐らく先日的人身売買の時に保護した女の子たちだろう。家族が見つかった女の子たちは順次、故郷へ送っているが未だに家族が見つからない者や家族が死んでしまっている女の子には、保護した先輩が責任を持って仕事を斡旋している。病院でのスタッフや、学校での教師役とか子供たちのお守り役、及川たちのような職人たちのお手伝いさんや城での侍女とか斡旋される仕事は様々だ。稀に兵役に就きたいという者がいるけど、先輩はまず斡旋した仕事をやって、やりがいを感じなかったらその選択をしても構わないと言っているらしい。

「で、この工房に派遣されてきた女の中で、ひととき異彩を放つ奴がおんねん。名前は確か、歩シツっていうてたかな。江東の地の人間にしては珍しい、ミステリアスなクールビューティーでお姉さん系の人なんやけど」

「お前の好みの、ど真ん中ストライクだろ」

「さすが親友！ようわかつとるやないか！！」

目をキラキラさせて、俺に詰め寄ってきた及川を無理矢理引き剥がして話の続きを促す。

「孫呉✓には、ワイ好みのヒロインはおらんかったから諦めていたんやけど、ここにきてワイの好みを地で行く女性トが現れたんや。これはもう、ワイに彼女を落とせっていう神さまからの啓示やる！！」

鼻息を荒くして豪語する及川にちよつと引き気味な俺と、話しに全

くついていけない大喬と小喬の姉妹。

「そこで、かずぴーに相談なんやけど。クールビューティーなお姉さんを口説くにはどんなことに気をつければええと思う？」

「は？なんで俺に聞くんだよ」

「親友のかずぴーやからや」

「……。前にお前の部屋に置いてあった本で見た気がするけど……、確か『ありのままを受け入れる姿勢』が大切じゃなかったか？クールビューティー系だと、一回は人から「変わってる」って言われたことがあるはずだから、「それでもいいんじゃない」っていう態度で接することで安心感を与える…みたいな？」

「ありがとー！かずぴー！！早速、行つて来るわー！！」

そう言つて風になった及川。少しすると戻つてきて、

「かずぴーに頼まれていたもんやけど、68番倉庫に置いてあるから後はよろしゅー！ではっ！ー！」

今度こそ、工房の何処かに消えていった及川の背を見ながら思った。

「68番倉庫つて、……どこだよ」

及川が言っていた68番倉庫には、俺が頼んでいた剣の他にも“いろいろ”なものが置いてあった。

どんなものがあつたか、ヒントをあげるとすれば入った瞬間に大喬と小喬の2人が可愛らしく『ヒッ』と身体を震わせて俺に抱き付いてきたということだ。まあ、俺もビビッタし。

これで68番“武器”倉庫となっていたら、その名の通り剣や槍、弓や斧といった武器だけになっていたのであるうに、名称がただの倉庫となっているために、なにかとなにかの木乃伊とか、何時の時代かの土器とか、西洋の騎士甲冑や日本の戦国時代に使われていたような鎧等、置かれているものに統一性は無い。

「なんなんですか、ここ？」

「ひゃ！？何かこつち見てるし！？」

俺は安心させるように2人の頭を撫でてあげる。2人は目を瞑って、恥ずかしそうになすがままにされていたが、『ほにゃー』と顔を崩してくすぐったそうに身を振った。そして、その柔らかくて小さな身体を俺に密着させてくる。

表面上は2人を安心させるように微笑んでいるが、頭の中で2つの魔法の呪文を同時に思い浮かべ必死に唱えていた。

『心頭滅却すれば、火もまた涼し。心頭滅却すれば、火もまた涼し。心頭滅却すれば、火もまた涼し。』

『ロリは愛でるもの、ロリは愛でるもの、ロリは愛でるもの、ロリは愛でるもの、ロリは愛でるもの』

俺は目当ての双剣を手早く探し出し、2人を連れて工房を後にした。

その帰り際、頬に紅葉を咲かせた及川を見かけたがとりあえずスルーすることにした。どうせ、後日相談に来るに決まっている。あいつは元の世界で合コンとかに参加して女友達はいっぱいいたが、彼女とは尽く長続きしなかった上に、ナンパ成功率は一桁台だった。

頬の紅葉は、その歩シツっていう人にやられたんだろうな…、と俺は苦笑いしつつ城へと歩みを進めるのだった。

両手に小さな華を連れて……。

十五話

十五話

「先輩、ちょっと相談したいことがあるんですけど、今大丈夫ですかって？」

そう言って申し訳なさそうに俺の執務室に入ってきたのは健治だった。その手には多くの書簡が……orz

「あ、これは先輩に僕がやろうとしていることを理解してもらったために用意した資料ですって」

俺が俯いたことによって慌てた健治が即座にフォローする。

「健治が俺に相談って、一体なんだ？」

「いや、呉や会稽の商人らと交易をすることになったのでその報告と、江賊についてちょっと」

「健治としては陸路ではなく、海路とうか河路をつかって交易をしたいのだが、江賊に狙われるから嫌だと先方から言われたっていう所か」

「その通りですって。船に関しては及川先輩に頼んでいますから、先輩にはその商会の船を護衛する部隊を派遣してもらいたいんですって」

「難しいな。藩臨や厳虎といった山越の人間は船に対して耐性がな

い。たぶん、酔って戦力にならないだろう。かといって太史慈隊を切り崩すっていうのもな。ここはいつそのこと水軍を立ち上げるのはどうだろうか」

「先輩が主動してくれるのであれば、商会の人間としては大いに資金を出すことが出来ますって」

水軍の設立か。自分で切り出しといてなんだが、仕事がまた増えた…。

「おう、かずぴー。ちょっと、ええか？」

大喬と小喬の2人に淹れて貰ったお茶を飲みながら休憩していた俺の所に及川がやってきた。俺はお茶を一口含んで飲み干した後、及川に話しかける。

「午前中に魯肅が来て、交易に使う船の建造を任せたって言っていたが？」

「それなら田中隊に造船所を今、作ってもらっておるわ。その後にワイら兵器開発部隊が造船するんや。って、ワイがここに来たんわ、ちゃう理由やねん。実はな、最近ワイらの工房に忍び込んで開発した兵器を盗み見ていく輩がおんねん。今はまだええけど、これからこのことを考えるとな」

及川はそういつて腕を組んだ。

「確かにな。警備兵の強化と情報管理の徹底、他国のスパイを排除

できる人間の育成つて所か。警備兵に関しては俺がどうにかすると
して、情報と忍に関しては徐盛を頼らないと」

「僕がどうかした？」

邪気の無い声が響いた。見れば執務室の扉を開けて、蒼い鎧を身に
纏った先輩がにこやかな笑みを浮かべて入ってきた。

大喬と小喬の2人は恭しく頭を垂れ、先輩はそんな2人の頭を優しく撫でた後、俺たちの所で歩を進めてきた。大喬と小喬の姉妹は執務室から出て行く。それを見送った先輩はおもむろに切り出した。

「ごめんね、一刀くん。休憩中に」

「いえ、構いませんよ」

「それじゃあ、報告させてもらうよ。先日の失踪事件と人身売買に関わっていた人間の肅正が完了したってことと、解放した女の子たちの故郷への帰還と仕事の幹旋が完了したこと。それに伴い兵役に就きたいっていう女の子たちもいてね、それぞれ武官と文官として雇用することとなった。これはその資料だよ、確認しておいて」

差し出された書簡を俺は一瞥した。

先輩から差し出された書簡には、史実において名を残した武将や軍師の名前がちらほら……って。

「甘寧つて、ゲームとか演義とかで有名な鈴の甘寧ですか？むしろ、『禁・三国恋姫』の孫呉ルートのヒロインが何故!？」

「まあ、アレだよ。僕らが介入したことによって、弱小江賊の1人だった彼女が仲間に売られて危うく豪族の手に渡りそうだったってこと。おかげで男に対して嫌悪意識が芽生えちゃっているのか、話をするのが大変でした」

先輩はそういつてやれやれと首を振った。

「孫呉ルートの甘寧といえば、徹底的にクールキャラを通す女の子やろ。それに加えて男性に嫌悪感って…」

及川が頬を引き攣らせながら話す。その考えに関しては俺も同意する。

「とりあえず、彼女には一刀くんの下で働いてもらうようにしてあるから」

「ちょっと待てえええ！？いや、待つてくささいいいい！何故、俺の下なんですか！彼女の戦闘スタイルなら、先輩の下でいくらか学んでってというのが筋でしょ！！」

「そうかもしれないけど、僕はこれから犯罪や汚職をおこなった人間らを調べ上げて処罰しないといけないし、各部署に情報管理を徹底させるように促すマニュアルを作成しないといけなくなっただし」

「ワイらは今まで通り、太史慈軍の武装と商人らが乗る交易船と護衛する部隊が乗る軍船を造船せにやらんし、もとより戦えんし。適材なのはかずぴーをおいて、他におらへんやろ」

「^{マシ}本当か」

俺は書簡に書かれている甘寧の名前を見て、大きな溜め息をついた。優秀な人材を手に入れたことによる安堵の溜め息ではない、孫呉の復活を遠のけてしまったという罪悪感からくる溜め息である。

「一刀くん。そんなに悩むようだったら、最初から孫呉軍が弱体化しないように援助すればいいんじゃない？同盟か不可侵条約を結んで、劉表軍との戦いの時に物資を送るとか援護部隊を派遣するとかさ」

「それも、そうですね。そういう方向で準備をしていきましょう。及川、健治にもそういった旨で動くように話をしておいてくれ」

「うん、そのくらいやったるわ」

「じゃあ、僕は次の仕事があるから後はよろしくね」

そついつて2人は俺の執務室から出て行く。

残された俺は先輩から渡された書簡をもう一度ゆっくりじっくり眺める。

「甘寧の名前が載っていたことにもびびったけど、さっきこれに載っていたじゃない名前があつたような……」

パラパラと俺は書簡を捲り書かれている名前を一人ずつ確認していく。

「つつ！？……これは拙いつて。えーと何々斡旋された仕事先は……小料理屋『春菊』？」

俺が首を傾げていると控えめに扉をノックする音があり、俺は入る許可を出した。するとすぐに犬の面をつけた青年が入ってくる。

「ただいま戻りました、太史慈さま」

「ご苦労、ケン。首尾は上々のようだな。っと、そうだ。小料理屋の『春菊』という店を知っているか？」

「チョウが普段、働いている店ですか？」

ケンの口から出てきた言葉を聞いて俺の頭の中に、二刀を振り回してキャベツや人参といった野菜を細切れにしている彼女の姿が思い浮かんだ。

「太史慈さまが、今思い浮かべたようなことを披露して客集めに貢献しているようです。チョウは黙っていれば、可愛い奴ですから、徐盛さまに紹介されて新しく来た『子義』という娘と共に2枚看板として小料理屋を盛り上げています」

「……。ありがとう、ケン。俺が知りたかったことが全部分かったよ」

「はあ……。???」

首を傾げるケンを余所に、俺は早急に話をつけなければならぬと思った。

俺はその夜、大喬と小喬の2人が寝静まったのを確認し、城から抜

け出した。

本当ならこんなことをする必要はないのだが、“名前を奪ってしまった者”としてどうにかしなければならぬと思ったのだ。あの後、ケンに店の場所を聞き、地図に認めて置いたので小料理屋『春菊』まで迷わずに行くことが出来るだろう。しかし、どうすればいい。

「こういう場合の責任の取り方ってどうすればいいんだ？」

何故、俺は作成したキャラクターに『太史慈』という名前をつけてしまったのか。大人しく自分の名前をつけていれば、こんなことにはならなかったであろうに。

「今更、悔やんだ所で何も変わらないか。とりあえず、本人に会おう」

責任の取り方も本人の意思を確認してからでも遅くは無いだろうしな。

小料理屋『春菊』、建業に東区画に店を構えている。『安くて、うまくて、いっぱい食べれる』と評判は上々。店主は一角という粋なおっさんで店員には給仕として若い女の子を雇っている。昼時になると仕事や訓練の間に訪れる人夫や兵たちが長蛇の列を作るくらいに流行り、夜になると雰囲気が一転して家族連れ多く来店する。そして、さらに夜が更けると居酒屋にジョブチェンジする、朝から晩まで開いている数少ない店だ。勿論、リピーターも多い。

何が言いたいかというと俺が『春菊』についた段階でも飲んでいる客が大勢いたのだ。中には知った顔がちらほらと…。

「おお、主さまも食事か？チヨウ、酒を持って来い！」

店先で豪快に酒を飲んでいた大きな体躯の青年が俺を手招きする。

「はいはい。ただいま。後で覚えてろよ。」

店の中で慌ただしく注文をとっていた小柄な赤い髪の少女は営業スマイルを浮かべながら、間違っても客に言っではいけない言葉を吐いた。俺は手招きした青年の所へ向かった。すると、そこにはすでに酔いつぶれた部下が数人寝扱けていた。

「主さまもこの店はよく来るのか？」

「いや、今日が初めてだよ。タツはよく来るのか？」

「その通りだ。我は昼飯と晩飯はここでお世話になっている。ここほど、飯を超特盛りでついでくれるところはないからな、がぶがぶ」
ジョッキとも呼べる杯に注がれていた酒をまるで水のように飲み干して行く彼の姿に俺は苦笑いを浮かべる。

「…シシシ。主も来られていたのですか」

病的までに肌が白く、線の細い青年が話しかけてきた。

「ジャも一緒だったか」

「…シシシ。私とタツはほとんど一緒に行動していますからね。彼の側にいれば、実験材料が大量に手に入りますから、シシシ」

そういつてジャは酒をちびちびと舐める様に飲んでいく。

「はい、白酒をピッチャーでお持ちしましたー、てへっ」料金は、
貴方の首でお願いします」

そう言ったチヨウは二刀を取り出して、ピッチャーを手に取ったタツに斬りかかろうとしたが、店の中から連続で飛んできた矢で二刀を地面に落としてしまった。

ただでさえ小柄な体格のチヨウが握る二刀を狙って矢を放つとは、中々の腕前。俺は関心して、『ほうつ』と感嘆の息を洩らした。

「チヨウさん！今日で何度目ですか！！お客さまは神さまだっていわれているでしょっ！！！」

「うう……。私は悪く無いもん」

「駄目ですよ！ちゃんと謝って下さい」

「う、……うめんね」

「我は気にしない。それよりも酒追加」

「……………。殴らせていいよね、答えは聞いてないっ」

チヨウはそう言ってタツに飛び掛った。タツはそんな彼女の様子を気にすることなく、机の上に置かれている料理を次々と食べていく。

「もっ…チヨウさんったら」

「すまない。先ほどの矢は君が放ったのか？」

俺は彼女が持つ弓に目をやりながら話しかける。

「へ？……ああ！？す、すみません。食事をされている所に、怪我とかございませんか？」

「いや、ないよ。それに丁度よかった。この店に『子義』っていう人いるよね。ちょっと連れてきてもらえないかな？」

「子義は私ですけど、貴方はどちらさまですか？」

俺はその女性をまじまじと見る。超サラサラの銀色の髪、切れ長でエメラルドを思わせる翠色の瞳、脚はモデルのようにスリリとしていて、母性はまあ俺好みとも言っておこうか。

「俺はこの建業で太守をしている“太史慈”だ。少し話したいのだが、この後抜けることは出来るかい？」

「はあ……たぶん」

そういって店主の所へ向かう彼女の後ろ姿を見ながら、本格的にどうしようか頭を悩ませるのだった。

十六話

十六話

俺の部屋にて大喬と小喬の姉妹が荷物の整理を行っている。彼女たちの荷物は俺が買い与えたものがほとんどであり、そのひとつひとつを眺めていたらなんだかおセンチな気分になってきた。これが愛娘を嫁にやる父親の気持ちなのか。

「太史慈さま、これが永遠の別れじゃないんですから」

「むしろ、今度は母さまと一緒に遊びに来るねっ」

そう2人が荷物を纏めている理由、それは彼女たちの親が見つかったことに他ならない。

会稽の街の太守を務めている父親の喬公とその街で水軍を率いる母親の喬玄、この2人が大喬と小喬姉妹の両親だった。普通であれば、太守なんて役職に就いているのだから真っ先に分かりそうなものだが、俺や先輩も『呉の二喬』と呼ばれる予定の大喬と小喬は知っていても彼女たちの親は知らなかったのである。そして、彼女たちの両親も面子の為か、愛娘たちが失踪したっていうことは極力伏せていたのだ。先輩の部下が屋敷に忍び込んで、大喬と小喬の真名を呟きながら、涙を流し続ける母親の喬玄の姿を見ていなければ分らず仕舞いであつただろう。

「喬公さんと喬玄さんには宜しく言つといてくれ」

「はい。お父さまやお母さまに、太史慈さまが私たちによくしてく

れたことは必ず伝えます」

「ふん。父さまにしては珍しくいい判断だったって言ってあげる予定なの」

2人はいつかの散歩の時に買って上げた白猫と黒猫のぬいぐるみをそれぞれ右手で抱き、左手には衣服や化粧品などを詰め込んだバツクを持って俺の前に立つ。そして姉妹揃って頭を下げた。

「「今までありがとうございました。このご恩は決して忘れません」

」

「うん。2人とも元気だな。今度は我慢なんてしないで、お父さんやお母さんに精一杯甘えるんだぞ」

「「はい。えへへ」」

2人と短いながらも、これまでのことを話した俺は笑顔で彼女たちを送り出した。

彼女たちの故郷である会稽の街には警備兵の強化と情報収集の為に先輩と商会の取引の関係上で健治も行くことになっている。彼女たちの身の安全は保障されているも同然だ。

「それじゃあ、一刀くん。僕たちも行くね」

「先輩、僕は呉と会稽の街を廻った後に、山越の方にも行きますので建業に帰ってくるのはかなり遅くなると思いますって。それで穩をお願いしようと思ったんですけど……」

「ついて行くって聞かないんだろ？いいよ、問題ない。軍師は費牋がいるし、文官もばちばち育ってきている。長めの新婚旅行だと思つて羽を伸ばして来い。そして、モゲロ」

「先輩、最後のがなければ尊敬して終わつたのにつて！！」

「ははは、冗談だよ」

「改めて、行つて参ります。太史慈さま」

俺は恭しく頭を垂れる先輩や健治たちに向かって頷く。それを確認した兵団たちが先頭から歩みを進めていく。

荷台の上に乗っている大喬と小喬の姉妹が俺に向かって手を振つていた為、俺は大きく手を振り返した。

俺は彼女たちの未来が明るくてより良きものになることを心の底から願うのだった。

先輩や健治たちが会稽に向かつて発つた数日後、俺は藩臨や黄乱たち武將を集めて合同訓練を行つていた。今までは俺の仕事の関係上、書面でしか指示を出してこれなかったがこれからは違う。新しい政策なんかは一日に一件くらいいい方だろうし、ある程度の制度も完全に民の間に認識されてしまっている。

「というわけで、武將組は俺が直々に相手をしよう。兵たちは太史慈隊の者の戦い方を見て学び、自分達の鍛錬に活かす様に。では解散！」

俺の掛け声で山越族の若人衆たちと警備兵たちはケンたちの下に行き、彼らの鍛錬の様子を見学している。俺の周りには藩臨や黄乱、厳虎や厳興といった山越の将たちの他に先日太史慈隊に加わった人員もいる。俺はそこから甘寧と彼女を呼ぶ。

「最初に紹介しておく、新しく我が軍に入ることになった甘興覇と俺の“妹”である太史享だ。甘興覇には今度新設することになった水軍の将に、太史享には弓兵の部隊を率いてもらうことになる。丁奉、君も太史享と共に弓兵の部隊を率いてもらうことになる。部隊運用については黄乱や尤突、費棧から学んでおくように」

「「「はっ」「」」

「では、始めようか。まずは、誰から来るのかな？」

俺は皆を見渡しながら呟くのだった。

その後暫く、皆と身体を動かした後

「お館さま。稽古をつけてもらっておいてなんなのじゃが、本当に同じ人間なのかのう」

「黄乱こそ、その大槌をあんなに素早く振り回して攻撃に転じられることは凄いことだと思うぞ」

「いや、その大槌の攻撃を片手で止められてしまっておるので何も言えんのじゃが」

俺は黄乱と話しながらも現在組み手を行っている厳虎と厳興姉妹の

動きを見ていた。

敵虎は言うなれば、ボクシングや拳闘といった素早い攻撃と手数で攻める戦闘スタイルだ。

対して、敵興はムエタイやキックボクシング、テコンドーといった重い一撃とリーチの長さで攻める戦闘スタイルだ。

2人とも鍛えればいい武将に育つことは間違いが無い。

久しぶりだが、『禁・三国恋姫』のユニット強化について説明しよう。俺は懷からDCPを取り出した。

そうそう、言い忘れていたがこのDCPはこの世界の人間には見えないらしい。これを操作している間、俺は腕を組んで何かを考えているように見えるようだ。この前、ケンに確認を取ったし。

では、改めて説明するでしょう。

- ・ まず強化したいユニットを選ぶ
- ・ アイテムの中から『攻撃力上昇の書・初段』や『防御力上昇の書・中段』といったものを選び、そのユニットに使用する
- ・ すると、使ったアイテムの効果でユニットが強化される
- ・ 問題があるとすれば、この能力上昇のアイテムが中々手に入らないことだ一回の戦争で1個手に入ればいい方というもの……なのだが、周回プレイをしている人間はちょっと事情が違う

・ 自分自身のキャラクターは資金で強化できるが、生み出したユニットや仲間にしたユニットはこの方法でしか強化できないのが悩みかつ、周回プレイには連れて行けないので実はこの能力上昇のアイテムは結構持っていたりするのだ

・ それでは早速やってみようか

俺は画面上で敵虎を選び、アイテムの『攻撃力上昇の書・中段』（攻撃力＋500）を使った。するとその効果がすぐに現れる。

『バキッ』

敵虎が放った右拳は防御している敵興の身体を後方に殴り飛ばした。

「きゃあっ!？」

「銀河!？えっ、なんで!？って、痛いっ。体中が痛いっ!？」

今の今まで拮抗していたのに、いきなり攻撃力が上がって面食らっていた敵虎だったが、突如自分の身体に起こった事態に理解できずに地面の上でごろごろと転がりまわる。

『名前：敵虎 字： 真名：???』

体力：1800 攻撃力：3300 防御力：1650 移動力：182』

中段で、こんなにもダメージがいくのか。ごめんよ、敵虎!と心の中で俺は謝罪した。

でも、このまま姉である敵虎だけ上げておくのもなんだし、敵興に

も使っておこう。ぽちっとな。

「んにゃあああ！？痛いっ！？急に全身の筋肉があああ！？」

地面の上で転げまわる姉妹を心配してか、周りでそれぞれ鍛錬をしていた皆が集まり出した。俺はその光景を見ながら

「……………」

これは滅多なことがないかぎり、使わないほうが良さそうだと思うのだった。

十七話

十七話

健治こと魯肅が建てた学校のおかげで、ある程度仕事のできる人材が集まり始めた。

仕事を分業化し、現代の会社や役所のような効率化を図ることによって、俺の仕事も何%か減り睡眠時間も確保できるようになった。これから、どんどんそういった人材は増えていく予定なので、つらいのは今のうちだけだと希望を持ちながら仕事をしている。

だが、そんな俺を嘲笑うかのようにトラブルはいつも突然やってくる。

「ご報告します」

片付けても減らない文字通り山の如く積まれた書簡を神速のごとき勢いで処理していると、困った表情を浮かべたケンが執務室の扉を開けて俺の元に駆け込んできた。

「どうしたんだ？お前がそんな顔をするなんて、珍しいじゃないか」

「はっ、申し訳ありません。少々、困った事態になりました、私たちではどうしようもできないのです」

「手短に頼む。午後から新しく開拓する区画の改案についての会議があるんだ」

俺は視線を落とし書簡を見る。午後に予定が詰まっている以上、せめて机の上に乗っている分は終わらせてしまいたい。だが、ケンから発せられた言葉に、俺は右手に持っていた太守の印鑑を床に落としてしまう。

「はっ。長沙の太守である孫文台さまが小料理屋『春菊』にて立て籠もっておられます」

「……………は？」

俺は顔を上げて、ケンの顔を凝視する。ここで彼が「冗談ですよ」と言ってくれたらよかったのだが、現在の彼にそんなユーモアはない。彼は至極真面目な顔で説明を開始した。

「朝早くに来店された孫文台さまはそこで酒を三斗程飲まれた所で一度就寝。その後、起きられたところで食事を取られ、『あー、おいしかった。お腹いっぱい。じゃあ、この太守さま呼んでー。私、お金持つて無いんだー』だそうです」

「ははは。江東の虎とあろう者が無銭飲食か、笑えるじゃないか。……………牢屋にぶち込め」

「戦争になります」

冗談だとケンには言ったものの、先ほどの太史慈さまの眼は『本気』でしたと返された。

くそう、午後からの会議は延期してもらわないといけないじゃないか。

今から調整するとなると… 嗚呼！むかつくなあ、おいつ！！

建業の東区画にある小料理屋『春菊』の周りにはちよつとした人だかりが出来ていた。野次馬もいれば、困った顔をした警備兵の姿もある。あからさまに面倒くさそうな表情を浮かべた太史慈隊の連中もいる。

俺が来たことに気付いた民たちが道を開けた。俺はそこを通って、店の中に入る。

店内を見渡すと客は1人しかいなかった。いつもであれば満員御礼で外には長蛇の列がデフォであるこの店にとつては、完全に異常事態である。俺はたった1人しかない客に目を向けた。

長い薄桃色の髪、切れ長の瞳。褐色の肌に赤色の衣を身に纏っている。正面を覆う布地は、首の後ろで結んだ紐によって引つ掛けられており、そのために背中部分は肌も露となっている。江東の虎と呼ばれる武人のものとは思えないほど細い肩も露出しているために妙に艶かしい。

「貴女が孫文台…か？」

「ええ、そうよ。うん、合格♪そんな所に立っていないで、隣に座って」

合格…って、何？そんなことを思い浮かべながらも、俺は彼女の隣の席に座った。

カウンター越しに店主である一角さんを見れば、顔はにこやかに笑っているが腰から下がガクガクと震えている。厨房の方から視線を感じたため、そちらをみると給仕の女の子たちが『家政婦は見たっ！！』と言わんばかりに俺たちの様子を凝視している。

「あー、店主。とりあえず、隣の彼女が食って飲んだ分は俺が払うから」

「い、いえいえいえいえいえ。滅相もございません、太守さま。我々がこうやって、安心して店を開いていられるのも太守さまや兵の皆さんのおかげです。お代は結構ですよ」

「そういう訳にはいかない。店に入った以上、店主の前にいるのは太守ではなく客だ。客が食べて飲んだ分を店主が御代として請求するのは当然のことだ」

俺は懷から財布を出して、給仕の女の子たちの中にいたチヨウを呼んで持っていていかせた。しばらくすると厨房の中から阿鼻叫喚の悲鳴があがったが、俺は気にしない。

「それじゃ、お構いなく。お酒追「却下だ」加……ええー！？どおーしてえー！！」

「人の金で酒を飲むな。ついでにいうと、何で此处なんだよ」

「別にいいじゃないのよー。せつかく、娘や臣下たちの目を欺いてここに着たんだもん。どうせなら街で一番評判がいいお店でおいしいものが食べたいじゃない？」

そう言っただけで嬉しそうに笑う彼女の姿に毒気を抜かれた俺は、

溜め息をひとつついた。そして、心の中で諦めた。

「店主、この店で一番高い酒を開けてくれ」

「おお」

「へ？は、はい！ただいま」

店主が駆け足で厨房の中に入っていく姿を見送り、俺は隣に座っている彼女を見ながら呟く。

「午後からの政務を全部サボるんだ。それでも惜しくなかったって思えるくらい、酌をしてくれよ」

「貴方みたいな人は初めてよ。いいわ、一生忘れられないくらい、いい思いをさせて、あ・げ・る」

そう言つて彼女は俺に腕を絡ませてきた。先ほども思ったが、名だたる武人とは思えないほど、柔らかい肢体に俺の一部が暴走しそうになる。彼女の息遣いを感じ、互いの体温が服を越えて伝わり、その心臓の鼓動も肌を通して伝わる。

「ふふふ。心臓がもの凄く早く鼓動してる。もしかして、こういうの初めて？」

「……黙秘する」

「可愛いわね。からかうのはここまでにしておこうかしら。もしかしたら、娘を貰ってもらわないといけなくなるかもしれないしね」

そう言つて彼女は絡ませていた腕を解き、元の位置に戻った。そして、真剣な面持ちで俺を見つめてきた。

「貴方はこの街を、いえ……。この広大な揚州の地をどうしようと思つているの？」

「どうしよう……。俺はただ領土内を豊かにして、この地に住む民たちが賊や飢饉という恐怖に怯えることなく、ただ平穩に笑顔を絶やさずに生きていける、そんな地にしていきたいと思つている。今はその下準備に追われている段階だけだな」

「もし、それを脅かそうとする敵が現れたら？」

「決まつている。全力で排除するのみだ。相手がどんなに強大であろうとも、それが戦う事の出来る者、護ることが出切る者の義務だろ」

俺は笑つて答える。すると彼女も『ふふふっ』と笑みを零した。

「あーあー、これで貴方が私利私欲に塗れた男だったら、民を解放するつていう大義名分で攻めることが出来たのになー。これで手を出したら私たちが悪者じゃない」

「ははは、残念だったな」

「いいわ。別の方法をとるから」

そう言つと彼女はすつと立ち上がり店の出入り口に向かつて歩みを進める。

「ありがと、貴方と話せてよかったわ。一緒に飲むのはまた次の機会にしましょう」

「ん、そうか？」

彼女が手を振ってきた為、俺も振り返そうと手を上げたところで

「じゃあ、またね。ふふつ、童貞の太守さま」

と、言われた。

『プチッ』↑俺の頭の中で何かが切れる音

俺は素早くDCPを操作して俺自身に金色の籠手を装備する。すると、先ほどまで装備していなかった金色の籠手が俺の両腕に具現化する。それを見ていた太史慈隊の連中が顔を真っ青にして慌てる姿が目映ったが、俺はそんなことは関係なく力を溜める。

「ん、何？」

そう言っただけ振り向いた彼女に向かって俺は全力全壊の拳を放った。

「石破天驚ゴッドフィンガー！！」

「なっ、ちよっ！？嘘でしょ『ガシッ！！』」

石破天驚拳の気弾が金色に輝く巨大な掌となり驚愕して動けなかった彼女の身体を包み込んだ。指の間からなんとか顔を出した彼女は俺や周囲にいる人間に対して助けを求めようとしたが、それよりも早く

「ヒートエンドッ!!」

「誰か助け『ドドーン!!』」

俺のスキルが発動した。

『ぽてっ』という音と共に道端に倒れる孫文台。しかし、先ほどまでの姿とは完全に違う。爆発の影響で身に着けていた紅い衣は弾け飛び、生まれたままの姿を晒しているのだ。

普通であれば美女の裸に誰かが食らいつきそうなものだが、店の前に集まっていた野次馬たちは俺が店から出てきた瞬間一斉に逃げ出した。警備兵も太史慈隊の人間も皆、例外なく。

原因は分かっている。……俺だ。

なんせ野次馬の中にいた子どもが俺を指差して

「あんなの僕たちが好きな太守さまじゃないやい!」

と言って泣きながら逃げていったからな。

「た、太史慈さま。……ごくつ。この方はどうしましょうか?」

いつの間にか俺の右斜め後ろに控えていたケンが恐る恐る声を掛けてきた。

「外套を被せて、俺の部屋に放り込んでおけ。くくく、あんなことを言った責任は取ってもらおうか。くくく、くはーはっはっはっ!

はーはっはっはー！げほげほっ」

「……御意」

新スキル会得

・ スキル（自発）『石破天驚ゴッドフィンガーLv1』：石破天驚拳の派生技。対象の武将1人に対して、6000の固定ダメージを与える。装備破壊効果あり。

十八話（前書き）

あれ？なんでこんなことに？

十八話

十八話

「昨晚はオタノシミでしたね」

自分の部屋を出てすぐ、信頼を寄せる部下から放たれた言葉に放心する俺。

昨日、長沙の太守であり、江東の虎と呼ばれる孫文台が建業を訪れ、とある小料理屋にて会談を設ける形になった。だが、別れ際に彼女が放った言葉に俺は短絡的にキレてしまった。今はちゃんと反省している。

俺が咄嗟に放った攻撃で気絶してしまった彼女をそのまま放置するわけにもいかず、俺はケンに俺の部屋に運ぶように命令した。この時、来客用の部屋に連れて行っていればと思わなかったわけではない。だが、言ってしまったのは自分の部屋だった。

よって、質素な寝巻きに身を包んだ美女を横目に、俺が掛け布団一枚を羽織って椅子に寝る羽目になったのは、自業自得というしかない。

手を出さなかったのかって？

この人は娘がいるって言っていた。誰が、旦那がいる女性に手を出すか！そこまで落ちつぶれていないわ！！

「と、太史慈さまが出てこられたら言うようにと、韓当さまが……」

及川……、今度会った時、真剣^{マシマシ}でシメる。それとケン、それは忘れていい知識だ。いいか、絶対に忘れるよ。分かったな、絶対だぞ！

いつも通り食事を済ませた俺は、執務室に向かい硬い椅子に座った。そして、筆と判子の確認を行う。俺が『ふう……』と息を吐くと同時に、書簡を山ほど抱えた侍女を連れて、我が軍の2大軍師の1人である費棧がやってきた。

「おはようございましゅ、太史慈さま」

「ああ、おはよう。いつもすまないな」

こんな会話をしている横で侍女たちが俺の机の上にどんどん書簡を積み上げていく。文官をあれだけ配置して、仕事を分業化しているのにも関わらず、この量の書簡があるとか太守の仕事マジで大変だわ。

「すみません。私たちの中でまともに書簡整理が出来るのは私だけなので」

「いや、藩臨や黄乱たちには太史慈軍の兵士全体の鍛錬や部隊運用で世話になっている。政務に関してはこれから少しずつ出来るようになっていってもらえばいい。少なくとも、俺がこうやって一生懸命、太守の仕事を全うしているのにそれを肴に酒を飲んでいる“そこ”の人のようにならなければ！」

「その人？……ふわわわ！？どなたでしゅか、この人は！？気配

様子を見て十二分に肥えた所で掠め取ろうと考えている保守派の二手に分かれて議論していたわ」

「どちらもちに攻め入ることにとは変わらないんだな」

「毎日、毎日、あいつらの要望を耳に入れる私の身になって考えてよ。最初、あいつら口を揃えて何て言ったと思う？『我らが祖父の代から継いできたあの地を穢す、あの不屈き者たちを殺しに行きましよう』って言うてきたのよ。私はその時、貴方のことを知らなくて『はあ？』って聞き返してしまっただわ。そしたら出るわ出るわ」

金で太守の地位を買って、連れ込んだ兵を街に住ませて元々いた住民を追い出し、税を引き上げて住民の生活をどん底に追い込み、税を払えなくなったら若い娘を売りに出させ、溜め込んだ金で豪遊をしているとか……って、微妙に合っている所もあるんだけど。

「私は聞き流していたから問題なかったんだけど、娘2人が彼らの言う事を鵜呑みにしちゃってね。寝ても覚めても、『揚州の地を穢す暴漢・太史慈を討つぞー！』っていう感じなのよ。そんな所で真面目に太守の仕事をしているのが馬鹿馬鹿しくなっちゃって、自分の眼で確認しようと思って建業に来た訳」

そう言うって彼女は俺の机に腰掛けた。

「そしたら貴方が治める街や村には警備兵という常駐の兵たちがいて住民を護っていて、街と村を繋ぐ街道はしっかりと整備されていて、商人たちが街や村を行き来して適正な価格で食料を売ったり買ったりするから民が飢えることもなく、私が建業に着くまでに立ち寄った街や村の民は皆笑顔だったわ。そして、口々に言っていた。『私たちの太守が太史慈さまになって良かった』ってね。貴方がど

んなにいい太守かは、ここに滞在している間に色々と見せてもらったからね」

「……………（汗）」

俺は彼女の話聞いていて冷や汗を流しまくっていた。拙い、非常に拙い。

そういう危険な感じになっているところに、『そちらの太守である孫文台を迎えに来てくれ』っていう書状を送ってしまったのか？情報を書曲して、この人に伝えていた奴等の耳に入ったら、こつちを攻め入る口実になりかねない。

「ん？私、かなり貴方のことを褒めているんだけど」

反応をしない俺を心配して、彼女がこちらに顔を向けてくる。

「ちょっと、顔色が悪いわよ！？どうしたっていつの？」

「拙い、戦争になるかもしれない。ケン、非常事態宣言だ！武官、文官をすべて謁見の間に集めろ」

「は？ケンって、あの青年の…って、うわぁ！？何処から来たの！？」

「御意」

俺が呼べば何処にだって現れる太史慈隊のリーダーのケン。たぶん、空間から空間へ移動する術を持っているに違いない。彼は俺の命令を聞いた後、素早い足取りで執務室から去っていった。

「よりによつて先輩のいないこの時期にか。くっ…。ないもの強請りは出来ないか。建業の護りは韓当に任せるしかない」

後のことは謁見の間で各々の意見を聞いて決めていかないと…。というか、なんでこんなことになってしまふんだよ。

謁見の間に集められた武官や文官たちは、青天の霹靂の非常事態宣言に何が起こったのかと議論を交わしている。藩臨や黄乱といった面々は目を瞑り、俺が来るのを待っているようだ。

俺は自分のDCPを懷から出して画面を見た。するとそこには『Warning』という赤い文字が浮かんでいる。

そして、今回の敵の情報が浮かび上がってきた。

【暴走する孫堅軍】兵士総数6万

我が領地をものにしようと迫る狂気に満ちた孫文台が鍛えた将兵が率いる軍団

兵を率いるのは江東の小霸王『孫伯符』

「母さまの仇、必ず殺すわ。覚悟しなさい、太史慈っ!!」

『戦いますか？戦いませんか？』

・戦うなら戦争パートに移ります。

・ 戦わないなら、国レベル・資金・住民感情が激減します

鬱だ。死のう……。

十九話（前書き）

書きなおすかもしれません。

十九話

「突然だが、俺は今から太史慈隊の全員を率いて、孫堅軍と共に江水を中心に活動している江賊団を討伐してくる。その間、君たちにはこの建業の地を護って欲しい」

謁見の間に集められていた武官や文官たちは、俺が告げた言葉を自分の中でしっかりと反復した後、目を白黒させて驚愕の声を上げた。特に韓当は。

「ちょい待てえ！！一刀！おま、何を言っているか分かつとんのか！？」

と、韓当は唇をわななかせ、壇上に一足飛びであがり玉座に腰掛けていた俺の襟首を引っ掴んだ。

彼のその行為に普段の韓当を知る者は皆が自分の目を疑ったであろう。いつも飄々としていて、片想いの女性を口説きに行つては頬に紅葉を咲かせる軟派な男。兵器開発部という職人たちを一手に率いる、見るからに戦う体付きをしていない彼が凄腕の剣幕で自分たちが仕える王に掴み掛かっているのだから。

「江賊団如きに俺たちは遅れを取ることはない。それに、孫堅軍も一緒だ」

「ちやうやろ、今回の敵は江賊やない」

俺と同じ世界の出身でDCPを持つ彼のことで、現在の状況は俺と同じくらい知っているはず。

「近隣の街や村の人たちは、建業へ避難させる。場合によっては田中隊を派遣することになるかもしれない」

「ワイの目を見て言え、一刀！ワイは親友であるお前を死なせたくない！……今回は太史慈軍、全員で当たるんや」

血の気が失せるほどに唇を噛み締め、一瞬のためらいのあとに韓当は提案した。韓当の提案を聞いた費楨や黄乱たちが眉を顰めた。彼女らは太史慈隊の強さを嫌というほど知っている為、今の韓当の発言は聞き流せなかったようだ。

「駄目だ。そんなことが出来るほど、まだこの国は完成していない。隙を見せれば、あつという間に崩壊するような脆く弱い存在なんだ。一応、徐盛には至急建業に戻るように文を出した。直に戻るだろう」

「崩壊したって、何度だってやり直せるやろ？」

「今、この地に生きている人たちの命や笑顔は、一度失えば二度と取り戻せない」

俺は皆に聞こえるように言った後、韓当だけに聞こえるように音量を絞って話しかけた。

「……及川、許してくれよ。俺の頭じゃ、これが限界なんだよ。全軍同士の戦いになってしまっただけは駄目なんだ」

「相手は6万。太史慈隊は5000。いくら、かずぴーが強いからって無謀すぎるやろ。相手は、今まで戦ってきた相手とは違って、鍛え上げられた兵士と、それを束ねる將軍と軍師たちや。そんじょ

そこらの豪族だったら、ワイだってこんな剣幕にはならへん。でもな、相手は江東の虎率いる孫堅軍や。なんで暴走しとるのか知らんけど」

「そこら辺はしっかり考えてあるよ。大丈夫だ。俺は必ず戻ってくる、だから信用しろ」

「……帰ってきたらそのすかした面、一発殴る。絶対や」

そう言つと韓当は俺の襟首から手を離して背を向けた。そして頭を掻きながら階段を一段ずつ降りていって、降りきった所で

「はあ、徐盛が帰ってくるまでは何とかやってみるわ。今まで、やってこなかったしな。蔣欽、歩シツ、2人とも帰るで。技術畑のワイらがここにいてもしゃーないからな」

「ええ？ちよつと主任？」

「……。失礼します」

韓当に呼ばれた2人は周囲を見渡した後、すたすたと出口に向かつて歩いていく彼の後を追つていった。あまりの展開の早さに、頭を抱えている者もいれば、苦笑いをしている者たちもいる。

「太史慈さまがお決めたことですから、臣下である私たちが言うこともないのでしょうか……。帰ってきたら、私たちに本当のことをお話くだしい。太史慈さまの命通り、私たちが全力でこの地を守り抜きますから」

いつの間にか武官や文官たちの列から一歩踏み出した所にいた費楨

がその瞳に涙を浮かべながら告げてきた。見れば藩臨からは鋭い殺気が向けられており、黄乱や尤突といった将たちからは訝しげに見られていた。費棧がこう言ってくれたっていうことは、彼女たちは費棧がなんとか宥めてくれるということらしい。

「ありがとう、費棧。今度、何か好きなものを贈ろう」

「そんなものはいりません。ただ無事に戻ってきてくだされば、それでいいです」

部下に恵まれたな、俺。彼女の思い、そして藩臨たちの信頼を取り戻すために、俺は必ずこの建業に戻ってくる。

いい報告と共に。

その後、建業から出立した俺たちは西に向かってまっすぐ行軍していた。俺は皆に勧められて馬に跨っているが、さつきからお尻が痛くてしょうがない。何度か降りようと思ったが、降りようとする度に手綱を握っているウマが笑顔で「乗り心地はいかがですか」と振り返ってくるので降りられないでいる。

「あーるーこー、あーるーこー。わたしはーげんき」

行軍の先頭に行くのは赤い髪を揺らしながら陽気に歌っているチヨウだ。ちなみに歌っている曲は「さんぽ」、……何故知っている……。その隣には、トレードマークである犬の面を腰の携帯用のポーチに括り付けたケンがいる。彼は隣で歌うチヨウを見ながら何度も溜め息をついている。とても今から命を賭けた戦いに行くような雰囲気

ではない。タツに至っては荷台で横になり、いびきを掻いて眠っているし。

だから、俺が乗っている黒い馬に並走している白い馬に跨っている美女が、頬を引き攣らせながらこんなことを尋ねてくるのは仕方の無いことだ。

「太史慈。貴方が鍛えた兵たちを侮辱するつもりはないのだけれど、……いつもこんな感じなの？」

「さあ、一昔前までは俺が命令したら人形のように敵を殺すだけの集団でしたよ。建業の街で民と暮らすことで、こんな感じになっていったんです。中には家庭を持った奴もいるし……グギギギギギ」

辺りに俺の歯軋りの音が響く。まさか後輩だけでなく、部下にも先を越されるとは、無念。くそ、運命の神め。呪ってやる。呪ってやるぞおおおおお！

「人形ねえ……」

と呟いた彼女は和気藹々と自由気ままにしゃべる彼らを見て、何かを考え込むようにして俯いた。

分かっていると思うが、俺の隣にいる美女というのは孫文台その人である。馬がかっぱかっぱと歩く度に、彼女の薄紫色の髪が揺れる。そして、呉に住む女性特有の大きく実った母性が上下に揺れる。その光景を間近で見た俺はつい手を合わせて拝んでしまう。なんと神々しいことか、先ほどまで荒んでいた俺の心がいとも容易く浄化されていく。

くっ…彼女が人妻でなければ、とつくの昔に……。

「落ち着け俺。ピークールだ」

謁見の間で一悶着あったが、出立に関しては大した問題もなくこうやって太史慈隊のみで向かえている。藩臨の殺気はマジでやばかったが、費牋のおかげで追求されることはなかった。

「及川にも言ったけど、俺の頭じゃこれが限界なんだよ。文台はもう仕方が無いって、最初から諦めていたし」

「自分が治めている地を襲おうとしている者たちの命も救おうとしている貴方に言われたくないわ。民の命を預かる王としては間違った考えだと思うけど、……娘や私を慕ってくれる臣下のことを想ってくれているんですもの、個人的には嬉しいわ」

「あの時も言ったけど、救えるのは数人だからな。少なくとも率先して侵攻すると息巻いていた過激派の人間は助けないからな」

「分かっている。生き残っても皆まとめて処刑されている所を助けてもらうんですもの、高望みはしないわ。助けて欲しいのは、娘3人と私の幼馴染2人とその娘が1人、長沙の太守となった時からの付き合いのある臣下2人の8人よ」

8人。娘3人というのは、長女・孫伯符、次女・孫仲謀、三女・孫尚香。で、文台が全面的に信頼を寄せる臣下っていうのは周扇發、その娘周公謹、黄公覆、祖茂、程普の5人である。

「その他は侵攻に異存なしだったってことか？」

「……………」

質問に答える事なく視線を逸らす文台の姿に俺は肩をがっくりと落とす。

俺はふとDCPを懐から取り出して画面を確認した。

【VS暴走する孫堅軍】

『勝利条件

・ ????

敗北条件

・ 総大将の死亡』

あちらは6万、こっちは屈強な太史慈隊の兵士5000と2人。

さあ、この世界の命運を握る大事な一戦だ。

見せ付けてやろう、この世界の人間に。俺たちの強さを。そして俺が考えた、綱渡りもいいとこの策を。

二十話（前書き）

書きなおすかもしれません

二十話

母さまが殺されたという話を聞いた私は、自分の耳と目の前に立つ初老の男をまず疑った。

母さまは、彗星の如く突然現れ瞬く間に揚州の東側を手中に収めた太史慈の下に同盟を結ぶために向かったと冥琳の母である優衣さんから話を聞いていた。

私個人としては、今までやってきたように武力を以って従わせたほうがいいと思っていたのだけれど、母さまも冥琳も優衣さんも祭も慎重になるべきだ。彼とは友好関係を結ぶべきだと主張してきた。それで先日、母さまは護衛も付けず単身建業に向かった。私たちは母さまが帰ってくるのを、首を長くして待っていた。

だが、そこで告げられたのは母の死。そして、その首は建業の街で晒しものにされていると。加えて、太守である太史慈からはその首を取りに来いという旨の文が届いたという。

母の死を知って嘆き悲しむ者たちを奮い立たせ、私は剣に手をかけた。

「母さまの仇は私たちが討つ！お願い、皆の力を私に貸して」

私は母さまが育て上げた屈強なる将兵を率いてまっすぐ東へ、母さまを殺した太史慈の下へ向かった。

だから、私に母さまの死を伝えた初老の男が私の背後でほくそ笑んでいるのに気付くことはなかったのだった。

長沙から出立した直後は太史慈許すまじという熱気が孫堅軍の將兵たちを包んでいたが、太史慈が治める領地に入り彼が治める村や街を見た將兵たちが、「話が違う」「民たちは皆笑顔だ」と会話しているのを何度も見ることとなった。妹である蓮華も小蓮もしきりに首を傾げている。

心配になった私は冥琳と優衣さんに話を聞きに行つた。そしたら、2人とも顔色を青白くして頭を抱えていた。

「やばいし、拙いし、いったいどうすればいいんだ…」

「ふふふ、終わった。これで太史慈軍と全面戦争になったら、揚州全体が血みどろの戦場になってしまう……」

「兵たちには街や村を襲わないことを厳命させているが、過激派や保守派のアイツ等がどう動くか分からない。草の者達に目を光らせるように言っておかないと」

「冥琳ちゃん、それでは温いわ。そういうことをした者は、即刻処刑にしないと。太史慈軍と対峙した時、釈明が出来なくなるわ」

「…これも雪蓮がアイツ等の言う事を鵜呑みにするからだ！ 私たちが勝ったとしても太史慈の支配下にあった村や街の人間が私たちに武器を向けてくる。負けたらここにいる將兵は皆殺し確定だ。……太史慈が本当に文台さまを殺していたら大義名分を掲げられるが、もし文台さまが生きていた場合、私たちは長沙に帰れなく…いや揚州にいれなくなる」

2人の周りにいた兵士たちの雰囲気がどんよりと暗いものになっていく。私は物音を立てないように後退り、その場に背を向けて走った。口元を手で押さえて走る。

軍から離れた所で立ち止まって空を見上げた。しかし、私が見上げた空には雨雲が掛かっていて、私の心中の状況を表しているかのようだった。

眼前に広がる大草原に、燃え盛る炎のような赤い鎧を身に纏った一団が見えた。旗を見れば、大きく『太』の文字が。

「孫策さま、あいつらですぞ。文台さまを亡き者にした者たちは」

「……うん」

「そんな調子では仇を取ることなど出来ませんぞ。ここは我らが尖兵となりて、敵を討ちましょうぞ。皆のもの、我に続け」

そう言つて侵攻するんだと息巻いていた初老の男が5000人くらいの兵を連れて、赤い鎧を身に纏った太史慈軍へ向かつて駆け出した。冥琳たちが何かを言っているけど、もう止められない。勢いのついた軍勢はそう簡単に止められるものじゃない。止める方法なんて、それこそ敵を屠った時か、私たちの目の前で起こっているように返り討ちにあつた時だけ……。

この光景を見ていた「侵攻するぞ」って息巻いていた過激派に所属する人間も、「後々掠め取ってやるう」と言っていた保守派の人間

も、あちらの圧倒的な強さを予想していなかったのか、顔を引き攣らせている。

どうしようか…。

兵を率いてここまで来てしまったんだもん。私はもう無理ね。

せめて、妹である蓮華たちや母さまが大事にしてきた臣下たちを生き残らせてもらえるように、命を張ってみようかな。私は腰に差していた剣の柄に手を掛けた。

「雪蓮！」

冥琳が私に向かって手を差し伸べてくる。

「……ごめんね、冥琳。皆が生き残れるように、私戦ってくる。蓮華、シャオ、冥琳や優衣さんの言うことはちゃんと聞くのよ。私みたいになっちゃだめだからね」

「姉さま！」「お姉さま！」

2人が私の服を掴んで放さない。

私は祭と祖茂に目配せをした。すると2人は苦悶の表情を浮かべたものの、2人を私から引き離してくれた。

「策殿」

「我らもすぐに逝く。だから心配することはない。あちらでまた酒を交わそうぞ」

「あはは、うん。2人とも楽しみにしているわ。じゃあ、冥琳。私の生き様、そして死に様を見届けてね」

「……ああ、分かった」

「行つて来る」

私は悠然と歩みを進める。後ろから泣きじゃくる妹たちの声が聞こえる。耳を塞いでしまいたかった。

歩み続ける度、死が刻々と近付いてくるようだけど、私の心は意外と落ち着いていた。

瞼を閉じると色々なことを思い出す。母さまと稽古をした時のこと、冥琳と断金の誓いをした時のこと、蓮華と一緒に遊んで転んだあの子を慰めたこと、シャオと街を散歩して迷子になった時のこと。

「あの時は母さまにこっぴどく叱られたっけ、ははは。……はあ、死にたくないな。皆とまだ一緒にいたい」

けど、それを出来なくしたのは私自身。自分では確認していないのに、臣下から教えられた情報のみを信じて行動した結果がこれなのだ。そう私は自分に言い聞かせる。でないと、私の両目から零れ落ちる涙を止めることができないから。

赤い鎧の一団の先頭に金色の籠手をつけた背の高い黒髪の男と、薄紫色の髪を揺らす女性が立っていた。

恐らく太史慈と……って、

「母さま?。」

「そうよ、雪蓮。久しぶり」

「やっぱり、嘘だったんだ。母さまが死んだなんて」

「（ちらつ）……。実わね、雪蓮。私、太史慈の城で刺客に襲われたの。そこで手傷を負ったおかげで、長沙に帰るのが遅れてしまったの（棒読み）」

「そ、そうなの!？」

「でね、その刺客は太史慈との同盟をよく思わない連中が放ったものだとわかって……。つまり、私は臣下の誰から狙われたことになるのよ（棒読み）」

「そ、そんなつ!？」

「私の隣にいる太史慈は状況を察知して、事が大きくならないように自分の部隊だけを連れてここに来たの。つまり、雪蓮。これからの貴女の行動次第で、揚州の未来が決まるの。だから、何も言わないで死んだ振りをなさい」

「へ?死んだ振り?そんなことでなんとかなるの?」

「雪蓮」

「……きゃあ、やーらーれーたー!。（ぱたっ）」

私は大袈裟な声を上げつつ大地に倒れこんだ。心なしか母さまから可哀想なものを見るかのような視線を感じた気がする。

雪蓮が下手な演技で私たちの前に倒れこむと同時に、私の軍に動きがあった。

私たち目掛けて攻め込んでくる一団と、我先にと逃げ出す一団。

「太史慈さま、我らに向かってくる者たちは殺してはならない…、でしたね」

「ああ、その通りだ、ケン。ああやって向かってくるのは、孫文台と孫伯符のことを心の底から想っている者たちだ。だから傷つけるわけにはいかない。むしろ、王が目の前で殺された（演技）のにも係わらず、その敵に対して背を向けて逃げ出すような輩に用は無い。後のことは、文台が自ら行うさ」

「ええー、私はもう嫌よ。私ね、この戦いが済んだら優衣や祭と一緒に毎日おいしい料理を食べておいしいお酒を飲んで暮らすの。…建業で」

「ふざけんな」

即行で却下されちゃった。

ぶーぶー、私は断固講義するぞ。揚州は丸ごと太史慈が治めた方がいいのよ。私や雪蓮が長沙に戻ったって、彼らはどうにもならないの。太史慈が治めることになったら、彼らは揚州の地を去るしかない

くなる。そうなるのが、この揚州に住む民たちにとって最もいいことなのよ。

「長沙の民はどうするの、母さま？」

「雪蓮、死んだ振り」

「……………」

返事が無い、生きた屍のようだ。

さて、もうそろそろ眼のいい人たちが私の存在に気付く頃よね。

あ、先頭を走ってきた祭が目をまん丸にして驚いてる。その隣にいるのは猛火ね。彼の背中には蓮華と小蓮もいて、泣いているのか喜んでいいのか分からないくらい顔をぐしゃぐしゃにしている。それに合わせて兵たちから困惑の声が上がり始める。確かに誰も経験した事が無いくらい、様々なことが起こっているわよね。

「これはどういうことなの？美蓮」

状況が理解できていないのか、そんなことを口にしながら私たちに近付いてくる優衣。

「文台、誰なんだ？」

隣にいた太史慈が私に声を掛けてくる。

「大丈夫、彼女は私の幼馴染で名前は周扇發。私が最も信頼する人間よ。優衣、紹介するわ。彼が建業の太守である太史慈よ」

優衣は訝しげな眼で太史慈を見上げ、太史慈は頬をぽりぽりと掻き
つつ苦笑いを浮かべるのだった。

二十一話

俺たちの領土を我が物にしようとしていた輩は、1人残らずさつさと逃げ出していった。おかげで孫堅軍の兵士たちにも伯符同様に死んだ振りをしてもらう必要がなくなった。驚いたことに逃げ出したのは將軍だけで、兵士たちは俺たちに向かってきていた。うん、孫一家はどれだけ民に慕われているんだ。

文台は揚州丸ごと俺が治めたほうがいいと言っていたが、そんなの彼女が治めてきた領民が許すはずも無い。同じ州に住んでいる者たちがいがみ合うのなんか俺は見たくない。文台や伯符たちが、あやつて家族の無事と再会を喜んでいる今のうちに、深く係わらないよう逃げ出すのが吉というものだろう。

俺はそう思いケンに指示を出そうと振り向いた。しかし、そこには上半身裸の大男が腕を組んで立っていた。思わず見上げた俺の視線がちょうど俺を見下ろしていた大男の視線と交差する。

「……がーはっはっは。良きかな、良きかな。文台が認めた男はどれほどのものかと思うたが、……くくく。我を見ても動じない胆力の持ち主かつ、あやつらの主となると腕っ節も期待できる。さあ！我と勝負じゃー！」

と何の突拍子もなく俺に向かって右拳を突き出してきた大男の拳を左手で軽く逸らして、がら空きとなった大男の腹に拳を叩き込む。『ごばあああ！？』と吐血しながら崩れ落ちる大男を無視して、ケンらの下へ向かうと皆まとめて見るも無残に倒れ伏していた。チヨウに至っては「筋肉怖い筋肉怖い筋肉怖い」とトラウマを植えつけられている。

「…ごおお、見事じゃ。我の名は祖茂。文台が認めた男よ、貴様の身に何か困ったことが起きた時、我が力を貸『ゴスッ』ブッ!?」
腹を押さえながら片膝を立て、俺に向かってナイスガイな笑みを浮かべてきた大男の脳天に踵落としを決めた俺はそのまま、その男の頭に足を乗せて体重をかける。

「おい、おっさん。俺の大事な部下になにをしてくれとんのじゃ? ああッ! ふざけるのはその筋肉だけにしとけよ」

「ぐむむむ」

おっさんは何とか立ち上がろうとするが、俺の方が能力は上ステータスのために立ち上がる事が出来ない。するとおっさんがひとつ深呼吸をした。なるほど一気に来る気が……いいだろう。俺は右拳を握り締めた。そして、おっさんが力を入れると同時に足をどけて右拳を突き出す。

「石破天驚拳ッ!!」

「があああああッて、なん『ガスッ!!』じゃああああああ
————『キラン』」

「『『猛火あああああ!』』」 「『おじちゃん!?』」

いつの間にか俺たちを取り囲んでいた孫堅軍の将たちとお嬢ちゃんたちが、彗星の如く飛んで行ったおっさんを見て悲鳴のような叫び声を上げた。彼が星になったのを見届けた段階で、黄公覆を中心に何名かが合掌した。

「惜しい奴をなくした。じゃが、あ奴がおらんほうが話しは進むじやろ。のう、堅殿」

「……そうね。猛火は強い人間を見ると戦いたくてしょうがなくなる人だから、その点では祭に賛成ね。ところで、太史慈。貴方、何故私たちに背を向けていたのかしら？長沙はこっちなのに」

「ははは、何を言うのかな文台？俺は領土を守れて万々歳。文台は自国の民と家族と臣下を守れて万々歳。……ここで別れても問題ないだろ？」

「大有りよ！」

ちい…あのおっさんに絡まれている間に、『孫一家・涙の再会編』は終了してしまったか。しかし、まだ次がある！

「これからのことを話し合う前にすることがあるだろ、文台。今回、文台の娘たちが暴走したのは何故だ？正直に言おう、俺は家族の信頼関係が薄れてきていたからだと思う。どうだ、文台？心当たりは無いか？仕事に忙しくて家族に構ってあげられていなかったとか、家族としての会話が持ててなかったとか」

「言われてみれば、そうだったような気がしないでもないような…」

そう言つて文台はちらりと娘たちの表情を窺う。見れば伯符たちも『そつえば』みたいな表情を浮かべている。

ふっ、俺の目論見通りっ！

「文台、今は俺よりも家族のことを優先しろよ。俺は少し離れた所にいるからさ（無論、建業に向かうけど）」

「……そうね。雪蓮、蓮華、小蓮。3人とも来なさい。優衣、冥琳ちゃん、太史慈との交渉お願い」

「分かっています。なんせ、今にも逃げ出しそうですからね、彼」

「普通、領地をそのまま明け渡すと言われたら喜ぶものだと思うのだがな」

ちい！今度は孫呉の頭脳と言っても過言では無い周公謹とその母親・周扇發が相手か。

まずは、軽いジャブで先制して、ひるんだ所で畳み掛けるしかない。

「あー…、文台に聞いたんだが2人は軍師なんだよな。何故、今回のような事が起こったんだ？2人のことだ、少なくとも近隣諸国には密偵なり暗部なり送りこんでいたはずだよな」

「ええ、その通りよ。ただし、貴方の所に送った暗部の者たちは1人残らず帰ってきていない上に、音沙汰なしですけど」

「……つまり振り返りにあつたっていうことか。……俺や韓当は関与していないから、そういったことは徐盛の担当。あー、徐盛の部下以上の戦闘力を持っていないと生きて帰れないという訳か、なるほど」

「暗部の人間に戦闘力を求めるのは貴方の所くらいだと思うわ」

公謹と扇發はそれぞれ腕を組んで深い溜め息をついた。

その光景を見ていた俺は頭の中で『むぎゅっ』という擬音が相応しいなと考えていた。くそう彼女たちは何とも思っていないようだ。俺にとつては見せ付けているようにしか見えない。ここまで反応してしまっているのは俺が飢えているからだろうか。

さつきまでは、早く建業に帰らないと揚州を丸ごと任されるかもしれないっていう面倒くさい事態になりかねないと焦っていたからか、この楽園の状態に気がついていなかったのだ。

まず、文台。俺が短絡的に『キレ』て弾けさせてしまった服はちゃんと同じものを職人に作らせることによって弁償したので、うなじから腰の辺りまでの背中が丸見えです。お尻のラインまでくつきり。ちっ、人妻でなければ。

次に、伯符。褐色の肌に露出の多い赤い衣を身に着けているのは母親の文台と同じだが彼女の場合、胸が、お胸さまがが素晴らしいことになっている。どうやって、あの位置に引っ掛けているのか意味不明だが、木の枝が何かに引っかっただけでポロリが発生してしまいそうなほど、男心を攪るもとい危うい服を着ているのだ。

三姉妹の末っ子はともかく次女の孫仲謀。ネット上で大人気かつ『禁・三国恋姫』のキャラクターで『嫁にしたいヒロインランキング No.1』の異名は伊達じゃない。まだ幼さが残るあどけない顔立ちだが、胸元からおへその辺りまで見事に開いた扇情的な赤い衣装と、国宝級の美尻は……ゴクリ。

「ん、どうしたのだ？ そんなに眉を顰めて」

「……ほつといてくれ」

俺の前で首を傾げる公謹。彼女もまた見惚れてしまう程の美人である。美しい長い黒髪、眼鏡の奥に光る理知的な翡翠色の瞳、赤い衣から覗く褐色の肌はまた何ともいえないほどの艶めかしさである。

その母・扇發も同じような服装だが、娘とは決定的に違う所がある。それは肌の色。彼女の肌は陶磁器のような白色をしているのだ。ああ、彼女のお胸様がまん丸のお餅に見えてしまう。きっと、揉み応え十分なのだろうな…。

「……主も男じゃのう。誰が一番好みなんじゃ？」

「俺の中では伯符かなって思っていたけど、今回のこともあるし。そういう点も含めたら、落ち着きのある公覆かな。正直いうとあのいかにも『女』っていう感じの肢体を俺のモノにしてみたいっていう気持ちは強い…かな。…って、この話を振ったのはどのどなたかな？」

「くくく、さて。どのどなたじゃろうな」

振り返っちゃいけない。何かそんな感じがする。

「僕もまだまだ捨てたもんじゃないのう。こんな立派な男に見初められようとは…、今夜はしっかりと身を清めておかんといけないのう…。いや、もしかしたら…このままの方が良いというかもしれない。どうしたものかのう…主はどう思う？」

背後から凄い期待の籠った視線を向けられている気がする。いや、でもこれはチャンスなのではないか？

黄乱の時は、がつつき過ぎて断られてしまったが、今回は結構好印象を与えているっぽい。けど、会ったばかりの男に身体を許す女がいるか普通。

「からかっているのだろう、黄公覆？」

「ふむ、この程度の誘いには乗らんか。もし、乗ったら骨の髄までしゃぶりつくしてやろうと思っておったのにのう」

俺の肩をぼんと叩きながら横に来た公覆。その隣には空色の髪を持つ文官ばい女性が立っていた。呉のヒロイン特有のモノがない『ギランツ』な……って思ったらいきなり睨まれた。それはもう視線だけで人が殺せたら、瞬殺だっただろうなと思えるほど鋭い睨み方だった。

「くっ、どうして。どうして私の胸は皆のように育たないのですか。蓮華ちゃんですえあんなにも女らしく育ってきているというのに。好き嫌いなんてないし、胸にいいからって商人から買ったギユウニユウだって毎日飲んでいるのに」

『むにむに』と呉の将としては控えめな自分の胸を揉む彼女の姿を完全に凝視してしまっていた俺は公覆に小突かれた。

「所で太史慈よ、堅殿たちの話は終わったようなのじゃが、どうするんじゃ？」

は？

公覆の言葉を聞いた俺は、先ほどまで『孫一家・家族の団欒編』を

やっていた場所を見た。孫一家が涙を流しながら抱き合っているのが見えた。拙い、家族の絆が深まっているのは間違いが無い！即刻逃げなくては！！

「儂らが逃がすと思うてか？」

結局、俺は文台を慕う臣下の者たちにきつちりと足止めされ、逃げることも叶わず売られた子牛の様に長沙まで連れて行かれるのであった。

しかも逃亡防止にと末っ子の孫尚香を預けられた。

彼女は俺の事情などお構いなしに抱きついてきたり、勝手に肩に飛び乗ってきたり、俺の背中で寝たり、とまるで父親に甘える娘のようになって、また俺が父親ポジかい！！

恋人も出来た事がないっていうのに、何故に子供が先に出来るんだ。

……そういえば、大喬も小喬も母親を連れて遊びにくるっていつていたっけ。2人とも元気になっているかなあ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6422y/>

『禁・三国恋姫』

2012年1月10日22時16分発行